長野川流域の遺跡群Ⅲ

飯原門口遺跡

福岡県前原市大字飯原(いいばる)字門口(もんぐち)所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 72 集

付編1．川付宮ノ前遺跡

2．長嶽山古墳群　長尾山古墳　林崎古墳

2001

前原市教育委員会

長野川流域の遺跡群Ⅲ

飯原門口遺跡

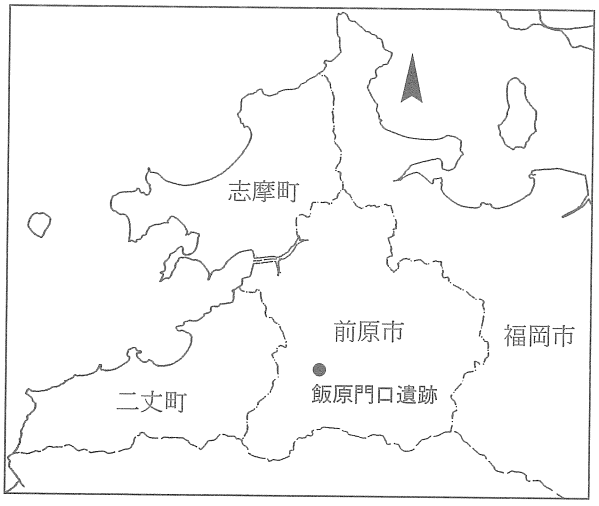
福岡県前原市大字飯原(いいばる)字門口(もんぐち)所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 72 集

付編１．川付宮ノ前遺跡

２．長嶽山古墳群　長尾山古墳　林崎古墳



２００１

前原市教育委員会

a．飯原門口遺跡全景（昭和63年）

b．飯原門口遺跡　第１地点

a．第１地点　１号掘立柱建物

b．長野古墳出土　長頸壺

序

前原市を中心とする糸島地方は原始から中世にいたるまで埋蔵文化財が密に分布する、全国屈指の文化財の包蔵地帯です。

とりわけ弥生時代から古墳時代にかけて「魏志倭人伝」に記された『伊都国』の地とされ、わが国の古代国家形成に深く係わった地として古代史上最も重要な地域のひとつといわれています。

長野川流域にも、国史跡「一貴山銚子塚」、「釜塚」をはじめ貴重な文化財が数多く残っています。近年、県営圃場整備、道路建設等に伴う発掘調査によってさらに多くの文化財が発見されました。

本書では、平成11年度に実施した飯原門口遺跡の発掘調査の成果を報告いたします。調査の結果、縄文時代から中世にいたる多くの遺構、遺物が確認され、長野川流域一帯の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が、学術研究の資料として、また文化財の保護思想の啓発・普及に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査に後協力いただきました地権者のみなさま、ならびに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月31日

前原市教育委員会
教育長　三　嶋　利　彦

例　　言

1．本書は福岡県前原市大字飯原字門口所在遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査および、資料整理は平成11、12年度に国県補助事業として前原市教育委員会が実施した。

　なお、昭和62年度から63年度にかけて門口地区および近接する大字川付字宮ノ前における県営圃場整備事業に伴い実施した発掘調査等の成果、および周辺古墳群の測量成果も本書に収録している。

3．本書に使用した遺構図の実測は、岡部裕俊（前原市教育委員会）が行ない、図面の整理は島影やよい、友池真由美が参加した。遺物の整理ならびに実測は主に牟田華代子（前原市教育委員会）、川上辰子、島影やよい、岡部が行なった。

4．遺構写真の撮影は岡部が、遺物写真の撮影は岡部、牟田が行なった。

5．本書で使用した1／50,000地形図（第1図）は昭和63年11月30日国土地理院発行地形図「前原」「福岡」「浜崎」「脊振山」により作成した。また、1／4,000地形測量図（第3図）は、昭和56年度に前原町（現前原市）が作成した1／2,500都市計画図を元に作成した。

6．本書で報告した資料は、一括して伊都歴史資料館にて保存、管理する予定である。なお、今報告書で使用した調査地点の呼称について、報告書作成の都合上、調査時の地点名から下記のとおり変更している。

調査時地点名		報告書中地点名
昭和63年度	→	第8地点
Ⅱ　区	→	第4地点
Ⅲ　区	→	第3地点
Ⅳ　区	→	第6地点
Ⅴ　区	→	第7地点
Ⅵ　区	→	第5地点
Ⅶ　区	→	第2地点

7．本書の執筆は、甕棺については牟田が執筆し、出土ガラス玉の材質分析結果については比佐陽一郎、片多雅樹氏（福岡市埋蔵文化財センター）に執筆頂き、他は岡部が執筆した。編集は岡部が牟田と協議のうえ行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査にいたる経過 …… 1
2．調査の組織 …… 2
Ⅱ．調査の記録 …… 5
1．位置と環境 …… 5
2．飯原門口遺跡 …… 10
(1) 遺跡の概要 …… 10
(2) 第１地点 …… 10
墳墓　掘立柱建物　柵列　土坑等　溝
(3) 第２地点 …… 22
古墳　竪穴住居　溝
(4) 第３、４地点 …… 34
掘立柱建物　溝　杭列　不整形土坑
(5) 第５地点 …… 44
土壙墓　竪穴住居　溝
(6) 第６地点 …… 60
甕棺墓　土壙墓　竪穴住居　落とし穴　溝
(7) 第７地点 …… 72
掘立柱建物
(8) 第８地点 …… 73
出土土器
(9) 飯原門口遺跡出土ガラス玉の分析結果について（比佐陽一郎） …… 79
(10) おわりに …… 81
付編１．川付宮ノ前遺跡 …… 84
付編２．長嶽山古墳群　長尾山古墳　林崎古墳 …… 87

図　版　目　次

巻頭図版１　ａ．飯原門口遺跡（昭和63年）
　　ｂ．飯原門口遺跡第１地点全景
巻頭図版２　ａ．第１地点　１号掘立柱建物
　　ｂ．長野古墳出土　長頸壺
図版１　飯原門口遺跡全景（北から）
図版２　ａ．第１地点全景（南から）
　　ｂ．第１地点南部近景
図版３　ａ．土壙墓群近景
　　ｂ．１号土壙墓断面土層
図版４　ａ．２号土壙墓
　　ｂ．２号土壙墓土師器椀、ベンガラ出土状況
図版５　ａ．土器棺出土状況
　　ｂ．１、２号掘立柱建物
図版６　ａ．１号掘立柱建物（真上から）
　　ｂ．同　　上（南から）
図版７　ａ．１号掘立柱建物柱穴１断面土層
　　ｂ．１号掘立柱建物柱穴２断面土層
図版８　ａ．１号掘立柱建物柱穴３断面土層
　　ｂ．１号掘立柱建物柱穴４断面土層
図版９　ａ．３号掘立柱建物（西から）
　　ｂ．３号掘立柱建物焼土廃棄坑検出状況
図版10　ａ．４号掘立柱建物（西から）
　　ｂ．鎌倉時代掘立柱建物群（北西から）
図版11　ａ．柵列（南西から）
　　ｂ．10、11号土坑（西から）
図版12　ａ．１、２号土坑土器出土状況
　　ｂ．３号土坑土器出土状況
　　ｃ．12号土坑石斧出土状況
図版13　ａ．13号土坑
　　ｂ．Pit 95土器出土状況
　　ｃ．１号溝土器出土状況
図版14　ａ．第２地点全景（西から）
　　ｂ．同　　上（真上から）
図版15　ａ．門口古墳全景
　　ｂ．門口古墳石室（東から）
図版16　ａ．門口古墳石室（北から）
　　ｂ．石室左袖下敷石遺存状況
図版17　ａ．１、２、３号住居群
　　ｂ．周溝状遺構
図版18　ａ．１号住居周辺土器出土状況
　　ｂ．同上近景
図版19　ａ．３号住居（西から）
　　ｂ．３号住居土器出土状況
図版20　ａ．２号住居
　　ｂ．２号住居周溝土器出土状況
図版21　ａ．３号溝状遺構土器24出土状況
　　ｂ．Pit 31石斧出土状況
図版22　ａ．第３地点全景（南から）
　　ｂ．第３地点南半部不整形土坑群近景（西から）

図版23　a．１号溝
b．１号溝断面
c．１号溝内高杯出土状況
図版24　a．１号建物柱穴８柱根出土状況
b．１号建物柱穴10柱根出土状況
図版25　６号土坑上層（４層）土器出土状況
図版26　a．第４地点全景
b．同上掘立柱建物群近景
図版27　第５地点全景（北西から）
図版28　a．第５地点Ａ、Ｂ、Ｅ住居群
b．２、３、４、５号住居
図版29　a．Ｂ住居群
b．18、19号住居近景
図版30　a．６、７、22号住居近景
b．６、７号住居土器出土状況
図版31　a．20、21号住居
b．第５地点Ｄ、Ｅ住居群
図版32　a．14、15、16、17号住居
b．８、９、10、11、12号住居
図版33　a．１号土壙墓
b．２号土壙墓
図版34　a．第６、７地点全景（南から）
b．第６地点全景（真上から）
図版35　a．第６地点１号住居
b．同上土坑内土器、砥石出土状況
図版36　a．１号溝土層断面
b．第６地点甕棺墓群全景
図版37　a．甕棺墓群北拡張区近景
b．３号甕棺墓検出状況
c．３号甕棺墓棺掘状況
図版38　a．１号甕棺墓
b．６号甕棺墓
図版39　a．５号甕棺墓
b．２号甕棺墓
図版40　a．４号甕棺墓
b．落とし穴
図版41　第７地点全景（真上から）
図版42　a．川付宮ノ前遺跡全景（東から）
b．竪穴住居全景（北西から）
図版43　a．川付宮ノ前遺跡竪穴住居カマド検出状況（南から）
b．同　　上（南東から）
図版44　飯原門口遺跡出土遺物①
図版45　飯原門口遺跡出土遺物②
図版46　飯原門口遺跡出土遺物③
図版47　飯原門口遺跡、川付宮ノ前遺跡出土遺物
図版48　長嶽山古墳群、長尾山古墳俯瞰（東上空から）
図版49　a．長嶽山１号墳近景（北から）
b．同上２号墳近景
c．２号墳石室閉塞状況
図版50　a．長尾山古墳全景（西から）
b．長尾山古墳西裾切土状況
c．１号石室（奥壁から前壁をのぞむ）

挿　図　目　次

第１図　飯原門口遺跡の位置と長野川流域の主な遺跡（1／50,000）…… 4
第２図　長野古墳出土須恵器長頸壷実測図（1／4）と人物線刻画拓影（1／2）…… 6
第３図　飯原門口遺跡の範囲と調査地点（１／4,000）…… 7
第４図　飯原門口遺跡周辺の新旧地割と調査地点（1／2,000）…… 11
第５図　第１地点遺構配置図（1／150）…… 13
第６図　１、２、３号墓実測図（1／20）…… 14
第７図　１、２号掘立柱建物実測図（1／60）…… 16
第８図　３、４号掘立柱建物実測図（1／60）…… 17
第９図　土坑等実測図（1／20）…… 19
第10図　溝の配置（上 1／300）および断面実測図（下 1／20）…… 20
第11図　第１地点出土遺物実測図（１～３は1／4、23は2／3、他は1／3）…… 21
第12図　第２地点遺構配置図（1／150）…… 23
第13図　門口古墳墳丘（上 1／100）、石室（下 1／40）実測図…… 24
第14図　１、２号住居実測図（1／60）…… 26
第15図　３号住居実測図（1／60）…… 27
第16図　溝状遺構実測図（1／60）…… 28
第17図　第２地点出土遺物実測図①（1／4）…… 30
第18図　第２地点出土遺物実測図②（1／4）…… 31
第19図　第２地点出土遺物実測図③（27～31は1／4、32～37は1／2）…… 32
第20図　第３地点遺構配置図（1／150）…… 34
第21図　第４地点遺構配置図（1／150）…… 35
第22図　第３、４地点１号掘立柱建物実測図（1／80）…… 36
第23図　２、３、４号掘立柱建物実測図（1／60）…… 37
第24図　第４地点５、６、７号掘立柱建物実測図（1／60）…… 38
第25図　第３、４地点古墳時代遺構配置図（1／300）…… 40
第26図　第３、４地点出土土器実測図（1／4）…… 41
第27図　第３地点出土石器実測図①（1／2、3／1）…… 42
第28図　土壙墓実測図（1／20）…… 44
第29図　第５地点遺構配置図（1／200）…… 45
第30図　１、２、３、４、５号住居実測図（1／60）…… 48
第31図　６、７、22号住居実測図（1／60）…… 49
第32図　８、９、10、11、16号住居実測図（1／60）…… 50
第33図　12、13、14、17号住居実測図（1／60）…… 51
第34図　15号住居実測図（1／60）…… 52
第35図　18、19、20、21号住居実測図（1／60）…… 53

第36図　第５地点出土土器実測図①（1／4）…… 56
第37図　第５地点出土土器実測図②（1／4）…… 57
第38図　第５地点出土遺物実測図③（1／4）…… 58
第39図　第５地点出土遺物実測図④（1／4、1／3）…… 59
第40図　第６地点遺構配置図（1／200）…… 61
第41図　１、２、３号甕棺墓実測図（1／20）…… 62
第42図　４、５、６号甕棺墓実測図（1／20）…… 63
第43図　１、２号甕棺実測図（1／8）…… 64
第44図　３、４、号甕棺実測図（1／8）…… 65
第45図　土壙墓、落とし穴実測図（1／20）…… 66
第46図　第６地点竪穴住居（1／60）および出土遺物実測図（1／4）…… 69
第47図　第７地点遺構配置図（1／150）…… 71
第48図　第７地点掘立柱建物実測図（1／60）…… 72
第49図　第８地点出土土器実測図（10は1／2、他は1／4）…… 74
第50図　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析結果…… 81
第51図　飯原門口遺跡主要遺構配置図…… 83
第52図　川付宮ノ前遺跡遺構配置図（1／100）…… 85
第53図　竪穴住居、掘立柱建物（1／60）と碧玉製管玉（1／2）実測図…… 86
第54図　長嶽山古墳群（1／1,600）と１、２号墳墳丘測量図（1／400）…… 88
第55図　長尾山古墳群墳丘測量図（1／400）…… 89
第56図　林崎古墳墳丘測量図（1／400）…… 90

表　目　次

第１表　飯原門口遺跡出土土器観察表①　……　75
第２表　飯原門口遺跡出土土器観察表②　……　76
第３表　飯原門口遺跡出土土器観察表③　……　77
第４表　飯原門口遺跡出土土器観察表④　……　78
第５表　飯原門口遺跡出土石器、鉄器観察表　……　78

Ⅰ．はじめに

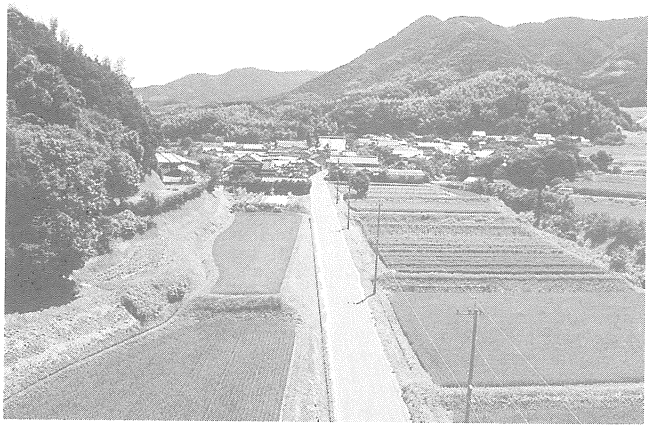
１．調査にいたる経過

飯原門口遺跡は前原市の西南部、長野川河口から６キロほど溯った中流右岸に位置する遺跡である。

長野川は前原市の西端を標高900ｍの羽金山を源として北流する総延長10kmほどの２級河川である。古来より怡土西部地方最大の河川として、長野川の川筋だけに及ばず、隣接する二丈町一貴山地区の灌漑用水の供給源として、当地方の農業経営に欠かせない貴重な川であった。

川の下流域では農漁村地帯から、近年の幹線道路整備やＪＲ筑肥線複線化など交通基盤の整備を背景とした都市化に伴い、住宅地、商業地帯へと姿を変えつつある。一方中流域では今日でも基幹産業として農業が営まれているものの、近年では米つくり中心から野菜、花卉（かき）生産へと、経営形態は大きく様変わりしている。飯原門口遺跡はまさに営農地帯の真っ只中に所在する遺跡である。

調査の契機となったのは、平成11年５月に地権者である有富亨氏、波多江正人氏、吉富剛氏から提出された埋蔵文化財包蔵地発掘届による。届出地は周辺農地の中でも最高所に位置し、長年畑地として利用されてきたが、現況で隣接道路より３メートルほど高いため農作業車両の出入りが困難で農作業に著しく支障をきたしていること。畑の背後に控える急峻な山から流れ落ちる雨水によってしばしば土砂崩れを起こすことから、防災の見地からも道路高まで地下げし農地を整備するとともに山裾の防災工事を施したいとのことであった。



現在の飯原集落（後方は雷山神籠石）

市教育委員会では、届出地が周知の文化財包蔵地「飯原門口遺跡」であったため、遺構の有無、その内容について確認するため試掘審査を行なったところ、耕作土下の包含層から弥生～中世の土器等が出土し、その下層から柱穴、土壙も検出した。

このため当該地の文化財保存について地権者と協議したが、土地改良への思いは強く、防災の必要性等も考慮して、発掘調査を実施することとした。

調査にあたっては、個人農地の改良工事であることから平成11年度の国・県補助事業として実施した。

調査はまず、調査地点の表土、および遺物包含層の大半を重機によって除去し、遺構面に到達してからは人力により手掘りで遺構の掘削を行なった。当該年度は現地調査を５月19日から開始し、９月７日まで実施し、以後遺物、図面等の整理を行ない、発掘調査報告書の作成に備えた。また、調査期間中８月８日には遺跡の現地説明会を開催し、多数の見学者が訪れた。

平成12年度は国・県補助を得て前年度に引き続き遺物、図面の整理、分析等を実施し、発掘調査報告書の刊行にいたった。

ところで、飯原門口遺跡が周知の遺跡となったのは1987年（昭和62年）７月のことである。当該年度の長野川流域における県営圃場整備事業の工事中に、門口地区の丘陵裾の湿地から大量の弥生土器が出土し、遺跡の存在が初めて周知のものとなった。

翌1988年（昭和63年）には一帯の試掘調査を実施して、古墳など多くの埋蔵文化財の包蔵を確認するとともに、工事により遺跡の破壊が予測された計６地点について国・県補助を受けて発掘調査を行っている。飯原門口遺跡の解明にはこれら既往の調査成果の報告が不可欠と判断し、本報告書中にまとめた。

また、市内遺跡詳細分布調査に伴い近隣の長嶽山（ながたけやま）古墳群、長尾山（ながおやま）（川付）古墳、林崎古墳の現況測量調査を実施しており、川付宮ノ前遺跡の調査成果とともに付編として報告するものである。

２．調査の組織

平成11、12年度の調査に係る組織は以下の通りである。

調査主体　前原市教育委員会

調査総括　前原市教育委員会　教育長　三嶋利彦（平成12年度）
　　坂本勝喜（平成11年度）
　　教育部長　有田種之
　　文化課長　松井　昇
　　文化課参事　小池史哲（平成12年度）
　　文化財係長　林　　覚
庶務　　文化振興係　大西将夫（平成11年度）
　　濱地　克（平成12年度）
調査・整理担当　文化財係主査　岡部裕俊
　　嘱託　牟田華代子（平成12年度）

調査作業員　青木輝代、川上久美子、川上豊子、川上モモエ、藤木和子、中田朋子、市丸直子、溝口ヨシノ　友岡千恵子　中原マチ子

整理作業員　川上辰子　島影やよい　友池真由美、岡田りつ子、柏田睦子、藤森啓子、和田治子

また、調査を実施するにあたり多くの地元関係者の皆様にご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

有富つたえ、友岡千恵子、大谷ナヲ子、吉丸富士子、川上ハルエ、平山富士子、中峰幸枝、青木シゲ子、原野アサ子、東司テル子、青柳玲子、井上カツ子、高田とよみ、大塚房子、青木和子、筒井アサ子、森山シゲミ、塩田純子、武内恵美、森山みつよ、久保イツ子

Ⅱ．調査の記録

1．位置と環境

糸島地方は北に玄海灘、南に背振山系を控え山海の豊かな恵みに育まれ、縄文時代以来長年にわたる人々の営みの足跡をたどる多くの遺跡が確認されている。とりわけ当地方のなかで最も広い平野部を有する前原市には現在確認しているだけでも500箇所を超える文化財包蔵地を抱えるまさに埋蔵文化財の宝庫である。

飯原門口遺跡は前原市の西南部、背振山系の一峰、羽金山を源とする長野川の中流右岸に位置する。流域一帯は昔ながらののどかな田園風景を現在でも残す農業振興地域で、一昔前までは遺跡の発見件数は比較的少なかったが、昭和55年から平成元年度にかけて実施された長野川地区県営圃場整備事業に伴う事前調査によって遺跡数は飛躍的に増加した。圃場整備では河川流域の段丘斜面の切り盛り造成が主となったため、広範囲に水田圃場の区画整理が行われたことから、これに伴う大規模な発掘調査が各地で行われ、飯原門口、東地区、東五反田遺跡など弥生～古墳時代の集落遺跡、中世集落、居館遺跡などが相次いで発見された。これら遺跡の発見は当地域一帯の歴史的空白を埋める貴重な発見となった反面、調査終了後には、土木工事によってその多くが姿を消してしまい、文化財保護の見地から顧みれば反省すべき課題も多い。

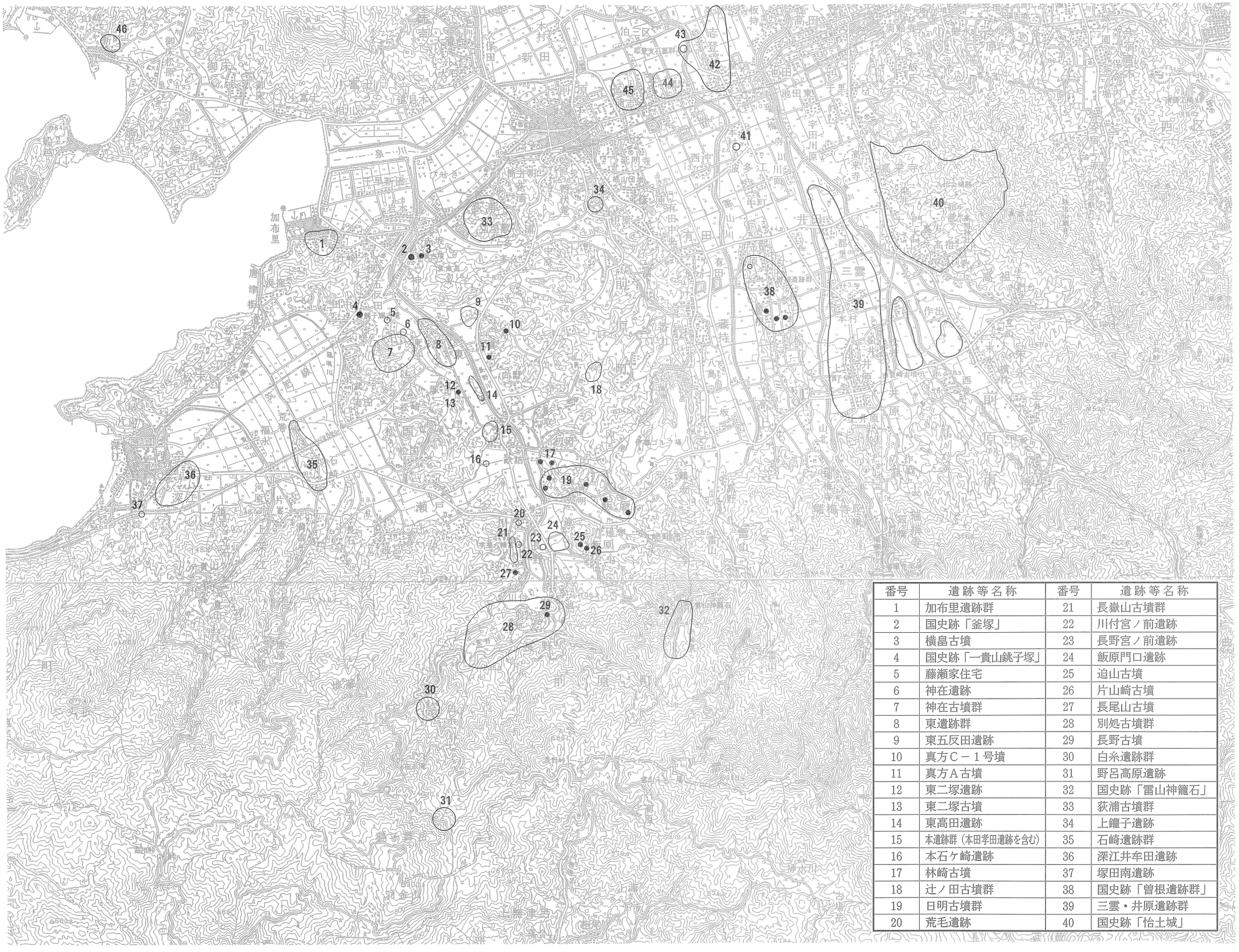
縄文時代早期の遺跡としては以前から楕円形押型文土器、磨製石斧などが出土した宇美八幡神社境内遺跡が知られていたが、[註1] 1984（昭和59）年には新たに本石ケ崎遺跡が発見された。楕円形押形文土器片、縄文晩期の土器、黒曜石、サヌカイト製石器などが採取されている。縄文時代後期の遺跡としては刃金山（標高900ｍ）の中腹、標高500ｍほどに位置する野呂高原遺跡から縄文時代後期の土器、石器などが発見されているが、[註2] 遺跡の範囲、性格など詳細は不明である。1987（昭和62）年に発見された長野宮ノ前遺跡では竪穴住居、埋甕、集石遺構など、縄文後期の生活遺構がはじめて確認された。[註3] 晩期では前述の本石ヶ崎、瀬戸古屋敷遺跡等で土器、石器などが出土している。

弥生時代早期になると長野宮ノ前遺跡で発見された支石墓を含む40基ほどの集団墓地が特筆される。調査地点のさらに南の宅地内には地下に大石が埋まったままの場所もあるとされ、今後とも注意を要する地域である。

中期の様相は今ひとつ明確ではないが、下流の東大田遺跡では中期の円形竪穴住居、磨製石斧などが確認されており、当該期の集落の存在が推定される。

後期になると飯原門口、本、東地区、東五反田、加布里地区にも集落遺跡が出現する。東地区の集落の近辺では後期～古墳前期にかけての甕棺墓が数多く発見されている。後期後半の甕棺編年の指標土器が出土した遺跡として有名な神在遺跡や、水銀朱、ガラス製釧、ガラス製管玉、丸玉類が多数出土した東二塚遺跡、方形周溝墓の主体部が終末期の甕棺墓であった東五反田遺跡もこの流域下流沿岸の微高地、丘陵上に位置する。

弥生後期～古墳前期における長野川流域の拠点集落と推定されるのは本遺跡群である。1992年に県道本－加布里線改良工事に伴う発掘調査の際に集落の北東縁辺部の調査が行なわれ、谷部の土器溜りから弥生中期末～古墳時代前期にかけての多量の土器とともに青銅製鋤先、朝鮮半島系筒形漆器の一部、アワビ形土器などが出土した。[註4]



番号	遺跡等名称	番号	遺跡等名称
1	加布里遺跡群	21	長嶽山古墳群
2	国史跡「釜塚」	22	川付宮ノ前遺跡
3	横畠古墳	23	長野宮ノ前遺跡
4	国史跡「一貴山銚子塚」	24	飯原門口遺跡
5	藤瀬家住宅	25	迫山古墳
6	神在遺跡	26	片山崎古墳
7	神在古墳群	27	長尾山古墳
8	東遺跡群	28	別処古墳群
9	東五反田遺跡	29	長野古墳
10	真方C－1号墳	30	白糸遺跡群
11	真方A古墳	31	野呂高原遺跡
12	東二塚遺跡	32	国史跡「雷山神籠石」
13	東二塚古墳	33	荻浦古墳群
14	東高田遺跡	34	上鑵子遺跡
15	本遺跡群（本田孝田遺跡を含む）	35	石崎遺跡群
16	本石ケ崎遺跡	36	深江井牟田遺跡
17	林崎古墳	37	塚田南遺跡
18	辻ノ田古墳群	38	国史跡「曽根遺跡群」
19	日明古墳群	39	三雲・井原遺跡群
20	荒毛遺跡	40	国史跡「怡土城」

第１図　飯原門口遺跡の位置と長野川流域の主な遺跡（1／50,000）

また、1990年には発掘地点の北隣接地で圃場整備工事中に３基の小児用甕棺墓が出土し、うち２基の棺内から朱とともにガラス製玉が出土した。１号甕棺墓からは青色のガラス丸玉が１個、２号甕棺墓からは青、黄色ガラス小玉を径２㎝ほどの環状に綴った指輪状製品が出土している。[註5]

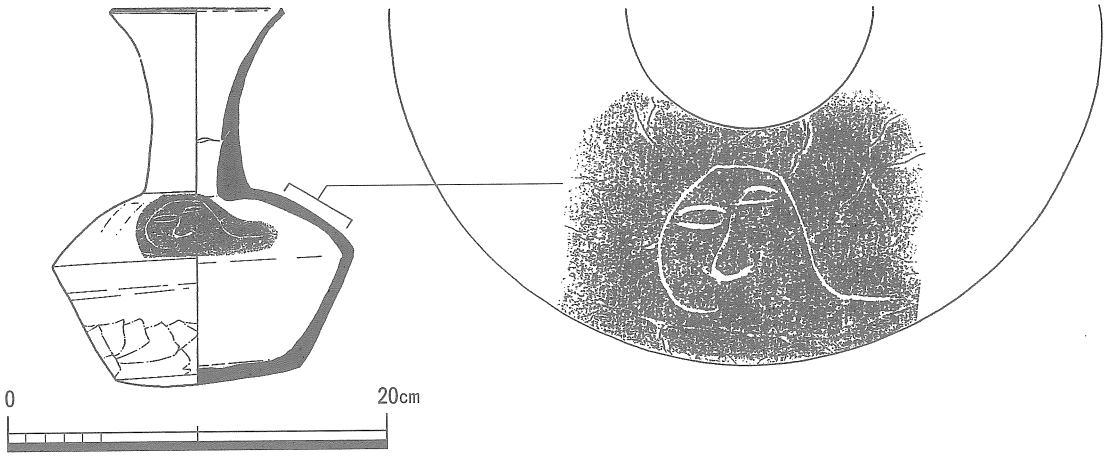
長野川流域には前方後円墳も多い。国史跡「一貴山銚子塚」[註6]古墳は旧河口に近く、対岸には玄界灘屈指の円墳「釜塚」古墳、[註7]神在横畠古墳が対峙する。銚子塚古墳から南に約１㎞、西岸の丘陵上には６世紀築造と推定される墳丘長43ｍの東二塚古墳がある。[註8]後円部に横穴式石室をもつ古墳で、裾には周溝がめぐる。東岸の丘陵上には帆立貝形の後期の前方後円墳である真方Ａ古墳が、さらにその東には方格規矩鏡が出土した真方Ｃ－１号墳もある。[註9]その1.5㎞上流には流域最古の前方後円墳である林崎古墳もある。[註10]

林崎古墳の南側丘陵上には日明古墳群がある。このうち３号、11号、13号、16号、17号墳、の５基が前方後円墳とされるが、[註11]詳細には不明な点が多く実態の解明が急がれる古墳群である。

後期～終末期の古墳群としては別処古墳群、長嶽山古墳群、辻ノ田古墳群、神在古墳群などがあり、近年その一部が調査、報告されている。[註12]また、当該期の集落遺跡として川付宮ノ前遺跡、荒毛遺跡がある。

片山崎古墳は大塚芳昭氏宅裏の竹林内に残る。墳丘は迫山から東に派生した尾根の先端に築かれている。墳丘裾は削られているものの本来は径15ｍほどの円墳ないしは前方後円墳と推定される。主体部は南に開口する単室両袖形の横穴式石室で６世紀後半代の築造と推定される。玄室は長さ2.7ｍ、奥壁幅1.8ｍ、前壁幅2.0ｍ、高さ2.7ｍで、前庭から羨道、石室にかけて良好に遺存しており、当地の石室の構造を知る上で良好な資料といえる。

長野古墳からは須恵器、金環などとともに人面が線刻された須恵器の長頸壷が出土している（巻頭図版２ｂ、第２図）。古墳は既に破壊されたが、伴出した遺物とともに県立糸島高校の郷土博物館に収蔵展示されている。壷は高さ19.9㎝、胴部最大径15.8㎝、口縁径8.7㎝を測り、底部から肩部にかけては直線的で肩部で明瞭な稜を形成して内傾して頸部にいたる。頸部は中ほどから口縁部に向かってラッパ状に開き、口唇部では断面が平坦面を有す。外面底部はヘラ切り後ナデ、胴下半部で手持ちヘラケズリ仕上げが行なわれる他は横ナデで仕上げている。土器の形態的特徴から７世紀末～８世紀前半の資料と推定される。人面は壷の肩部に縦3.8㎝、横6.5㎝に線刻されている。顔を



第２図　長野古墳出土須恵器長頸壷実測図（1／4）と人物線刻画拓影（1／2）

第３図　飯原門口遺跡の範囲と調査地点（1／4,000）

右斜め前方から描いており、頭部の輪郭を円状に一筆で描き、顔は目、鼻、口を書き込むが、口は鼻下で交錯している。また、毛髪表現は認められない。性別は不明であるが柔和な表情からは女性的なイメージが窺える。線刻溝には砂粒の移動に伴う線状の痕跡が認められることから、明らかに焼成前の線刻である。古代の人物画では、正面観、側面観の描写が大半で、斜め方向からの描写、表現資料としては稀少な資料であろう。

長野古墳、別処古墳群は「和名抄」に記載された長野（名加乃）郷推定地の一角にあたる。長野郷は怡土八郷（飽田、託社、大野、長野、雲須、良人、石田、海人）のうち、唯一当時の地名が現代まで伝えられた地名であり、当地の地域社会の様相を探る上での手がかりとなる地である。長野川下流の東地区では昭和60年～62年度にかけて行なわれた発掘調査で平安～戦国期にいたる集落、環濠屋敷、居館跡が数箇所で確認されている（東下田遺跡、東五反田遺跡、東高田遺跡）。東の八幡宮西には原田氏の開祖とされる原田種直の墓と伝える墓石があり、東五反田遺跡一帯は種直の旧宅伝承があるなど、長野川流域には中世原田氏にまつわる伝承が残っている。

昨年解体されたが、江戸時代の庄屋屋敷であった藤瀬家住宅、神在三区に残る近世唐津街道旧道など近世資料にも貴重な文化財が多い。

長野川流域における中、近世の歴史解明にあたっては、東地区をはじめとする処々の関連遺跡の調査とともに古文書調査等、関連分野と提携した地道な継続性ある調査研究、保護が望まれている。

註１　大神邦博「糸島地方の縄文時代遺跡３、長野宇美八幡神社境内遺跡」　伊都第３号　1970
註２　『三雲遺跡』Ⅱ　福岡県教育委員会文化財調査報告書第62集　1981
註３　『長野川流域の遺跡群』Ⅰ　前原町文化財調査報告書　第31集　1989
註４　『本田孝田遺跡』前原町文化財調査報告書　第49集　1993
註５　『王のアクセサリー』伊都歴史資料館　2000
註６　『一貴山銚子塚古墳調査報告書』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第16集　福岡県教育委員会　1952
註７　『釜塚』前原町文化財調査報告書　第５集　1981
『神在横畠遺跡』前原市文化財調査報告書　第71集　2000
註８　『長野川流域の遺跡群』Ⅱ　前原町文化財調査報告書　第32集　1990
註９　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ、Ⅳ　前原町文化財調査報告書　第42、48集　1992、1993
註10　『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書　第35集　1992
註11　『三雲遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書　第63集　1982
註12　『神在上ノ山古墳群』前原町文化財調査報告書　第12集　1984
『井の浦古墳・辻の田古墳群』前原市文化財調査報告書　第53集　1994

2．飯原門口遺跡

(1)　遺跡の概要（第３、４図）

飯原門口遺跡は、前述のように昭和62年秋に遺跡の存在がはじめて周知された。しかし、以前から地元では水田、畑中から土器片や、箱式石棺墓が発見されるなど、一帯に遺跡が分布することは暗黙のうちに承知されていたらしく、このことは地元で一帯を塚原（つかばる）と呼んでいたことからもうかがい知ることができる。

市教育委員会では、遺跡の発見を受け、昭和63年に行われた当該地の県営圃場整備事業に先立ち、遺跡推定範囲一帯の試掘調査を実施した。この結果、遺構、遺物が迫山の西裾に派生した舌状丘陵の尾根筋から北側の斜面にかけて東西240ｍ、南北90ｍの範囲に弧状に分布することが確認された。

遺構の分布が北半部に偏っていることについて、北側の斜面が生産可耕地である北側の低地、平野部に対して眺望が開けていたこと。また、尾根を境に北斜面では赤褐色のローム土が地山であったのに対し、南斜面では川原石を多く含んだ灰白色の湿潤な粘質土が地山となっており、生活面としては不適当と判断されたことなどが選地に大きく影響したのではないかと推測された。

遺構確認地点は前年度に土器が大量に出土した北側低地との間に10ｍほどの標高差がある。遺構群は勾配の急な斜面上に立地しているうえ、後世の水田、畑地開削によって、地山が大きく削りとられた箇所も多く、耕作土直下で直ちに遺構面を検出した地点もあり、竪穴住居ではわずかに周溝が確認できるほどまで地下げされた箇所があるなど、遺構の遺存状況はかなり悪いことが判明した。また、採取された土器片から、弥生時代～中世の遺跡が包蔵されていることも予測された。

圃場整備では遺跡の南端の尾根線上に新たに基幹道路を敷設し、これに直交ないしは並行して圃場区画の線引きが行われることとなったため、工事の切り盛りによって遺構面の削平が予測される箇所が多数生じた。このため、遺跡の保存について土地改良区、福岡農林事務所と協議を重ね、最終的に圃場整備によって遺跡の削平が予想される６地点を調査対象地とし、発掘調査を実施することとした。調査は工事の進捗に合わせて第７地点→第４地点→第２地点→第５地点→第６地点→第３地点の順に行なうこととした。

その他、道路敷のうち一部地下げが予定された地点についても、掘削時の立会い等を行い、遺構の確認、遺物の採取に努めたが、顕著な遺構、遺物は確認されなかった。

圃場整備に伴う発掘調査、ならびに遺物整理は同年７月から翌３月にかけて実施した。

(2)　第１地点

第１地点は遺跡の最東端に位置する。標高53～55ｍほどで、遺跡の最高所にあたる。

調査地から東ではすぐに迫山（標高102ｍ）の頂上に向かって急斜面が迫る。調査地点の勾配も急で、標高差は最大で2.2ｍに達した。

検出した遺構は弥生時代後期の掘立柱建物２棟、方形柱穴群、溝遺構、古墳時代の土壙墓、土器棺墓、鎌倉時代の掘立柱建物２棟、柵列、土坑、溝などである。

第４図　飯原門口遺跡周辺の新旧地割と調査地点（1／2,000　黒線は旧地割、朱線は新地割）

墳墓

調査地点の北西端付近で２基の土壙墓と土器棺墓１基を検出した。いずれも古墳時代の遺構である。

１号土壙墓（図版３、第６図）

長方形掘り方をもつ土壙墓である。主軸方位はＮ49°Ｗを示し、主軸長243㎝、幅172㎝、深さ97㎝を測る。掘り方断面は逆台形を呈し、低面から５㎝上位で２段目の掘り方を検出した。２段目の掘り方は主軸長174㎝、幅52㎝を測る。埋土の土層断面を観察してみると、２段目の掘り方直上で上方から茶褐色土が陥没した状況がうかがえることから、主体部は木棺と推定される。土壙底部の断面が平坦に近いことから箱式木棺であった可能性が高い。棺内南西部で赤色顔料が径17㎝ほどの範囲に比較的集中して検出された。正式な顔料分析は行なっていないが、色調がやや橙がかっていることからベンガラと推定された。また棺底全域で赤色顔料粒を検出したがその分布密度は希薄で棺内に塗られたものではなく、棺内に薄く散布したような状況であったと推定する。

２号土壙墓（図版４、第６図）

１号土壙墓の東60㎝に隣接して築かれた土壙墓である。主軸はＮ21°Ｗを示し、１号墓よりやや東に主軸方位が振れている。主軸長163㎝、幅80㎝、深さ40㎝を測る。掘り方断面は逆台形を呈する。

土坑の底面南西角近くで小型の丸底鉢が出土した。副葬品と考えられる。また、南東部では径３㎝ほどの赤色顔料の集中部を検出した。ベンガラと推定される。

出土土器（図版44、第11図）　ほぼ完形で出土した。器高6.6㎝、口縁径8.1㎝を測る。丸くやや尖り気味に仕上げた口唇部から若干胴が張った後、丸底の底部にいたる。

土器棺墓（図版５ａ、第６図）

２号土壙墓の南東3.2ｍで、南北長56㎝、東西幅40㎝、深さ45㎝の不正楕円形土坑を検出し、土坑上層から横たえられた状態の山陰系二重口縁壷を検出した。土器棺と推定したが、土器が土坑の底面から浮いた状態であるため、棺として特定するにはやや不安を残す。棺の主軸方位はＮ84°Ｗであった。

土器棺は上半分が削平により、また、底部付近は後世の柱穴掘削によって欠失している。蓋は検出しておらず、木蓋であった可能性がある。残存する土器から推定される棺の埋葬角度は１°で、ほぼ水平方向であった。

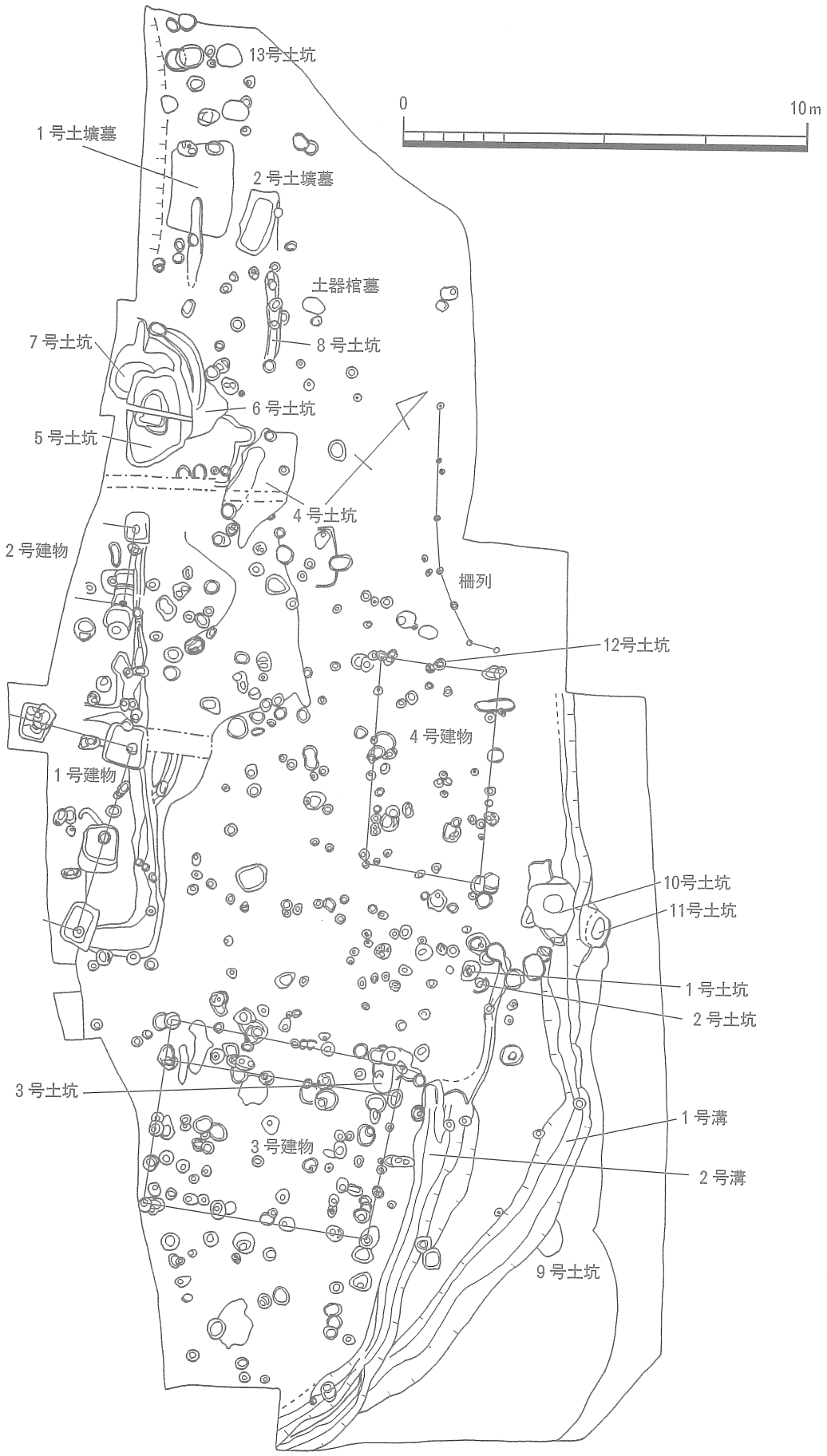
出土土器（図版44、第11図）　山陰系二重口縁壷である。復元口縁径20.4㎝、胴部最大径31㎝を測る。ほぼ球形を呈する胴部から短く外反する頸部を経て二重口縁に達する。口縁屈曲部、口唇部の稜はともにあまい。

掘立柱建物

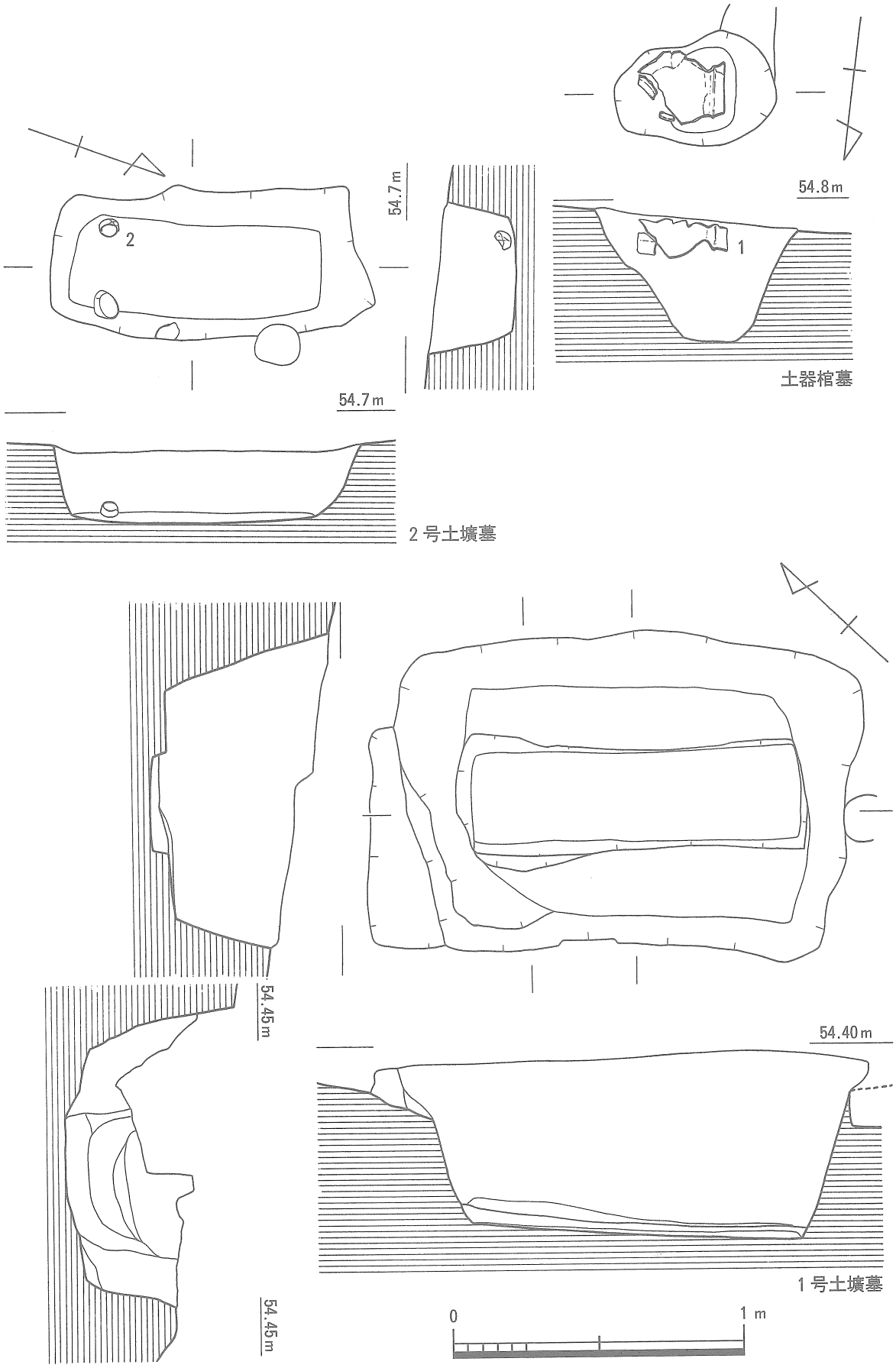
弥生時代後期の掘立柱建物２棟（１、２号建物）、鎌倉時代の掘立柱建物２棟（３、４号建物）を検出した。

１号建物（図版６～８、第８図）

調査区の中央西端で検出した建物で、遺構の西半分は既に欠失しており、建物東端の３個の柱穴列と北柱穴１個を確認したにとどまる。柱掘り方はいずれも不正方形プランで一辺80㎝～110㎝ほ



第5図　第1地点遺構配置図（1／150）



第6図　1、2、3号墓実測図（1／20）

ど、深さは最も深い柱穴１では108㎝になる。いずれの柱穴も２段掘りを行って柱を埋けているが、柱穴３では１段目の底からさらに54㎝も２段目を掘り下げている。確認できた柱痕跡は柱穴１から３まで順に径24㎝、20㎝、23㎝である。柱穴４では、柱の抜き取りが行なわれていた。柱穴埋土の土層観察の結果、１～３ではいずれも黄色粘土と茶褐色土を交互に突き固めた丁寧な柱の埋め戻しが確認された。柱穴列の東では柱列よりもやや主軸が西に振れるものの、建物敷を平坦に切り下げて整地したテラス面が確認され、さらに整地面の隅にめぐらされた周溝も確認された。整地面は１号建物のさらに北に伸び、２号建物まで達していた。

周溝は南北から中央に向かって下り勾配がつけられ、柱穴３の北から西に向かって屈曲していることから、１、２号建物が排水溝を共用していたと推定される。

柱穴３の最上層でミニチュア土器が出土した（図版８ａ）。建築時の祭祀行為に伴う埋納土器と推定される。

出土土器から建物の時期は弥生中期後半～末と推定される。

出土土器（図版44、第11図３）　３は、小型鉢である。器高7.6㎝、口縁径8.9㎝、底径4.3㎝を測る。低部は平底で胴部は張らずに直立し、口縁は「く」の字状に外反し口唇部は尖り気味に収める。

２号建物（第７図）

１号建物の北３ｍで、同じ整地区画内から柱間を2.1ｍとる２基の方形柱穴を検出した。掘立柱建物の一部と推定される。柱穴は一辺78㎝～66㎝の不正長方形プランで深さは50㎝ほど。いずれも掘り方の底面から径20㎝ほどの柱圧痕が検出された。１号建物のそれと比較すると径は小さい。

１号建物と周溝を共有することから、同時期の建物と推定される。

３号建物（図版９、第８図）

調査区の南部で検出した東西方向に主軸を持つ２間×４間の建物で、主軸方位はN57°Ｅにある。柱穴に残る柱痕跡は直径15㎝～18㎝ほど。建物の北側に庇が付設される。

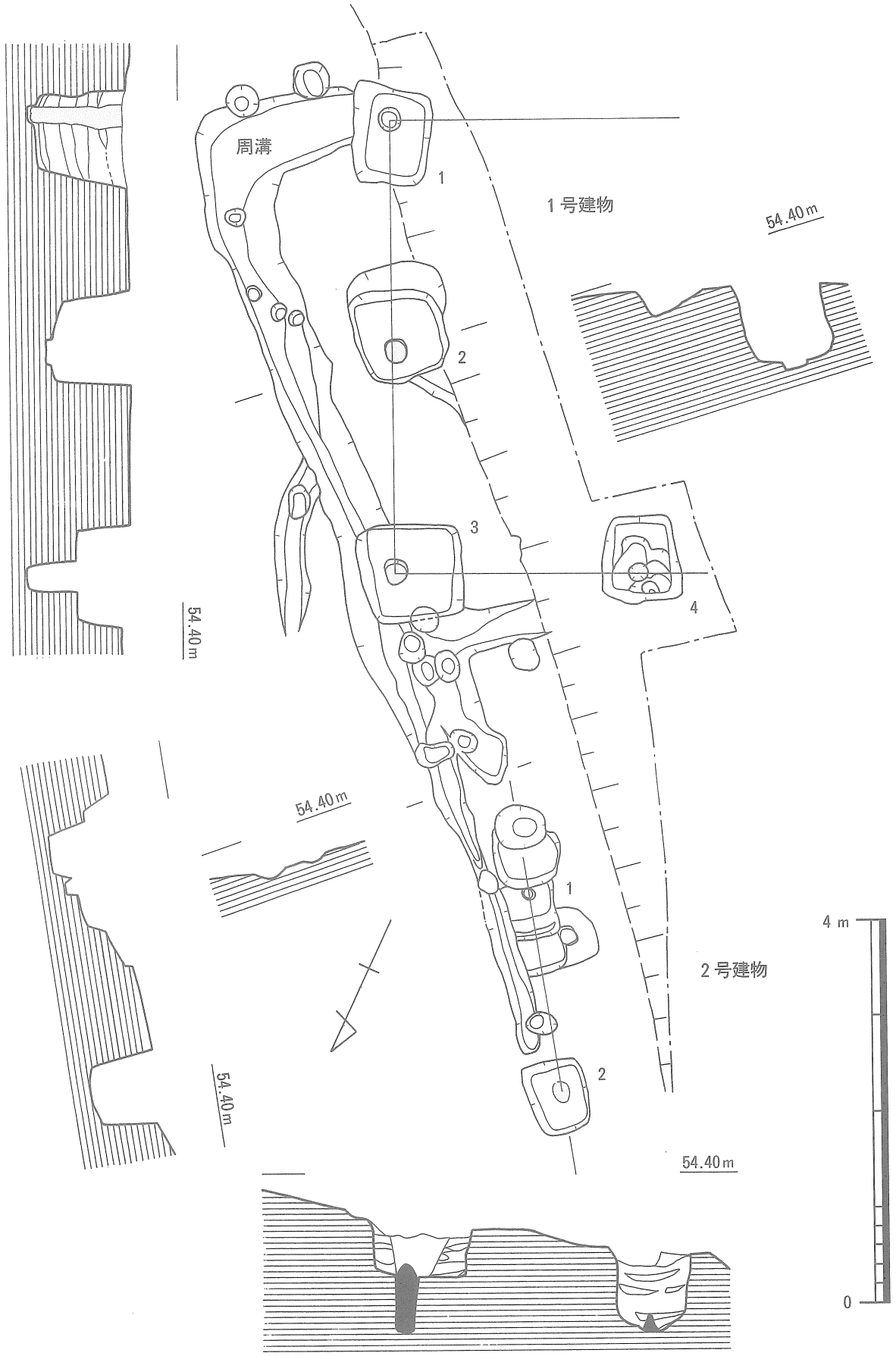
建物の中央東寄りで床に径20㎝ほどの環状の赤変硬化した箇所があり、その中央では炭まじりの焼土が検出された。また、その西では長さ2.2ｍ、幅1.2ｍにわたって長方形の薄く炭化物を踏み固めた箇所が認められた。また、建物内部の小土坑からは廃棄された炭、焼土塊が出土しており（図版９ｂ）、調査地点表土から鉄滓も出土していることなどを考慮すれば、この建物は、鍛冶作業施設であった可能性が高い。東柱穴２隣接して掘られた１、２号土坑出土の土師皿から、12世紀後半から13世紀前半の建物と推定される。

４号建物（図版10、第８図）

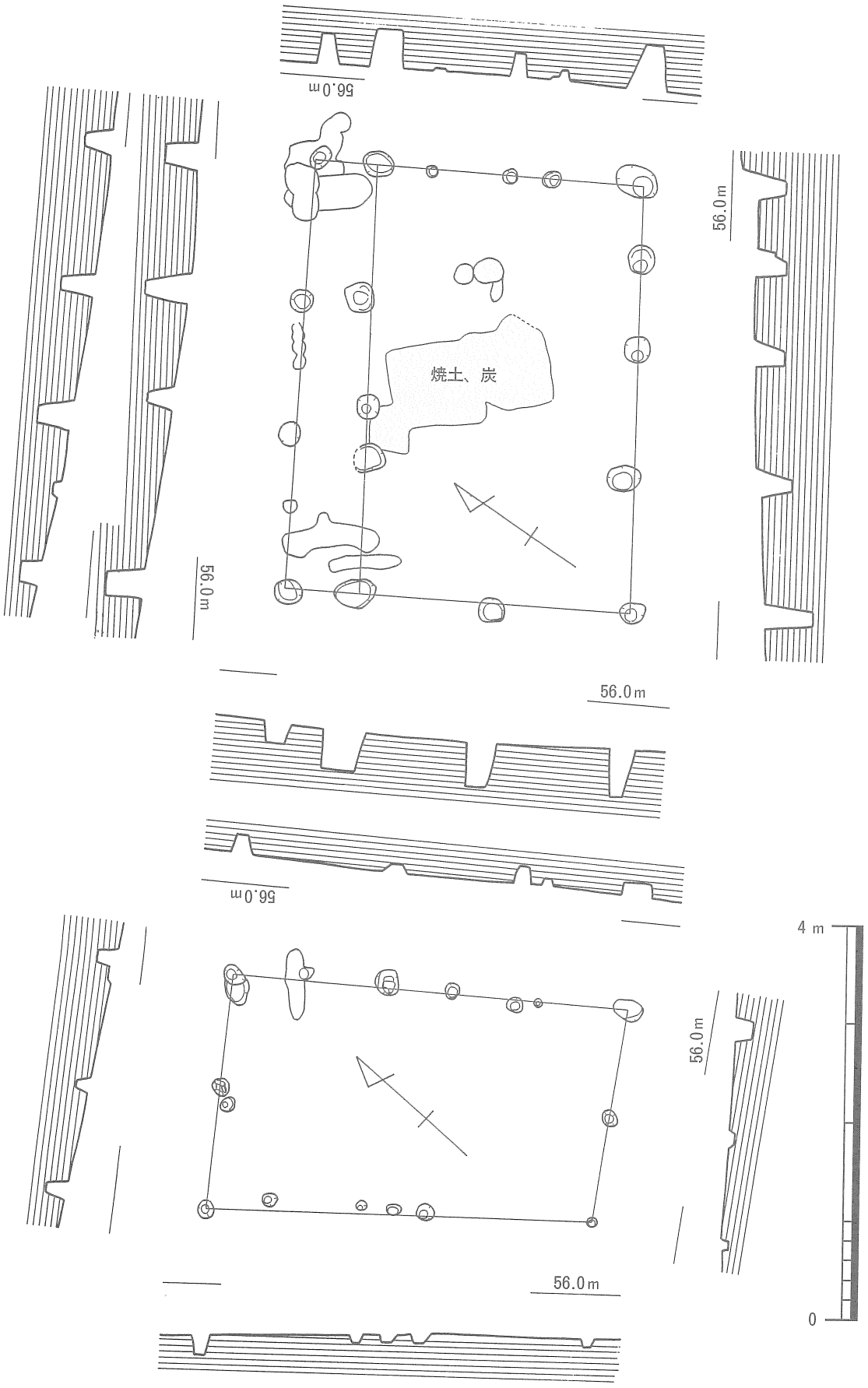
３号建物の北東で建物主軸方位をN39°Ｗにとる２間×５間の建物である。柱間隔はばらつきがあり、柱穴は概して小さい。１号建物とは主軸方位がほぼ直角に振れる。１号建物と同時期の建物と推定される。

柵列（図版11、第５図）

４号建物の北で検出した小柱穴列で、底に向かって先細り状態を呈していたため、杭の打ち込み穴と推定され、その間隔が均等であることから柵列と推定した。１、２号建物に伴う敷地の区画施設であろう。



第７図　１、２号掘立柱建物実測図（1／60）



第８図　３、４号掘立柱建物実測図（1／60）

その他の遺構、遺物

1号土坑（図版12、第9図）

1号建物の東で検出した径45㎝、深さ10㎝の浅い不正方形土坑である。底面から4枚の土師皿が出土した。1号建物に隣接して掘られていることから、この住居での祭祀行為に伴う土坑と推定される。

出土土器（図版44、第11図4～7） 4～6は土師器の小皿である。口径の平均値は8.3㎝、器高は1.3㎝。7は皿で糸切り底である。

2号土坑（図版12、第9図）

1号土坑に南に隣接して掘られた径38㎝、深さ8㎝の浅い小土坑である。、底面から土師皿1枚が出土した。

出土土器（図版44、第11図8） 復元口径8.9㎝、底径6.7㎝を測る。糸切り底である。

3号土坑（図版12、第9図）

3号建物の東で検出した長さ73㎝、幅47㎝、深さ7㎝の長楕円形土坑である。底面の南端で土師器杯2枚（第11図10、11）が伏せた状態で出土した。

出土土器（図版44、第11図9～11） 9は土師器の小皿で口径8.3㎝、器高1.1㎝を測る。10は皿で糸切り底である。11は杯で器高3.7㎝、口径13.0㎝を測る。

4号土坑（第5図）

2号建物の北東で検出した浅い窪み状の土坑である。掘削時期等は明らかでない。

5号土坑（第5図）

2号建物の北西で検出した不正楕円形の土坑で6、7号土壙を切る。南北長238㎝、幅162㎝を測る。土坑底面は2段掘りとなっており、中央最深部での深さは49㎝となる。時期等は不明であるが中世まで下るものではない。

6号土坑（第5図）

5号土坑に切られる浅い土坑で、平面プランも判然としない。

7号土坑（第5図）

5号土坑に切られる不正長方形の土坑で、南北幅91㎝、深さ20㎝ほど。時期は明らかでない。

8号土坑（第5図）

4号土坑の北西で検出した細長い溝状の土坑である。掘削時期等は明らかでない。

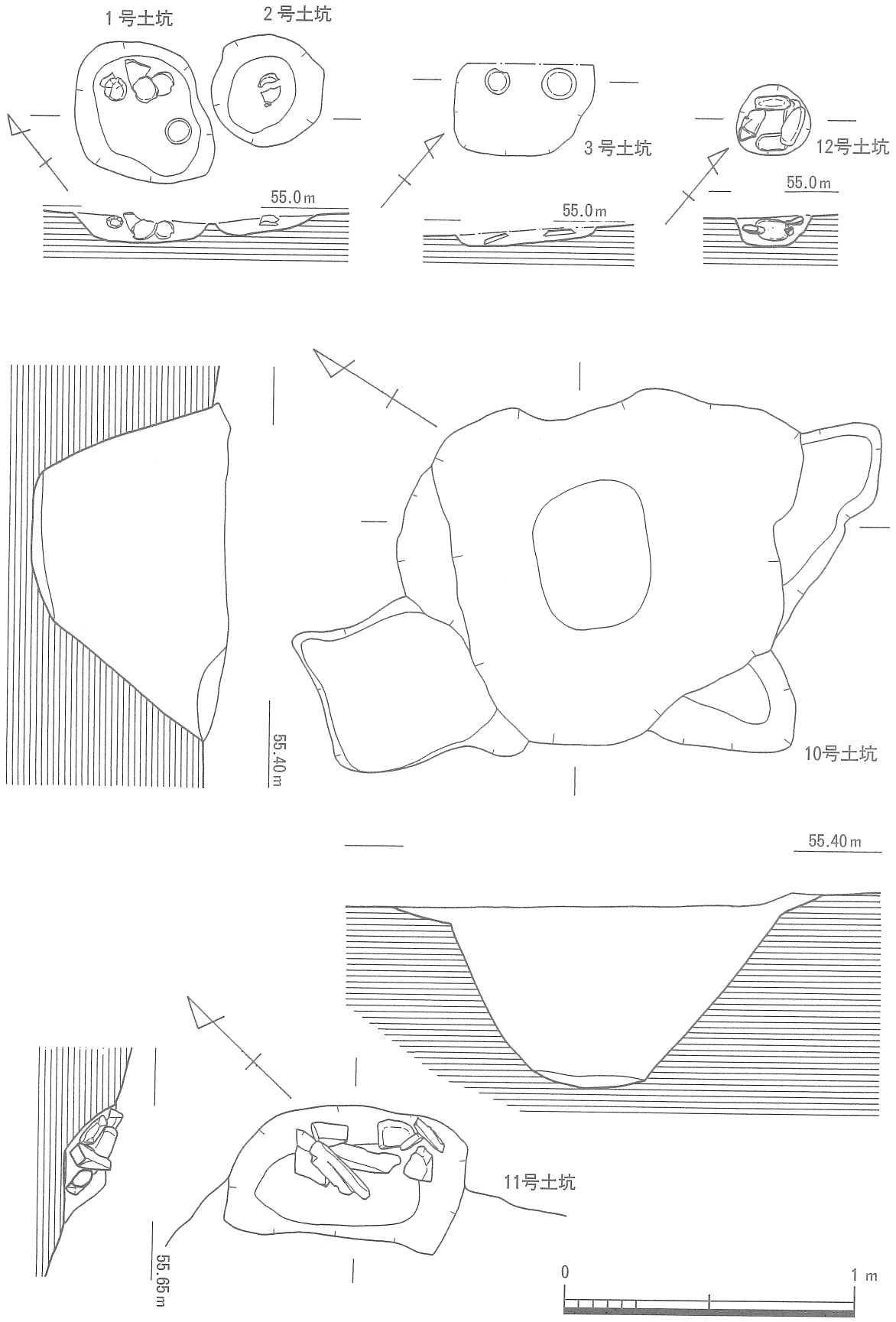
9号土坑（第5図）

1号溝に切られた不正円形の浅い土坑である。埋土から炭、焼土が多く出土したが、土坑の壁面には熱を受けた痕跡は認められず、いわゆる炭焼き窯ではない。

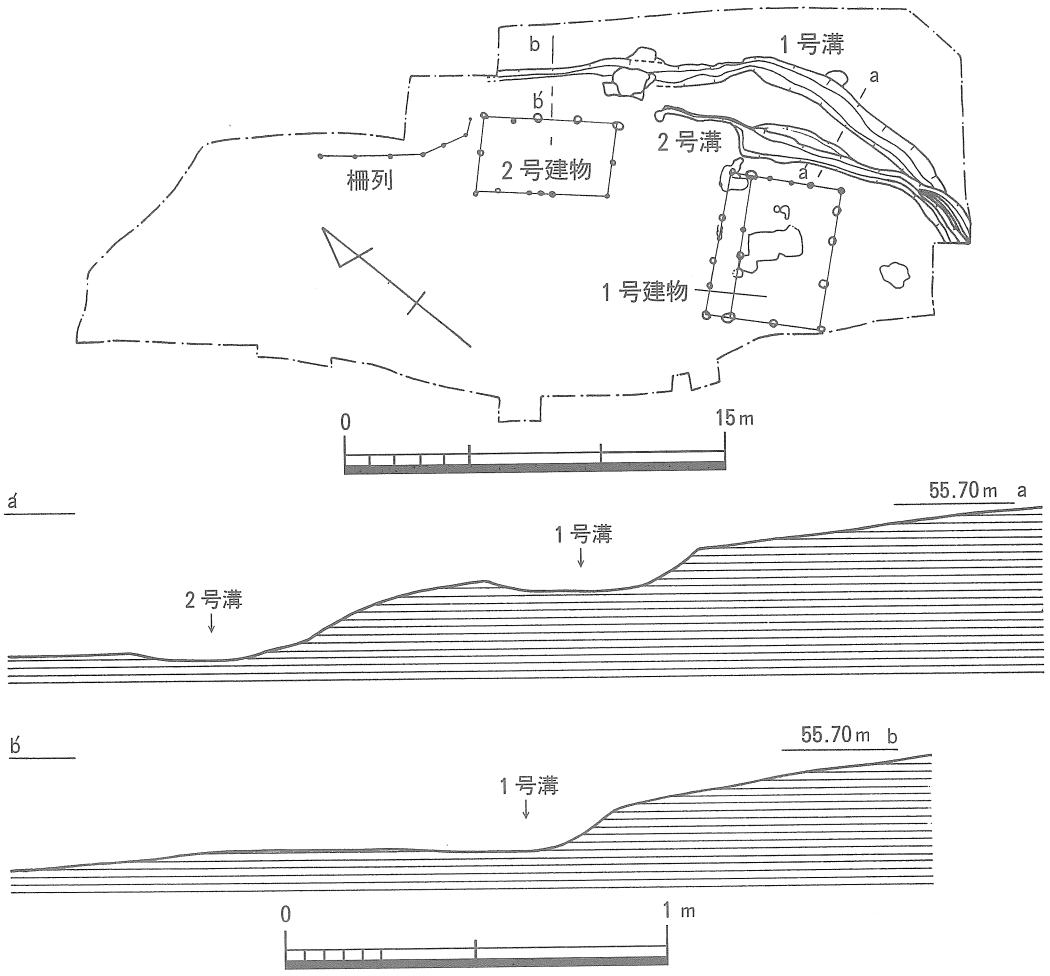
10号土坑（図版11、第9図）

2号建物の東1.1ｍで検出した不正円形の土坑で、南北152㎝　東西116㎝、深さ70㎝を測る。土坑断面は逆台形で埋土からは炭、焼土塊とともに青磁片、白磁片、土師皿、杯などが出土した。12世紀後半～13世紀前半の遺構と推定される。

出土土器（図版44、第11図12～21）　12は龍泉窯系青磁である。復元口径16.6㎝。蓮弁は肉厚に彫りだされている。13～15は土師器小皿、口径は平均8.9㎝、器高では1.03㎝を測る。17～22は杯である。口径、器高の平均値はそれぞれ12.5㎝、2.98㎝ほどである。15、17、19、では明瞭な糸切



第9図　土坑等実測図（1／20）



第10図　溝の配置（上 1／300）および断面実測図（下 1／20）

り痕が確認された。

11号土坑（図版11、第９図）

10号土坑の東で検出した浅い楕円形土坑で、斜面であったため、西半部は削平されていた。南北80cm、深さ16cmを測る。土坑内から表面が焼けた花崗岩などのやや大きめの板石、棒状礫が７個出土した。

12号土坑（図版12、第９図）

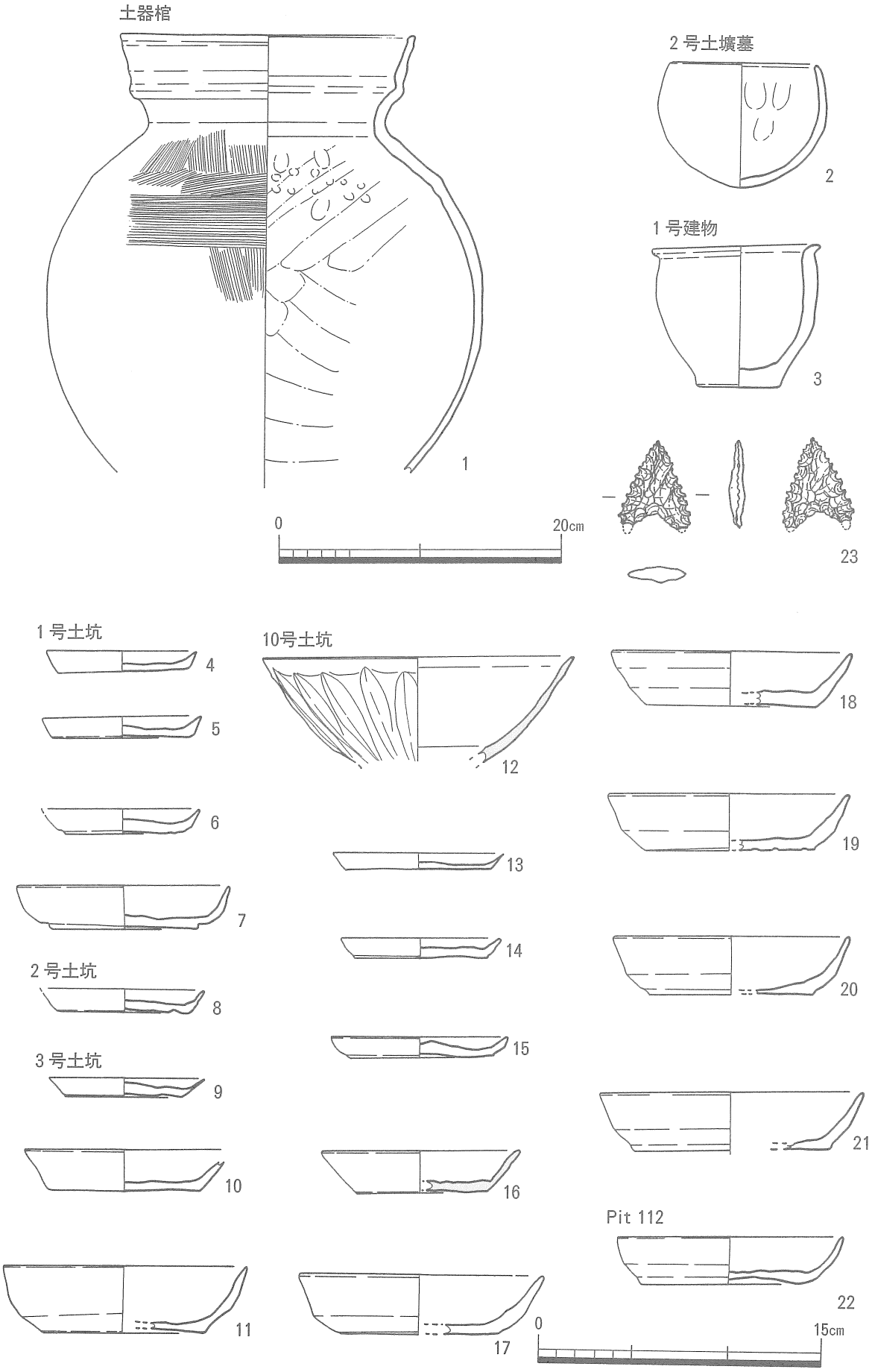
径24～26cm、深さ10cmの円形小土坑である。土坑底面から「ロ」の字形に組まれた礫が出土し、うち一個は磨石であった。時期は明らかでない。

13号土坑（図版13）

径66cm×56cmの楕円形土坑で深さ55cm。埋土から弥生土器片とともに花崗岩礫が出土した。

溝（図版２ｂ、第10図）

１、２号建物の東、迫山裾の傾斜変換線に沿って掘られた２条小溝を検出した。溝は断面が浅いＵ字形で、調査区南端で２号溝が１号溝を切っていた。１、２号建物を山からの流水から防ぐために掘られた排水溝と推定され、弧を描きながら南方向に続く。



第11図　第1地点出土遺物実測図（1～3は1／4、23は2／3、他は1／3）

(2) 第２地点

第１地点の北西80ｍに位置する。第１地点と同じく山裾の傾斜変換地点にあたる。表土を除去すると、東部では耕作土直下で地山を検出したが西側に進むに従い、徐々に遺構面が深くなった。中央から西では遺物包含層（暗茶褐色土・第３層）を挟みさらに遺構面は深さを増した。調査地点での東西標高差は１ｍ弱になる。

調査地点では古墳１基、竪穴住居３棟、周溝状遺構４条、溝７条を調査した。竪穴住居、柱穴等は調査区の南西部に集中しており、後世の削平により東側高所の遺構が完全に削平されたと推定したが、調査を進めていくうち、検出した竪穴住居は壁面が遺存するなど、比較的良好な状態で検出されたため、後世の削平により、高所の遺構が完全に削平されたとは考えにくい。よって集落の東端部となる可能性が高い。

門口古墳（図版15～16、第24図）

第２地点の北端で検出した古墳である。調査着手前から既に石室石材とみられる花崗岩転石が地表に露出し、古墳の存在が予想されていた。

古墳は旧水田区画の北西隅に位置しており、迫山から西に伸びた尾根線上に位置する。旧地籍図（第３図黒線）によれば、南から第２地点に向かって取り付けた農道が、この古墳の南85ｍの地点で西側に迂回している様子がうかがえ、古墳が農地区画に影響を与えた様子がうかがえた。

表土を除去すると石室がほぼ剥き出しの状態で姿を表した。墳丘の大半が地山ごと削り取られ、わずかに石室とその周囲が残された状況であったため、墳丘規模の推定は難しいが、仮に５号溝を周溝の一部ととらえれば、径16～17ｍの円墳に復元することができる。

内部主体は北西方向に開口する横穴式石室である。長方形プランの石室であることは明らかであるが、天井および左壁、玄門から羨道にかけて石材が抜き取られ、わずかに奥壁右隅角から右側壁の腰石が遺存するのみであったことから、正確な規模、平面プランの詳細は不明である、玄室の幅は左側壁腰石の掘り方から奥壁付近で2.2ｍ前後、玄室長は右側壁を参考にすれば３ｍ前後はあったものと推定される。

奥壁では厚さ40㎝の花崗岩転石を据え、腰石とし、右側壁では転石を立てて腰石に据えていた。床面には玄室右隅角で敷石がわずかに残っていた。石はやや大きめで隙間に小石を充填している。石室埋土から鉄刀片が出土した。副葬品であろう。

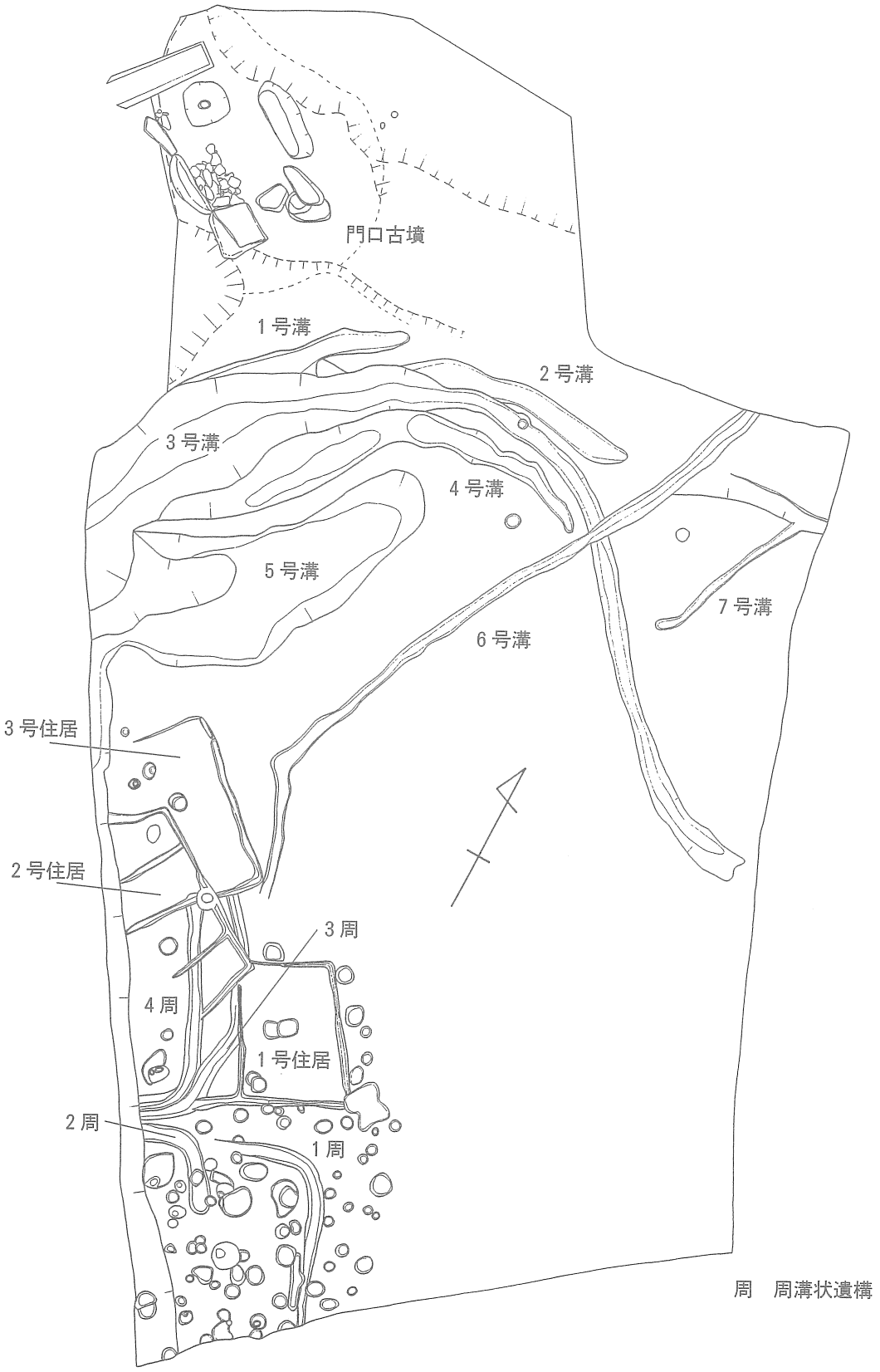
出土遺物　鉄刀片である。３片に別れ互いに接合しないため、正確な個体数は不明であるが、本来１本であったと考えられる。

竪穴住居

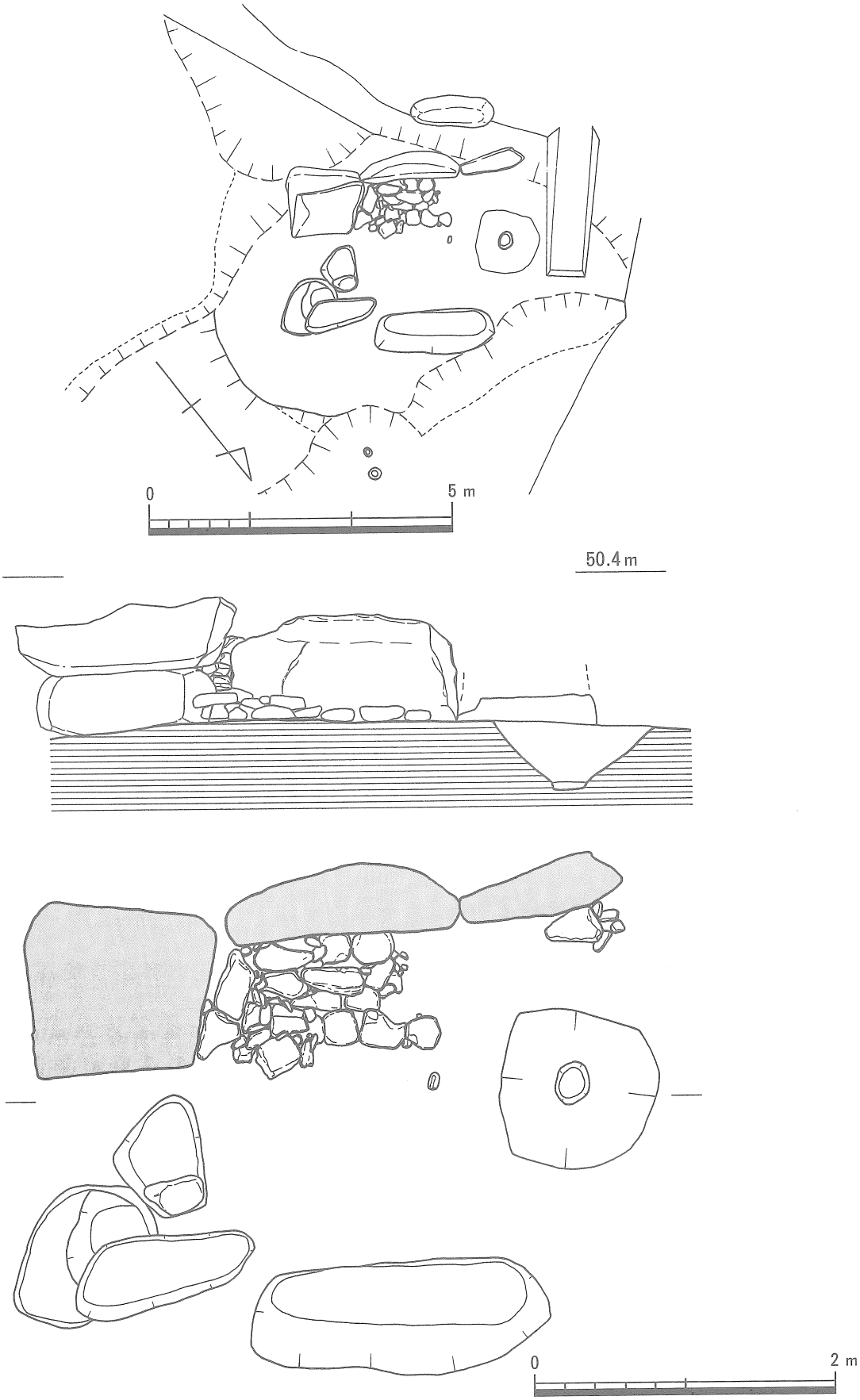
調査区の南西部で３棟の竪穴住居を検出した。弥生時代後期～古墳時代前期の住居である。

１号住居（図版17～18、第14図）

３棟の竪穴住居のうち最も高所に位置する。３、４号周溝状遺構を切るが、２号住居よりも古い。唯一住居の平面プランが把握できる住居で不正長方形プランを呈し、南北長3.42ｍ、東西幅2.49ｍを測る。小型の住居である。床面中央には隅丸方形の炉が掘られている。炉は床の四周には周溝が



第12図　第2地点遺構配置図（1／150）



第13図　門口古墳墳丘（上 1／100）石室（下 1／40）実測図

掘られるが北西隅角では一部切れている。南西角から屋外に排水溝が伸びていた。主柱穴と見られる柱穴は確認できなかった。

床面から甕、壷など弥生後期後半の土器が出土していることから、住居も当該期と考えられる。

出土土器（図版45、第17図１～７）　１～５は甕である。１は口縁部がやや長く、胴部との境はややなだらかに屈曲する。胴部外面上半部は縦ハケ、下半部はケズリで、内面は斜めハケ、口縁部は横ハケで仕上げる。胎土には花崗岩粒が多く含まれ、色は赤褐色、焼成は良好である。２は口縁端部がやや厚めである。胴外面は縦ハケ、内面は斜めハケで仕上げる。３は胴外面に斜めハケが残っていた。４は口縁部が大きく外反し、端部はやや丸くおさめる。胴部外面は板状工具によるなでが行なわれ、内面は斜め方向の丁寧なナデで仕上げる。６は直口壷の口縁である。胴部と頸部の境は明瞭で口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部は「コ」の字形に納める。内面は頸部直下までヘラ削りが及ぶ。７は壺胴下半部である。底部はまだ平底が残っているが胴部下面からに丸みをもつ。内外面とも板状工具によるナデで仕上げられている。

２号住居（図版17、20、第14図）

３棟中で最も新しい住居である。西半部は後世の削平により消失している。主軸は北西－南東方向にあり、主軸長は4.35ｍである。南北にベッド状遺構が削りだされていた。周溝は壁下とベッド状遺構の裾に掘られていた。東壁中央に集水坑が設けられ、住居外への排水溝は北壁に設けられていた。主柱穴と思しき柱穴は確認できなかった。

周溝、埋土から弥生土器、古式土師器が出土していることから、古墳時代前期の遺構と考えられる。

出土土器（図版45、第17図８～10）　８は甕である。胴部から口縁部にかけての境はなだらかである。口縁部はやや長めで胴上半部には粗い斜めハケが施され、内面はヘラ削りの後にナデで仕上げている。胎土には花崗岩粒が多く含まれ、色は赤褐色。焼成はややあまい。９は短頸壷の胴部である。低部は丸底をなす。内外面には押圧痕が顕著に残り、仕上げが粗い感を受ける。胎土は精良な粘土を用い、色は茶褐色。焼成は良好である。10はミニチュア鉢である。高さは5.6ｍ。埋土上層からの出土で住居に伴うものではない。

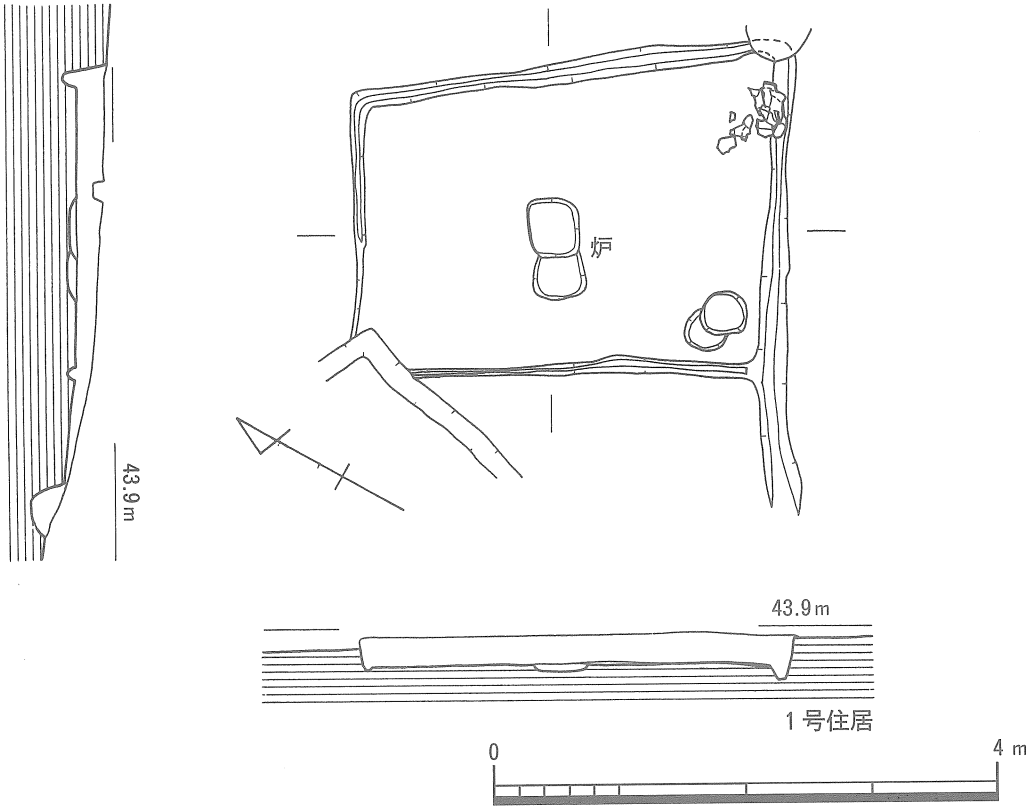
３号住居（図版17、19、第15図）

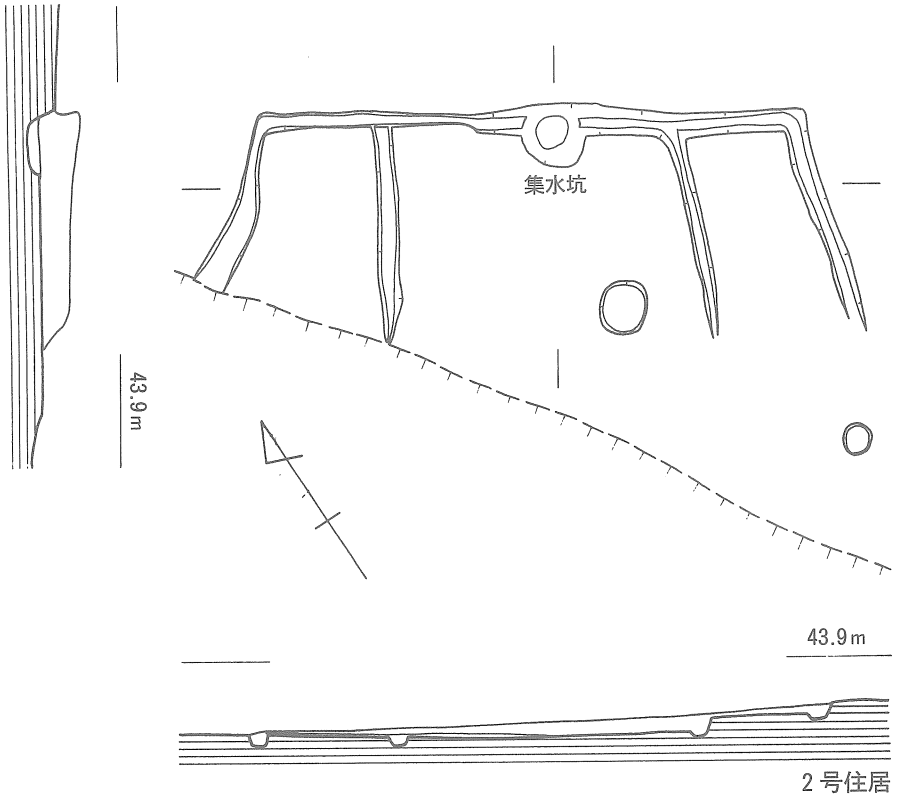
住居群中最も北で検出した住居跡で２号住居に切られる。西半部は削平により消失しているが、東壁は比較的良好に遺存していた。主軸は北西－南東方向にもつものと推定される。炉は２号住居北西隅角の南で検出した。１、２号と同じく主柱穴は確認できなかった。

床面、埋土から壷、甕、鉢などの弥生土器、鉄器が出土している。

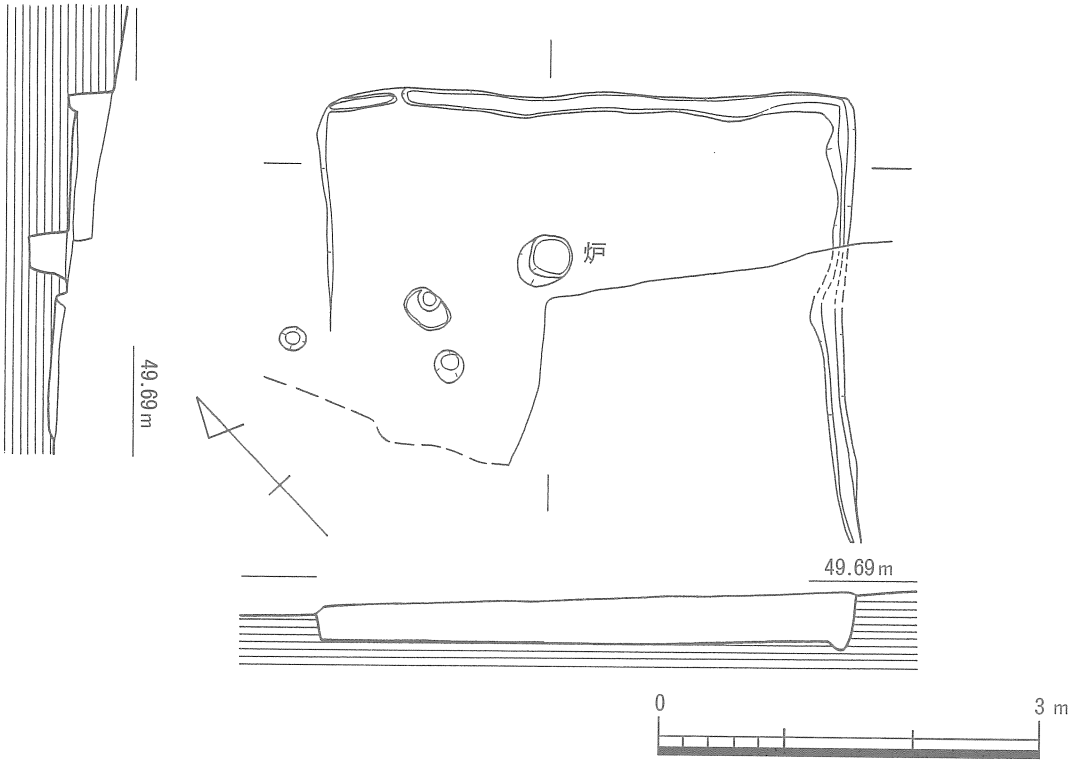
出土土器（第17図11～13）　11は複合口縁壷の口頸部である。直立気味の頸部は小さく擬口縁に向かって開き、口縁部は直線的に内傾する。口唇部は「コ」の字形に納める。器壁は厚い。胎土には花崗岩の小粒が多く含まれ、色調は暗茶褐色。焼成は良好である。12は壷の底部である。レンズ状に丸く膨らみ、内外面とも刷毛で仕上げる。胎土には花崗岩粒のほか、角閃石を含み、色は淡黄褐色。焼成は良好である。13はミニチュア椀である。外面低部はヘラケズリを行っている。

鉄器（図版45、第19図34）鉄製穂摘具の刃部片である。現存長4.0㎝。刃幅1.8㎝、厚さ３㎜。端部には折り返しが残る。鉄表面には複数の木質の繊維痕跡が付着している。





第14図　1、2号住居実測図（1／60）



第15図　3号住居実測図（1／60）

周溝状遺構（図版17、第16図）

竪穴住居群下及び南で「L」字に屈曲して西に流路を向けた4条の周溝状遺構を検出した。いずれも断面逆台形「コ」の字形を呈し、深さは10～20cmほどで概して浅い。掘られた目的は判然としないが、斜面下に築かれた居住遺構を水から保護するために設けられた排水遺構、あるいは6号溝などと繋がって取水、集水溝であった可能性もある。

1号周溝状遺構

南から北に向かって伸び、中途で西に直角に近く折れる。2号遺構の手前で途切れるが、流下方向が2号とほぼ同一で、本来は2条同時に掘削、機能していた可能性がある。

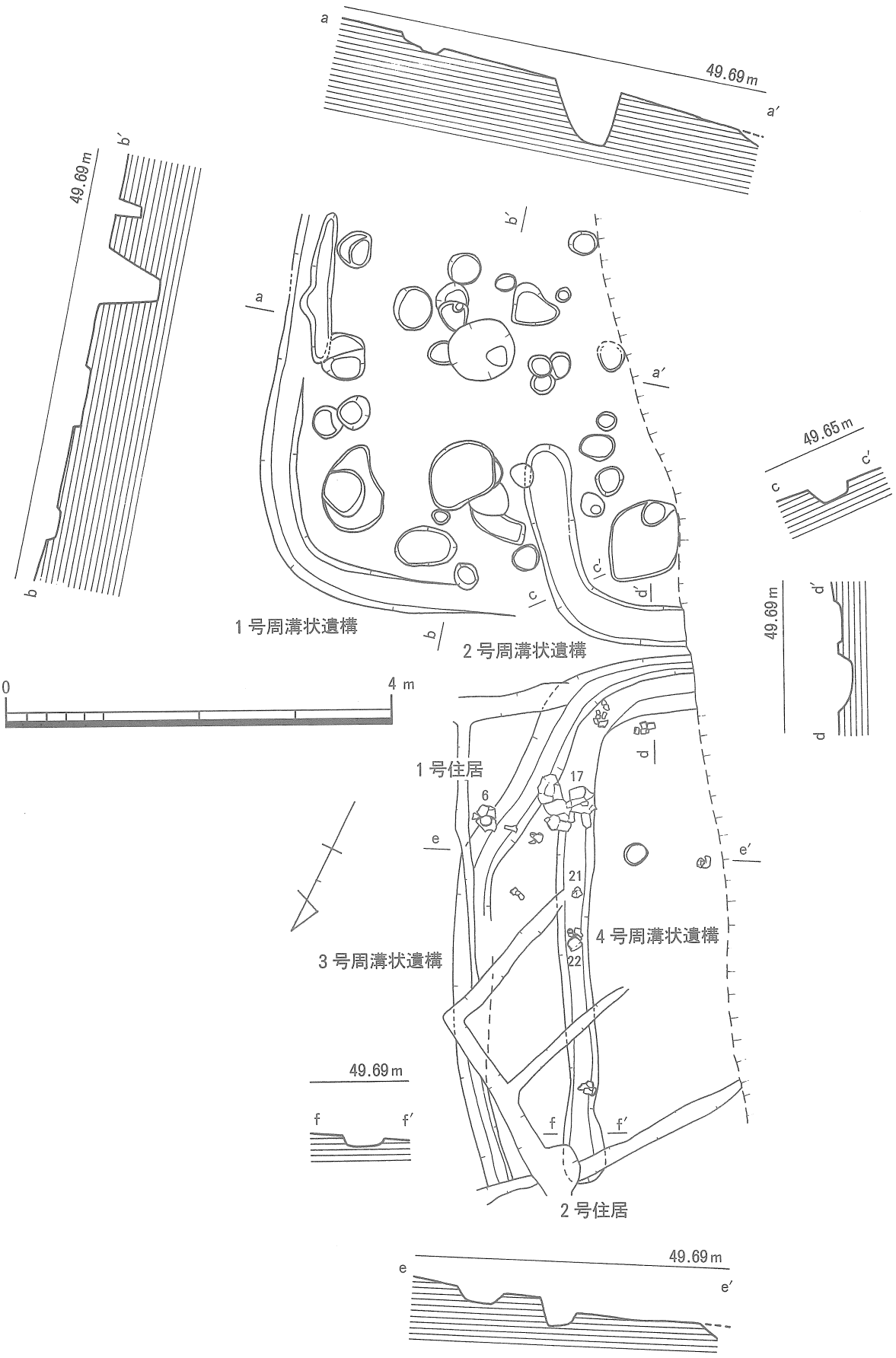
2号周溝状遺構

1号遺構と並行して南から伸び、中途で西に直角近く折れて斜面下に続く。

3号周溝状遺構

1号、2号とは逆に北から南に向かって流れ、2号溝の手前で西に屈曲し流下する。4号溝を屈曲部の手前で切っていた。溝の上面覆土から弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器がまとまって出土した。このうち、22は溝底直上、17は溝が埋没した後の覆土から出土しており、溝の埋没時期はこれを溯るものと推定される。

出土土器（図版45第18図14～24）14は壷の胴部である。胴部は卵形で最大径は中央部よりよりやや上方にある。胴部と頸部の境は明瞭に立ち上がる。底部はレンズ状に膨らむ。胴部外面は上半部



第16図　溝状遺構実測図（1／60）

を粗いタテハケで、下半部をケズリで仕上げる。内面はタテハケで仕上げる。胎土には花崗岩粒の他角閃石を含み、色は暗褐色。焼成は良好である。

15～17、21は甕である。17では胴部外面上段は縦ハケ、下半はヘラケズリの後ナデで仕上げている。底部はレンズ状にふくらみをもつ。胎土には花崗岩粒が多く含まれ、色は暗茶褐色。焼成は良好である。21は小型甕である。内外面とも縦方向のケズリで仕上げる。胎土に角閃石を含み、色は茶褐色、焼成は良好である。

18～20は高杯である。18は杯部が２段に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。高杯と断定するにはやや躊躇され、壺の口縁の可能性もある。胎土には花崗岩粒が含まれ、色は赤褐色、焼成は良好である。19は脚柱部が直線的に立ち上がるが、20ではやや裾への開きが顕著である。

22は鉢である。器高10.6㎝、底部は平底を残し、口縁部は上外方に開く。外面は縦ハケ、内面はナデで仕上げる。23は器台である。復元口縁径は14.2㎝を測る。24は椀である。口縁径13.7㎝、高さ4.7㎝を測る。

４号周溝状遺構

３号の西斜面下で検出した溝で、３号に屈曲部の手前で切られる。

溝（図版14、第12図）

住居群と門口古墳との間に７条の溝を検出した。いずれも埋土は粗砂、小礫層で、１～４号溝は明瞭な切り合い関係を把握することはできなかった。短期間に繰り返し掘削されたためであろうか。溝はその流路の方向、溝の断面状態等によって３つに分類される・南に向かって弧を描きながら西に流れる断面U字形の溝群（１、２、３、４号溝)、北に向かって弧を描くU字形の溝（５号溝)、北から南に直線的に流路をとる断面「コ」の字形の溝（６、７号溝）である。

１号溝

溝群中最も北で検出した溝である。３号溝に切られるとみられる。時期は不明である。

２号溝

幅60㎝ほどの小溝である。埋土から弥生土器が出土した。３号溝に切られるとみられる。

出土土器（第19図、27）　27は２号溝から出土した。広口直口壺の口頸部である。頸部は短く外に開く。弥生後期後半の土器である。

３号溝

調査地点の東部から住居群を覆うように弧を描きながら掘られた小溝である。溝底部は凹凸が著しい。時期は不明であるが、５号溝に切られていた。

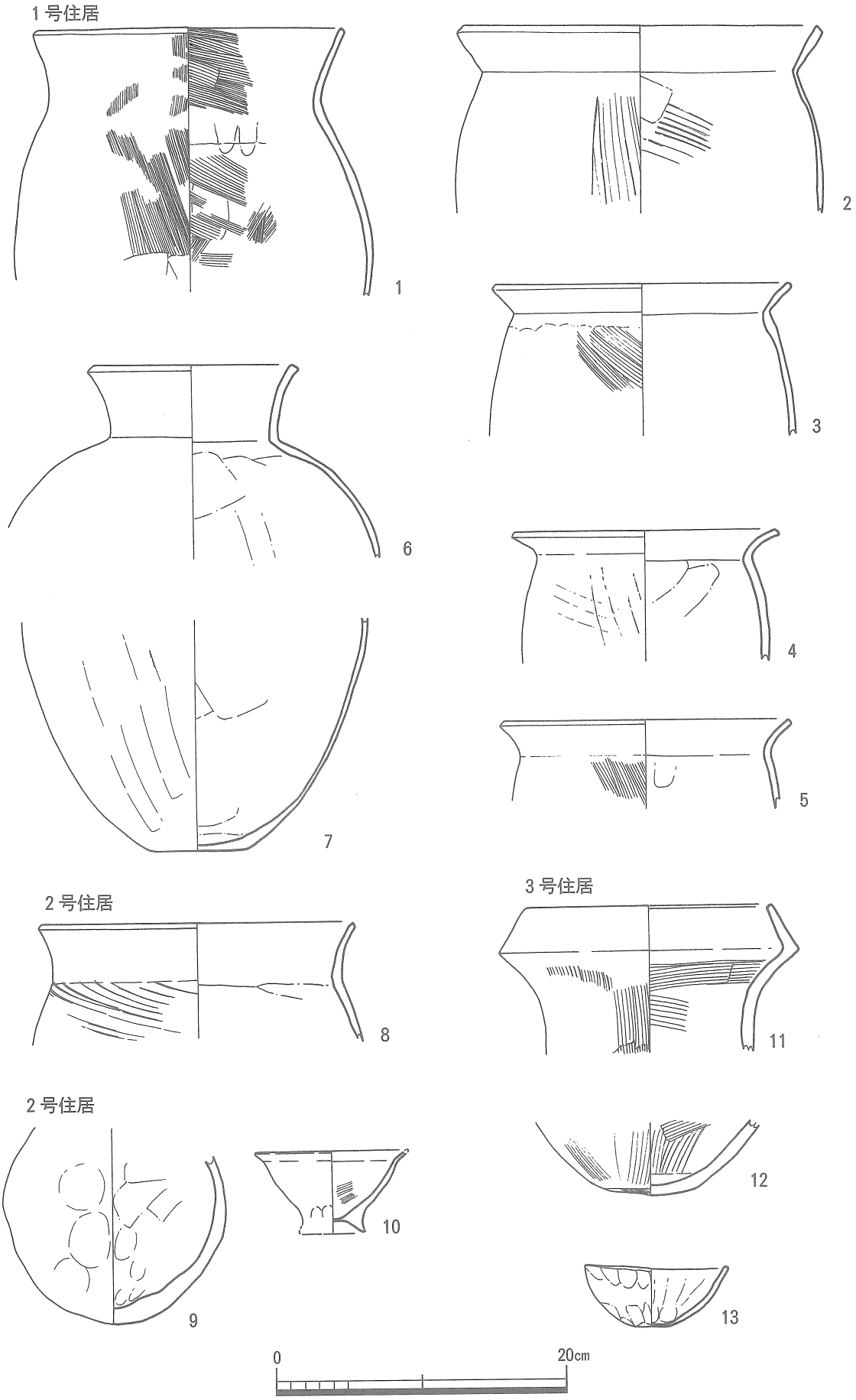
４号溝

幅60㎝ほどの小溝で、３号溝に切られる。時期は不明である。

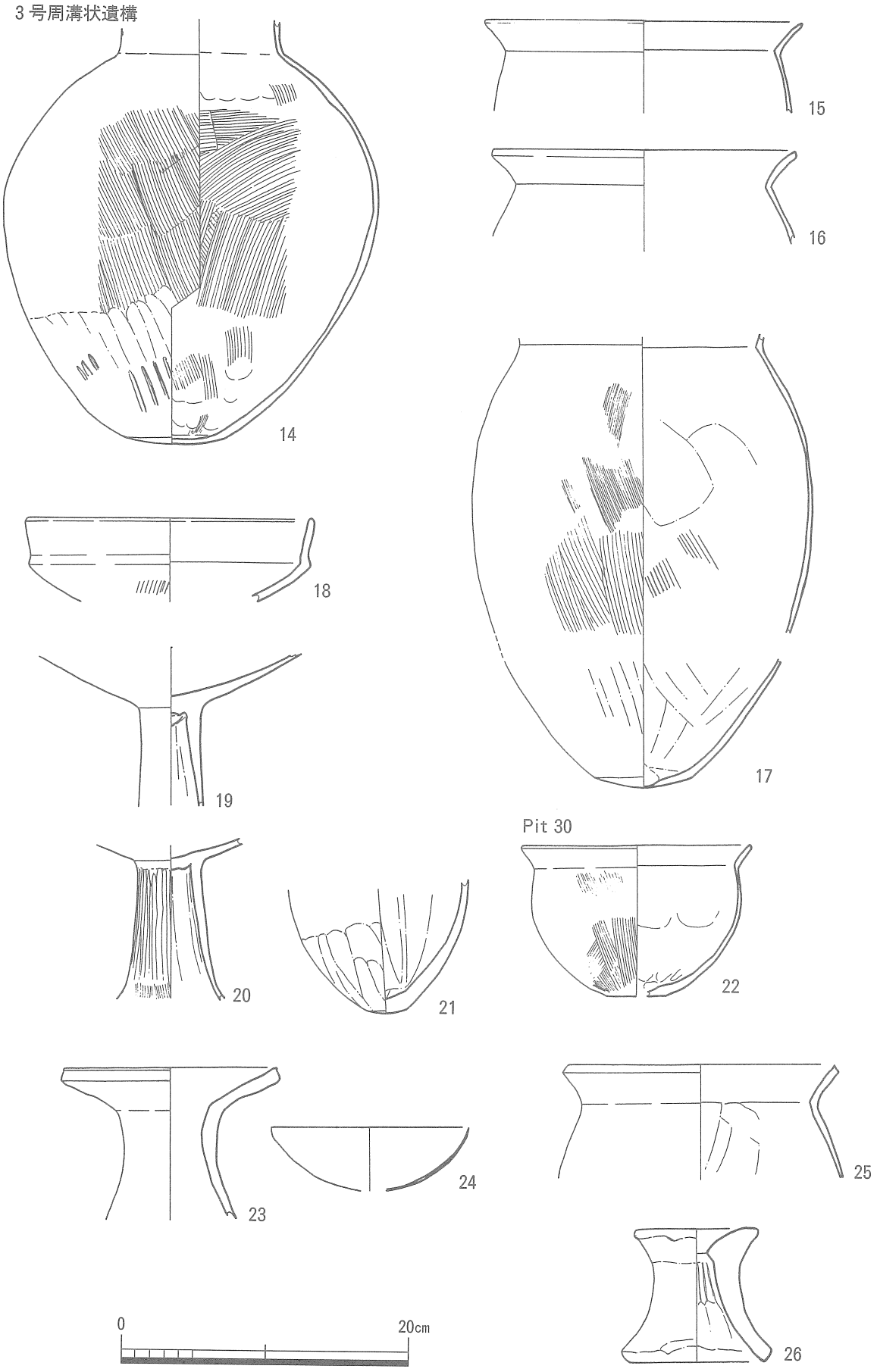
５号溝

幅157㎝～305㎝を測り、門口古墳の石室を中心に弧を描くように巡つていることから古墳の周溝の可能性もあるが、古墳石室に比べてかなり比高差があり、やや無理があるため、断定するには躊躇された。

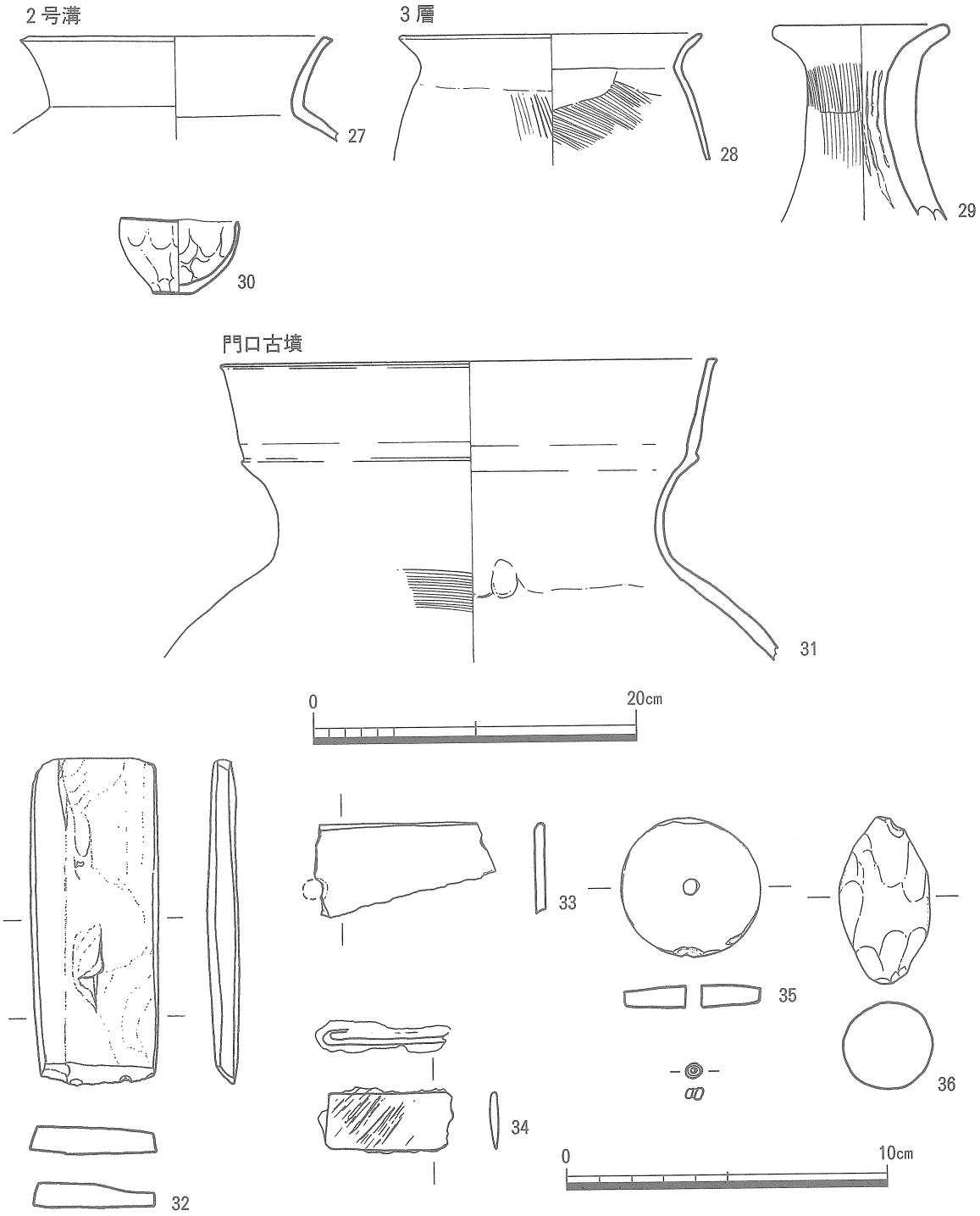
埋土中から弥生土器などとともに須恵器片が出土した、また、玄武岩の板石片が数片出土しており、周辺に箱式石棺墓が存在した可能性が高い。



第17図　第2地点出土遺物実測図①（1／4）



第18図　第２地点出土遺物実測図②（1／4）



第19図　第2地点出土遺物実測図③（27～31は1／4、32～37は1／2）

6号溝

調査区の北東から住居群に向かって直線的に掘られた幅30cmほど、断面「コ」の字形の小溝である。時期は特定できなかった。周溝状遺構に繋がる可能性もあるが、そうであるならば取水、導水溝ということになる。

7号溝

6号溝と並行して掘られた小溝で、中途で削平され消失している。時期は不明である。

その他の遺構、遺物

土器（図版45、第18図25、26、第19図28～31）

25、26はPit 30から出土した。25は甕の口縁部である。26は小型器台である。器高9.4cm。底径9.4cmを測る。

28、29、30は住居上面の包含層からの出土である。28は復元口縁径18.8cm、内外面とも刷毛で仕上げている。29は器台である。復元口縁径11.0cm。口唇部は丸くおさめる。外面には縦ハケが残る。

30は、ミニチュア鉢である。口縁径7.1cm、器高4.9cmを測る。

31は大型二重口縁壺の口縁部である。門口古墳の周囲表土から出土した。土器棺の一部とみられる。5号溝からは玄武岩板石も数片出土している。

当地では古墳時代前期の箱式石棺墓に板状剥離した玄武岩板石を用いる例が各所で認められ、近隣では東五反田遺跡、林崎古墳からも出土していることから、当地で出土した玄武岩板石も箱式石棺の棺材であったと推定される。第1地点でも当該期の墳墓群が発見されていることや地元の古老が周辺から箱式石棺が出土したと聞いていることから、この付近に古墳前期～中期にかけての墳墓群が点在していた可能性は高い。

土器は復元口縁径30.8cm、胴上部から短い頸部を経て擬口縁から直線的に上外方に開き口唇部にいたる。口唇端部は平坦面をなし、外側に小さくつまみ出している。胴外面には横ハケが、内面にはケズリの痕跡が認められる。

扁平片刃石斧（図版45、第19図32）

Pit 31の底面から出土した。硅質シルト岩製で、全長10.1cm、幅4.0cm、厚さ0.95cm、重さ69gを測る。ほぼ完形である。Pit内に埋納されたものと考えられる。

石庖丁（図版45、第19図33）

硬質砂岩製の石庖丁片である。背部と円孔の一部が残るのみ。

石製紡錘車（図版45、第19図35）

結晶片岩製で、直径4.4cm、厚さ7.2mm、孔径4.4mm、重さ24gを測る。中心部に向かって若干厚みを増す。

土製投弾（図版45、第19図36）

3層包含層から出土。全長5.2cm、厚さ2.7～2.85cmを測る。暗茶褐色で焼成は良好である。

(4) 第３、４地点

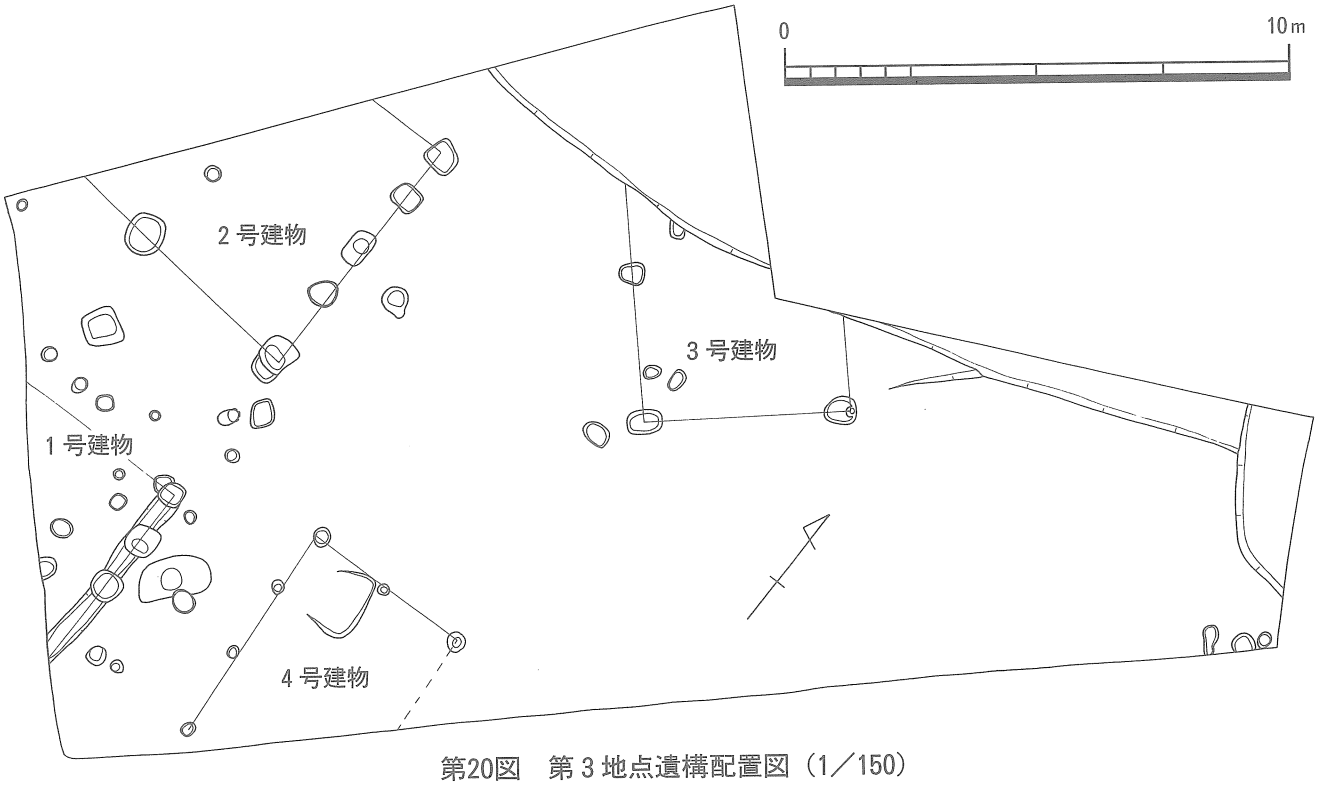
第３、４地点は、第２地点から北西に斜面を40ｍ下った標高46ｍ前後の地点に位置する。調査は第４地点→第３地点の順に実施したが、第４地点で検出した柱穴列が第３地点にかけて連続しており、第３地点において同一掘立柱建物の柱穴であることが判明したため、二地点を一括して報告することとした。古墳時代と推定される掘立柱建物３棟、溝２条、古代以降の掘立柱建物４棟、弥生時代の杭列群、不整形土坑等を検出した。また、第４地点南部では、弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺物包含層があり、土器、石器等が出土した。杭列、土坑群は１号建物などと同時期の古墳時代前期と推定される。

包含層から出土した弥生時代前期～中期の遺物では土器量に比して石斧の破損品が比較的多く出土している。遺跡の南背後には森林地帯が控えており、調査地点周辺山林で切り出された木材の粗加工などがこの地で行なわれていた可能性があろう。

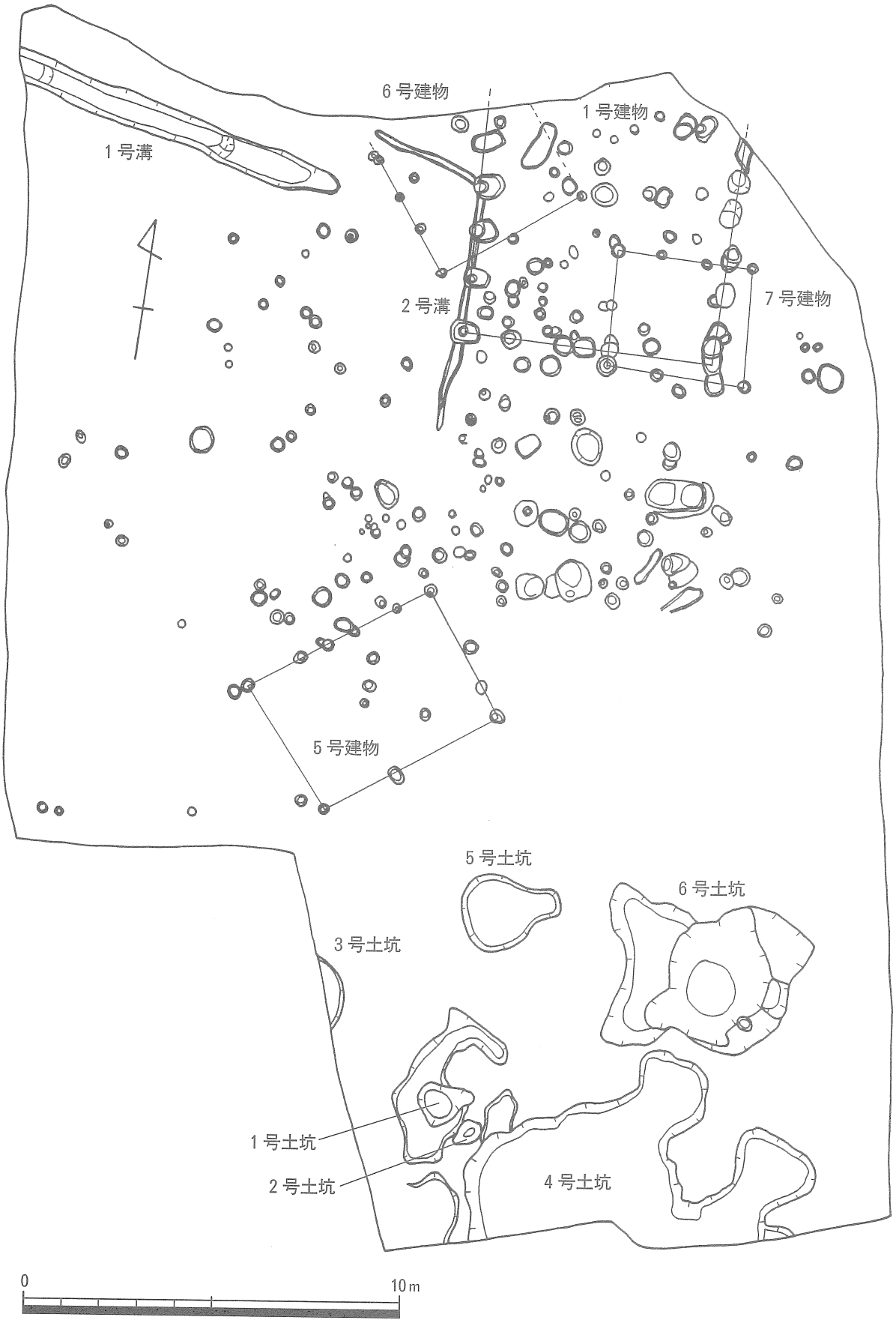
掘立柱建物

１号建物（第22図）

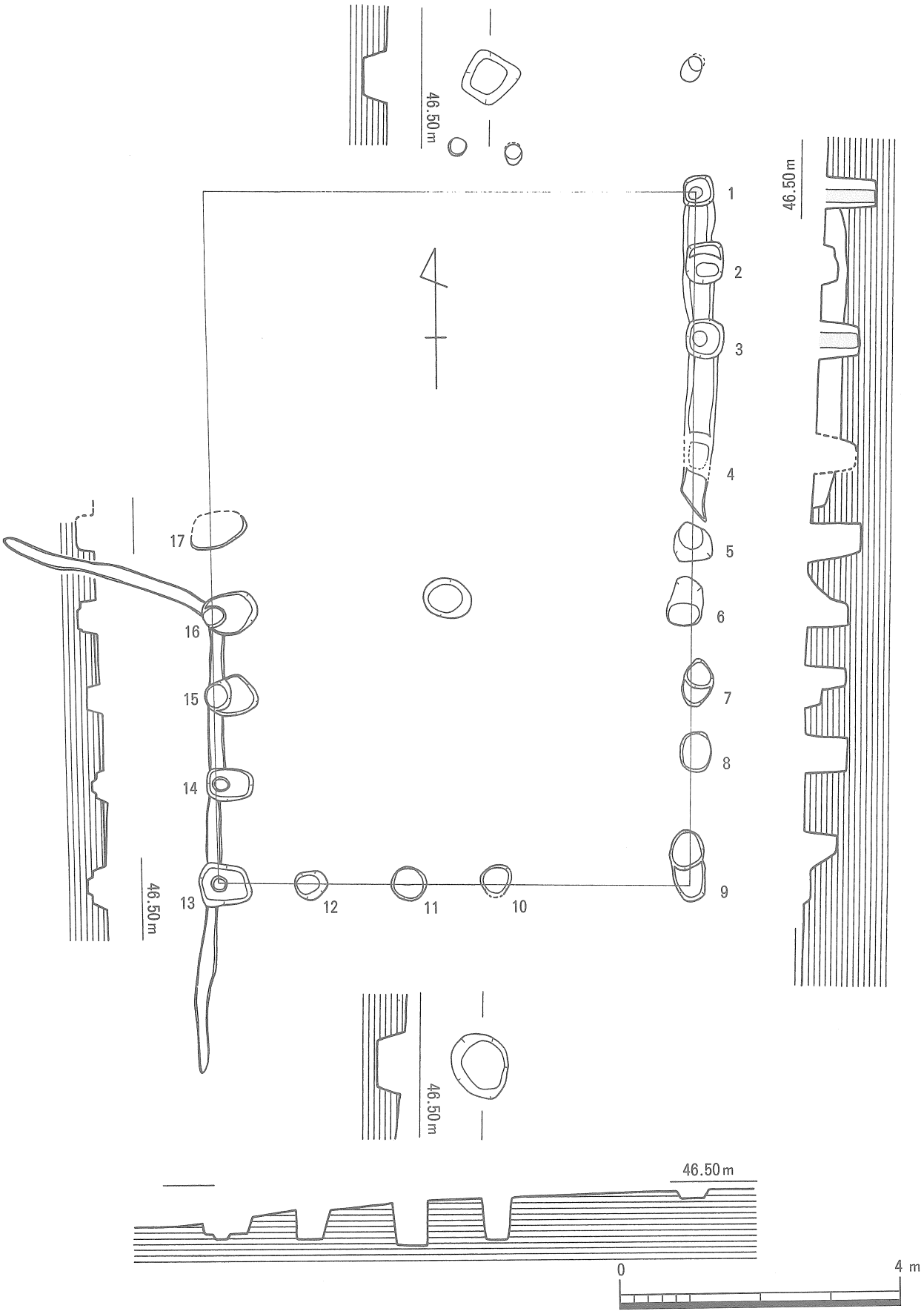
第３地点と第４地点にまたがって確認された大型の掘立柱建物である。検出した柱間間隔には144㎝～192㎝と長短のばらつきがあること、また柱根が残るもの（柱穴１、２、３）柱の抜き取りが行なわれたもの（柱穴６、７、９）、掘り方が２段掘りになっているもの（柱穴13、14、15、16）、布掘りをおこなっているもの（柱穴１、２、３、４、13、14、15、16）など、柱穴の埋設状況、遺存状況に多様性がみられるが、東、南、西側柱列それぞれ柱穴が一直線に並び、各柱穴列において柱穴の深さに均一性が認められることから建物1棟分の柱穴群と判断した。



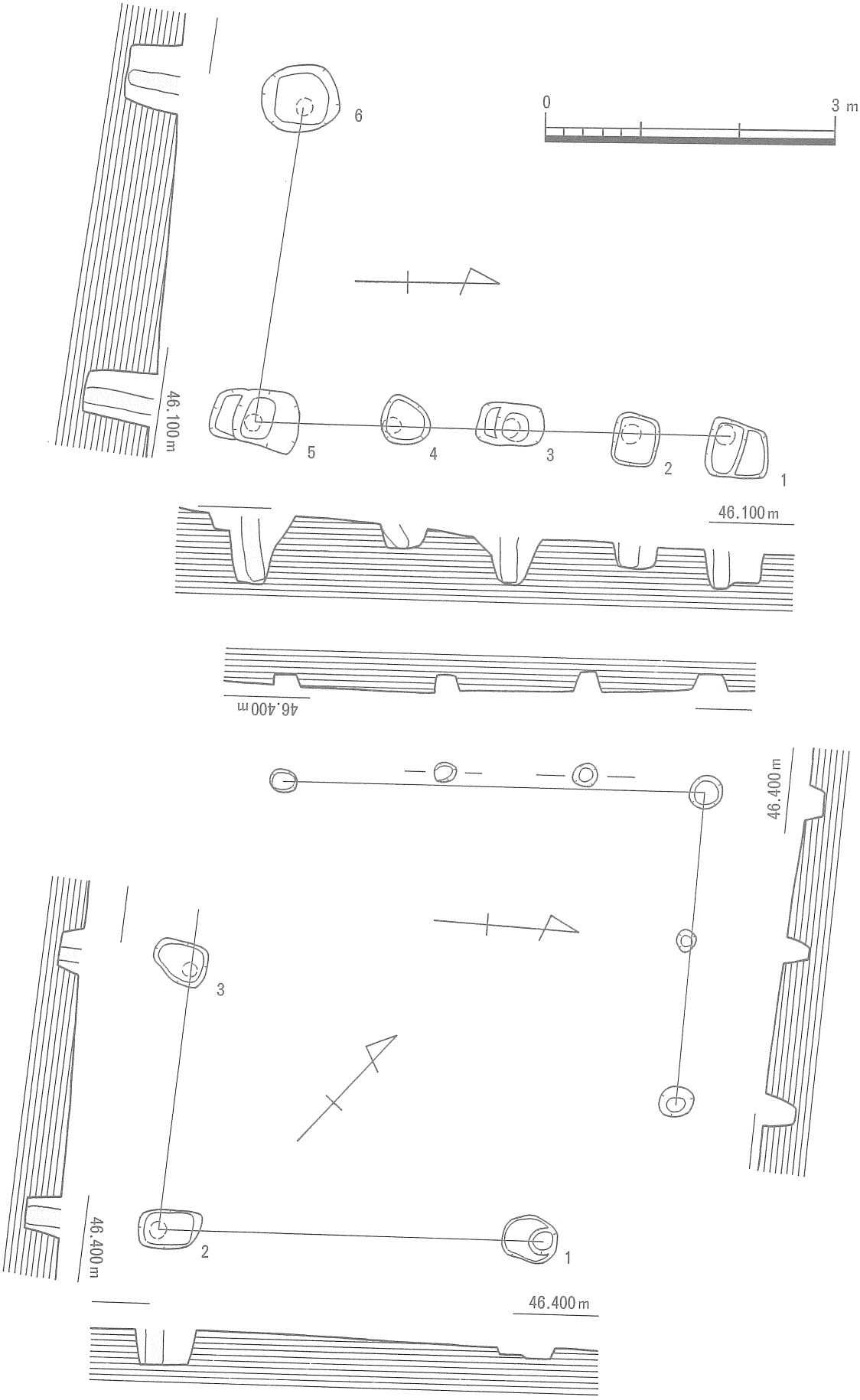
第20図　第３地点遺構配置図（1／150）



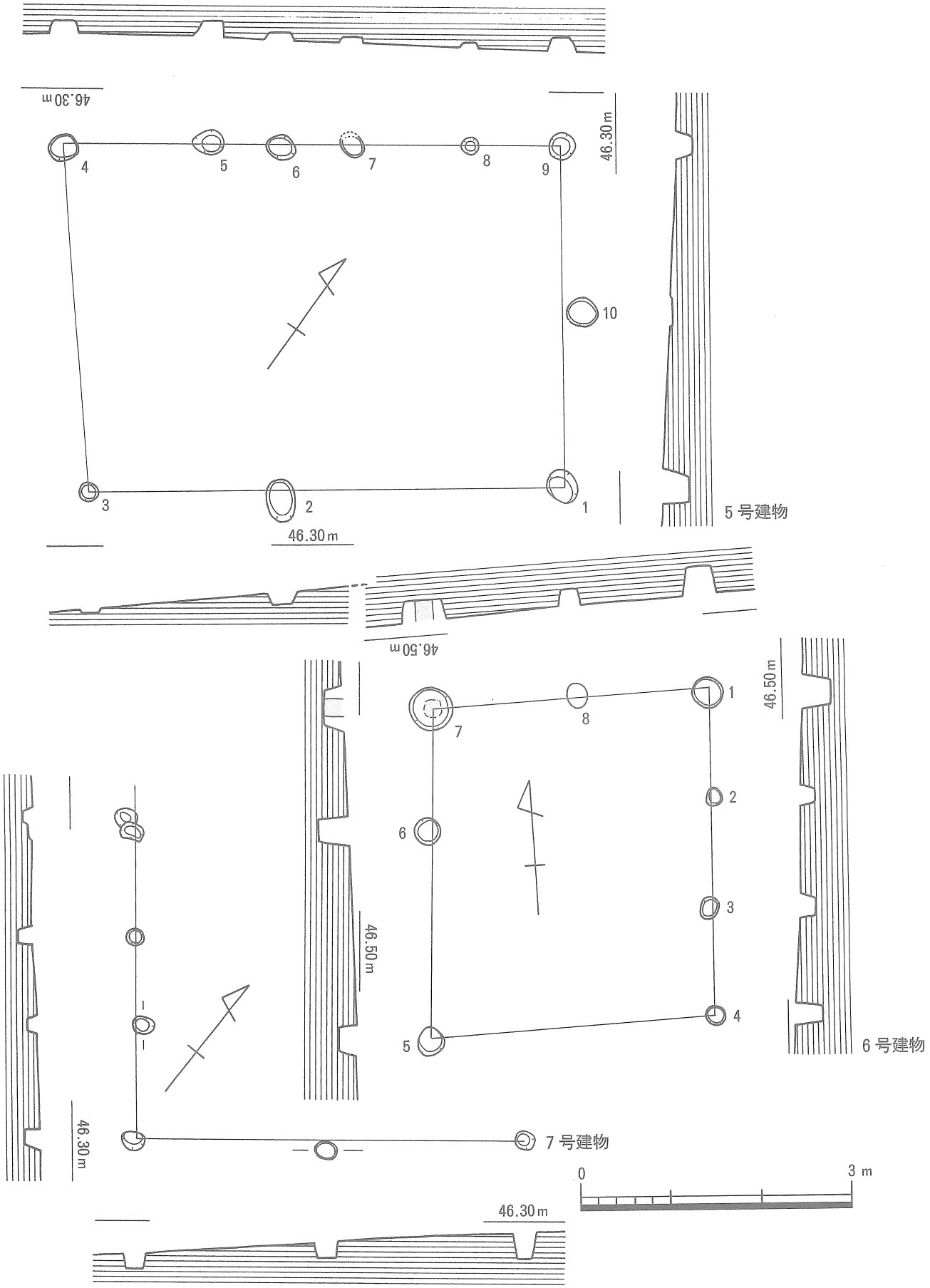
第21図　第４地点遺構配置図（1／150）



第22図　第３、４地点１号掘立柱建物実測図（1／80）



第23図　2、3、4号掘立柱建物実測図（1／60）



第24図　第４地点５、６、７号掘立柱建物実測図（1／60）

主軸方位はＮ１°Ｗでほぼ南北方向に向く南北棟建物である。建物の北西部コーナー付近が未発掘であるが、南北梁行８間9.88ｍ、東西桁行５間6.72ｍと推定される。

柱穴掘り方は方形ないしは長方形プランで、遺存状況の良好な柱穴３では59㎝×56㎝、柱穴13では72㎝×64㎝を測る。建物の南北主軸延長上に独立棟持柱と推定される柱穴18、19が、また、建物中央には心柱となる柱穴20がある。柱穴８、柱穴10では針葉樹材とみられる柱根が出土した。

柱穴13～16の柱穴上には２号溝があり、柱穴16から北西方向に屈曲しさらに３ｍほどのびる。この溝の西には１号溝が位置し、この小溝とほぼ並行して西に延びていることから、１号建物、１、２号溝は同時期の遺構と考えられる。１号溝からは布留式の高杯、有段鉢が出土していることから、１号建物は古墳時代前期と推定される。

２号建物（第23図）

第３地点で１号建物の北で検出した。当初、柱穴１～５と１号建物の柱穴１～４と合わせて一連の柱穴群と理解していたが、柱穴５から１号建物までやや柱間が開いていること、若干柱の延長方向にずれが認められたことなどから、１号とは別棟と判断した。

柱穴列は調査区外に延びていることから性格な建物規模は不明である。柱穴は方形あるいは長方形プランで、柱穴１では60㎝×60㎝、深さ40㎝を測る。東側柱は柱穴５が最も深く70㎝で、他は交互に浅い柱穴と深い柱穴が並ぶ。柱穴６ではヒノキ材と推定される柱根が遺存していた。柱根の径は20㎝ほどであった。

１号建物と同じく古墳時代前期の建物と推定される。

３号建物（第23図）

１、２号建物の南東で検出した建物で、現状では桁行３間、梁行２間であるが、遺構は調査区の南にさらにのびる可能性がある。柱穴はいずれも円形で、径は20㎝～36㎝であった。中世以降の建物と推定される。

４号建物（第23図）

２号建物の東で検出した建物で、１間×１間を確認したにとどまる。柱穴は不正長方形あるいは不正楕円形で、柱穴２では掘り方は60㎝×39㎝を測る。柱穴掘り方プランが近似していることから１、２号に近い弥生～古墳時代頃の建物と推定される。

５号建物（第24図）

第４地点において１号建物の西で検出した建物で、桁行5.46ｍ、梁行3.8ｍを測る。柱穴は円形で径は20㎝～38㎝を測る。柱間寸法は一定していないため、建物とするにはやや無理とも思えるが、一応建物として報告しておく。時期は明らかにできなかったが、中世以降と推定される。

６号建物（第24図）

第４地点で検出した南北棟の建物で、１号建物の南東角で切りあう。桁行3.6ｍ、梁行3.1ｍを測る。柱穴掘り方は円形で、隅角柱穴１、５、７は他の柱穴よりも径、深さともに大きい。中世以降の建物と推定される。

７号建物（第24図）

第４地点で検出した建物で、現状では桁行4.2ｍ、梁行3.46ｍを測るが、遺構は調査区北に続くと推定されるため、規模は確定しない。柱穴掘り方は円形プランで、径は20㎝前後と小さい。中世以降の建物と推定される。

溝

1号溝（図版23、第21図）

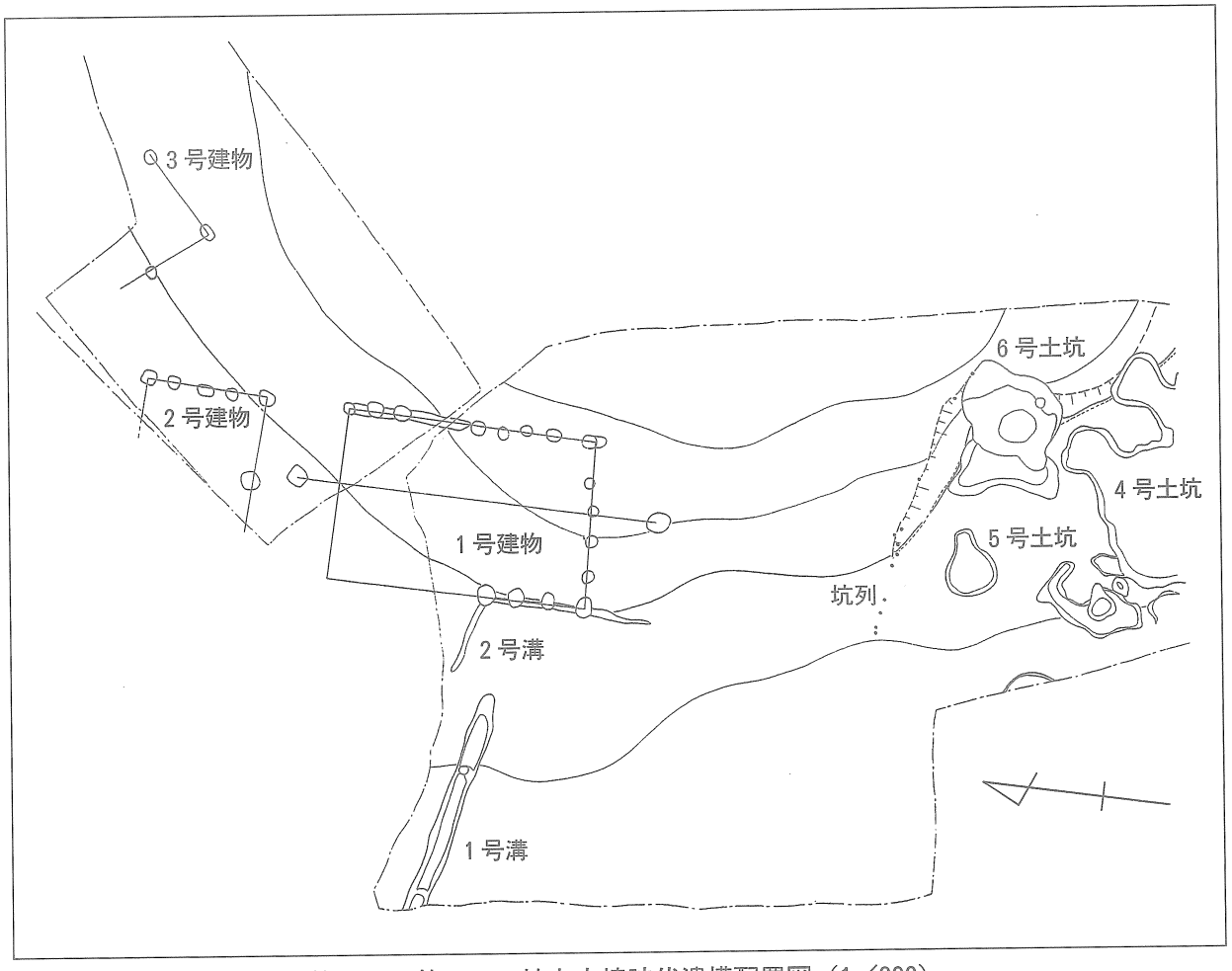
第4地点で検出した溝で、1号建物の西に位置する。断面「コ」の字形で、幅80㎝～92㎝、深さは10㎝～45㎝を測る。1号建物柱穴16から北西に延びる溝と平行方向に延び、西側にむかって急激に深みを増す。溝埋土から土師器高杯、甕、有段口縁鉢などが出土した。古墳時代前期後半の溝である。

出土土器（図版45、第26図15，16）

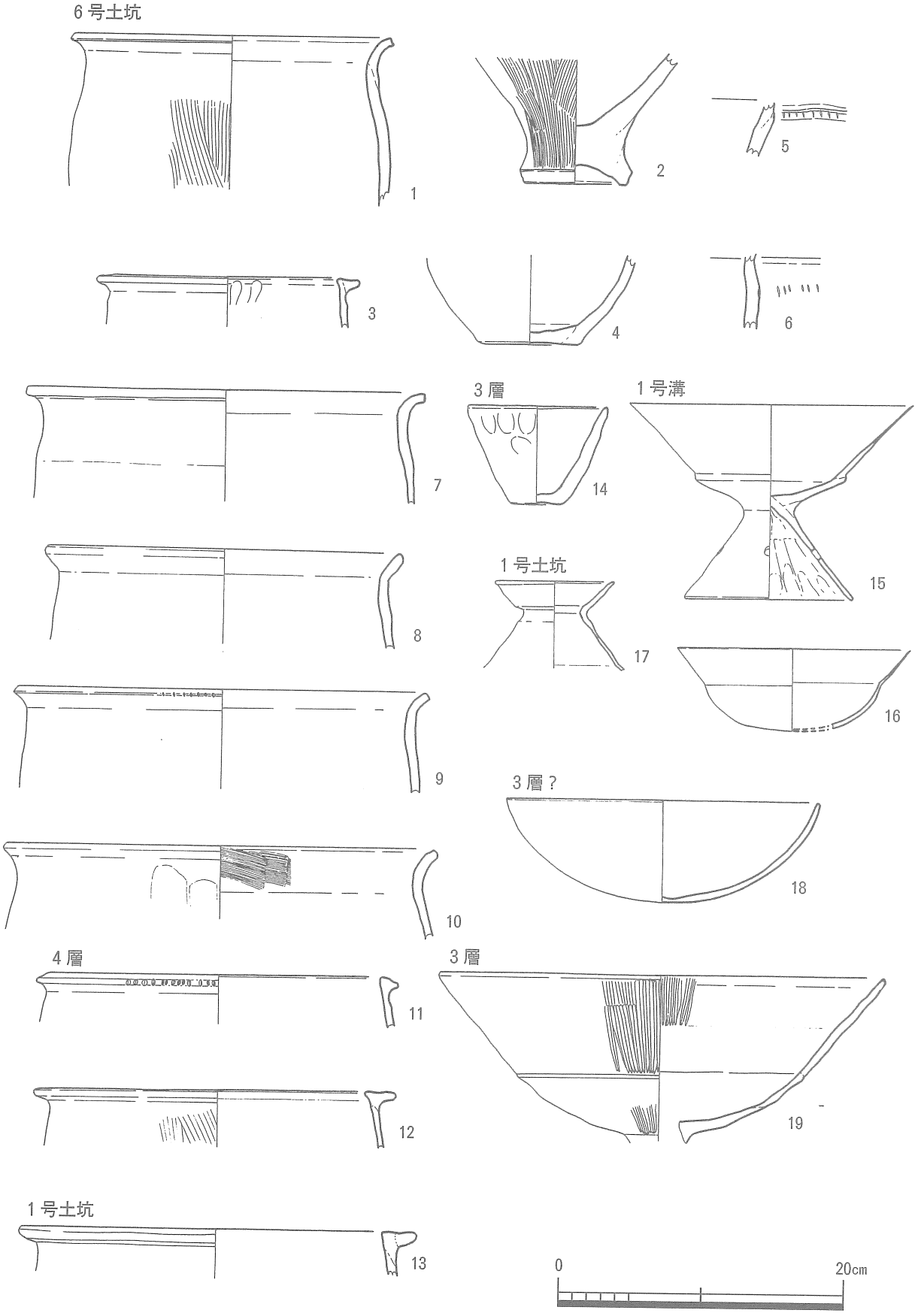
15は、高杯である。器高13.6㎝口縁径31.2㎝を測る。器壁は薄く、脚部は上面から直線的に裾に開き、脚部中ほどに円形透孔が四方に入る。赤褐色を呈する。16は有段口縁鉢である。復元口径は16.3㎝。器壁は薄く仕上げる。赤褐色を呈する。

2号溝（第25図）

第4地点で検出した幅18㎝～24㎝、深さ10㎝ほどの小溝で、1号建物の柱穴　13～16に切られる。柱穴16から北西方向に直線的にのびる。出土遺物はないが、1号建物に切られ、1号溝とほぼ平行していることからこれらと同時期の遺構と推定される。



第25図　第3、4地点古墳時代遺構配置図（1／300）



第26図　第３、４地点出土土器実測図（1／4）

第27図　第３地点出土石器実測図①（1／2、1／3）

杭列

第４地点の南東部で、斜面を削って整地し、その上場に沿って調査区を東西に横断する杭列を検出した。杭列は西部では間隔を詰めて密に、東部では削り出された斜面の傾斜変換線に沿って間隔を空けて数本が打ち込まれており、総数は12本であった。杭の打ち込まれた密度は粗く、また横木など土留め材も確認できなかったため、斜面の保護などの地形保全が目的ではなく、何らかの土地区画の明示が目的であったと推定される。

杭列群の南には、弥生時代～古墳時代の土器、石器などが包含された遺物包含層があり、杭列は古墳時代前期の土器を含む第３層の上面から打ち込まれていたこと。また、杭列と１号溝の掘削方向がほぼ同じであることなどから、杭列は古墳時代の遺構と推定した。

不整形土坑群

前出杭列群の南で３層下の灰黒色の粘土層下で淡黄褐色の粘質土を地山として、不整形な土坑群が確認された。１号、２号、３号土坑は木根であることを確認したが、４号、５号、６号土坑は、人工的に掘削されたものである。埋土上層から弥生時代～古墳時代の土器が出土している。調査期間が十分にとれず、調査半ばで埋め戻した。

出土土器（第26図１～10，13，17） ４は小型壺、他は甕である。２、３は城ノ越式の土器で、２は底部が上げ底となるが、外面に丁寧な面取りが行なわれている。他は板付Ⅱ式に相当する。如意状にくびれた口縁から肩の張る胴部に続くもの（1、７、８、９）と口縁下に刻み目突帯の名残をとどめたもの（５、６）がある。いずれも小片であった。17は土師器の小型器台である。

包含層出土遺物

不整形土坑群の上面および調査区東斜面において２層の遺物包含層が確認された。２層ともに薄く、厳密に遺物を分層して取り上げることはできなかったが、概ね上層（３層）は弥生時代前期～古墳時代、下層（４層）は弥生時代前期～中期の遺物が包含されていた。

弥生時代前期～中期の遺物としては土器の出土量に比べて太形蛤刃形石斧を主とする石斧の破損品の出土量多いことが目を引く。

出土土器（第26図11，12，14，18，19）

11、12は城ノ越式の甕片である。14はミニチュア鉢である。18は土師器鉢である。19は大型の高杯杯部で、復元口縁径は31.2㎝を測る。内外面ともに縦方向のヘラによる研磨で仕上げる。色は赤褐色で焼成は良好である。

出土石器（図版45、第26図）

１は結晶片岩製紡錘車である。直径4.4㎝、厚さ0.5㎝、孔の直径は4.5㎜を測る。重さ21ｇほどある。２は頁岩質石材製の石庖丁片である。３～10は磨製石斧である。３は頁岩製、５、10は硬質細砂岩製、９は玄武岩製と考えられる。11は安山岩質石材を用いた打製土掘具と考えられる。

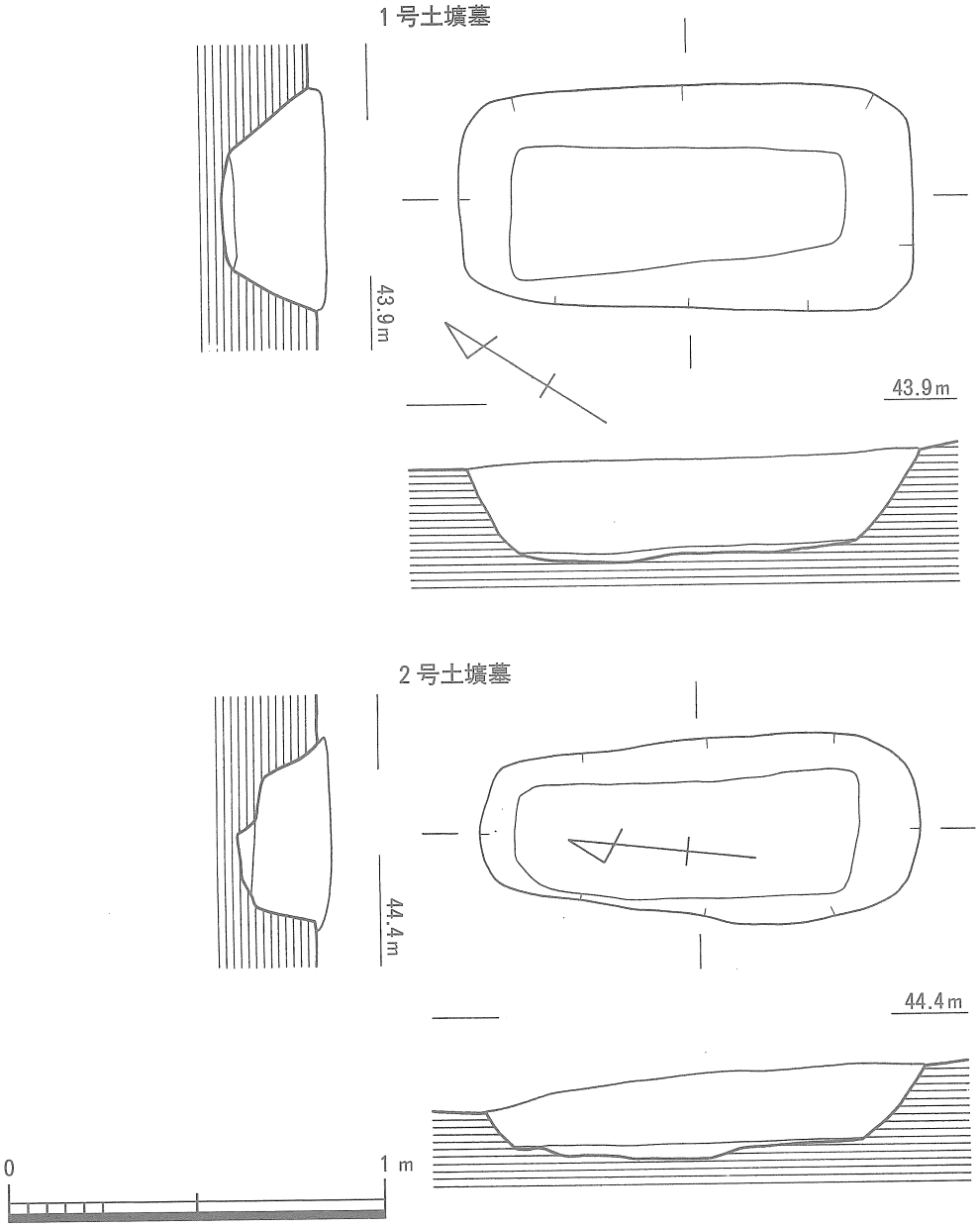
12は柱状片刃石斧片であろう。硅質シルト岩製である。

(5) 第５地点

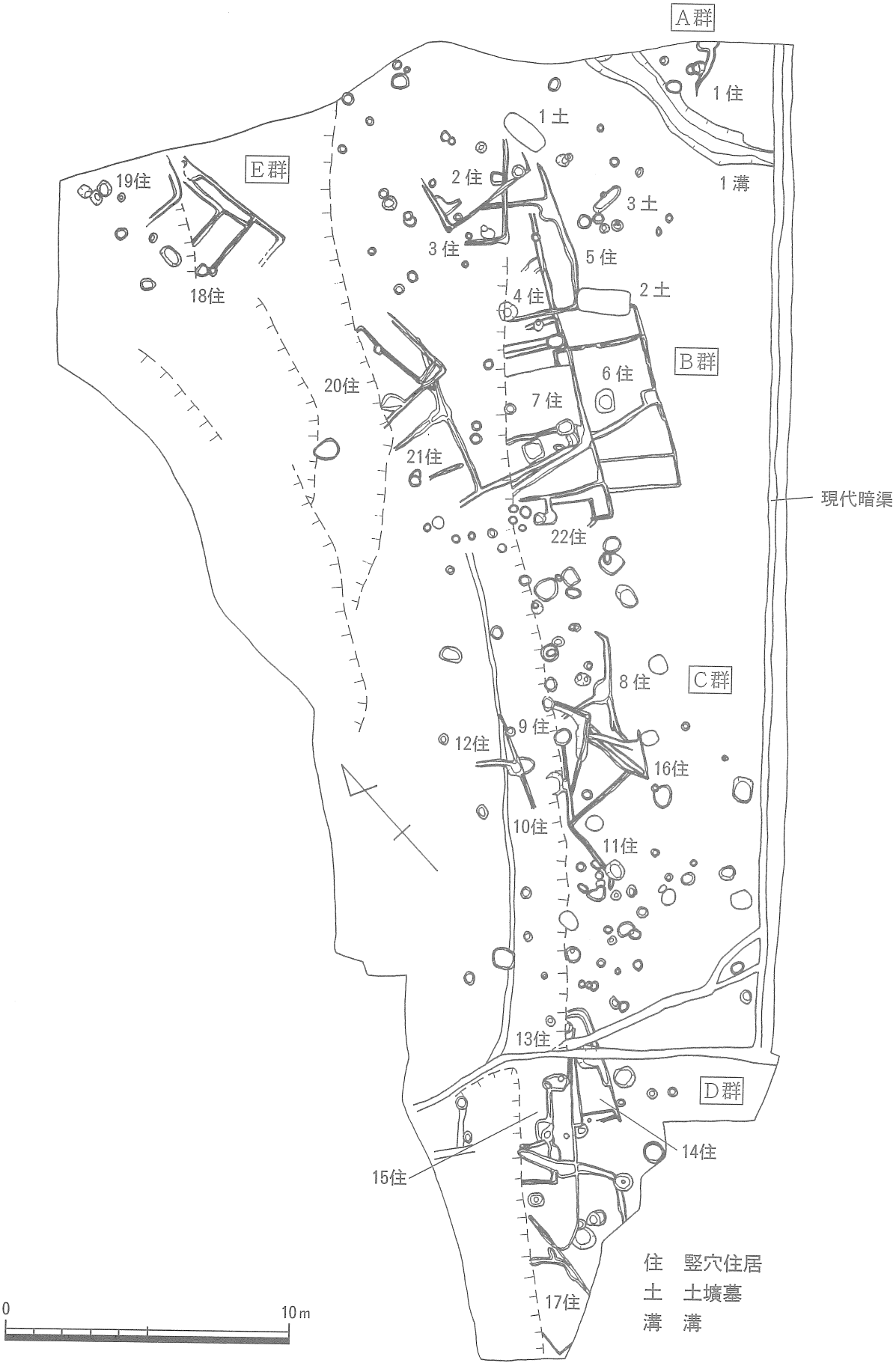
第２地点の北西70ｍに位置する。長野川中流域平野を見おろす標高43ｍ～45ｍの丘陵北側の緩斜面で、遺跡の最北端に位置する。

調査地点からは弥生時代後期～古墳時代前期にいたる22棟の竪穴住居、２基の土壙墓、溝１基等を調査した。

遺構は後世の水田開削等によって大きく削平され、竪穴住居の多くは、わずかに周溝の一部を確認できるにとどまった。調査区の東部、上段水田との境付近で顕著な遺構が検出できなかったのは後世の削平により遺構が消失したものと推定された。



第28図　土壙墓実測図（1／20）



第29図　第５地点遺構配置図（1／200）

墳墓

3基の土壙墓を検出した。いずれも中世墓と推定される。

1号土壙墓（図版33、第28図）

調査地点の北東端部近くで検出した隅丸長方形の土壙墓である。掘り方の主軸方位は　N°33Wにとり、南側の墓壙幅が広いことから、頭位は南向きであったと推定される。主軸長121㎝、北側幅50㎝、南側幅59㎝、深さ25㎝を測る。墓壙の底面は2段掘りになっていて、主体部は木棺であったと推定される。

2号土壙墓（図版33、第28図）

1号土壙墓の南西5ｍで検出した長方形プランの土壙墓である。6号住居の東端を切って掘り込まれている。掘り方の主軸方位はN°6Wにとり、主軸長197㎝、幅48㎝、深さ24㎝を測る。主体部は木棺であった可能性がある。

3号土壙墓（第29図）

1号土壙墓と2号土壙墓の中間からやや東寄りで検出した長楕円形の土壙墓で、主軸方位はN89°Wにとる。全長120㎝、幅39㎝、深さ22㎝を測り、他の2基に比べ掘り方の長さ、幅ともに小さい。

竪穴住居

調査区内で計22棟の竪穴住居を検出した。いずれも方形ないしは長方形プランの住居群で弥生時代後期後半～古墳時代中期の遺構群である。調査時点では明確な掘立柱建物は確認できなかった。

遺存状態が悪く平面形が完全に把握できた住居はない。このため、主柱の有無その配置等遺構の構造の詳細については明らかにできなかった。また6号住居では床面から炉が検出されたが、カマドを有する住居は確認されなかった。

住居群の特徴としては、排水施設が多用されていることがあげられる。屋内に排水用の周溝と集水坑、更には屋外への排水溝をめぐらせていた。6号、21号住居のように排水溝を共有するもの、17号住居では、斜面背後に排水溝を設けるものもある。水はけの悪い赤色ローム土壌をベースとする丘陵斜面に築かれたためであろうか。

住居群はその配置から大きくA～Eの5群に分かれ、各々の群内で切り合いをもちながら継続して営まれた様相がうかがえる。各群ごとの住居の切りあい関係は以下のとおりとなり、B群が最も多くの切りあいが認められる。

なお、各群間の住居の並行関係については十分に把握することができなかったが、多くとも概ね下記のとおり2～3棟が同時期に存在した程度であったと推定される。

A群　1号
　　20号

B群　4号→6号→7号→5号→3号→2号
　　21号

C群　8号→16号→9号→10号→11号→12号

D群　13号→14号→15号→17号

E群　18号→19号

1号住居（図版28、第30図）

調査区の東端で周溝と集水坑をかろうじて確認したにとどまるため詳細は不明である。1棟であるがとりあえずA群としておく。柱穴から土師器の高杯脚片と甑片が出土した。

甑は土師質で外面に格子目のタタキが残っている。小片であるため、実測はできなかった。

2号住居（図版28、第30図）

B群の東端で検出した（長）方形プランの住居で3号、5号住居を切る。周溝を確認したが、北部は削平により消失しているため詳細は不明である。東西幅は3.54m以上を測る。

出土土器（第36図1）　1は鉢である。器高9.1cm、復元口縁径18.4cmを測る。底部は丸底化している。胴下半部はヘラケズリによって仕上げる。

3号住居（図版28、第30図）

B群に属し、5号住居を切るが3号住居に切られる（長）方形プランの住居である。南隅角付近の周溝のみを確認したにとどまるため、詳細は不明。南東壁には集水坑がある。実測すべき遺物はなかった。

4号住居（図版28、第30図）

B群中央に位置し、5号、7号住居に切られる（長）方形プランの住居である。群中南東も古い住居である。南東壁の中ほどに集水坑があり、それから西に向かって排水溝が伸びているが、削平のため、延長方向は不明。埋土からわずかに底部を残す壺片が出土している。弥生時代後期後半の住居と推定される。

5号住居（図版28、第30図）

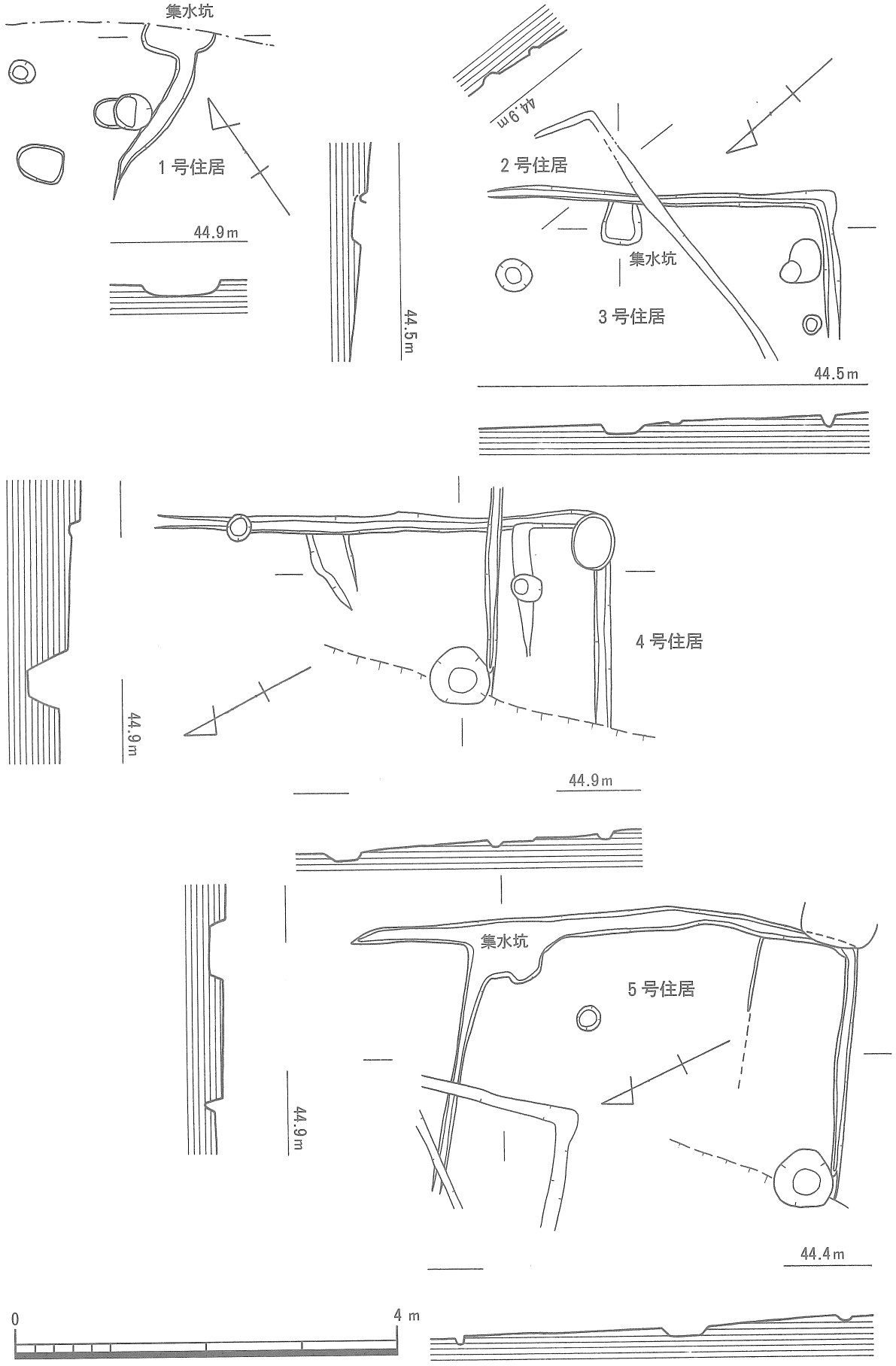
4号、6号住居を切るが、2号、3号住居に切られる。南東壁中ほどに集水坑が掘られ、それより北西方向に向かって排水溝が伸びる。B群に属する。埋土からは古式土師器が出土している。

出土土器（図版46、第35図2～6、第36図18）　2、6は甕である。2は外面胴部には平行タタキ、口縁部では斜めハケ、内面には横ハケが施される。6は胴下半部である。底部は丸底で外面は縦ハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。3は広口壺である。頸部は直立し、口唇部は外反する。4は小型甕である。内面には刷毛による仕上げ痕跡が残る。5は器台である。18は高杯杯部である。復元径は27.3cm。口縁部は大きく外反する。

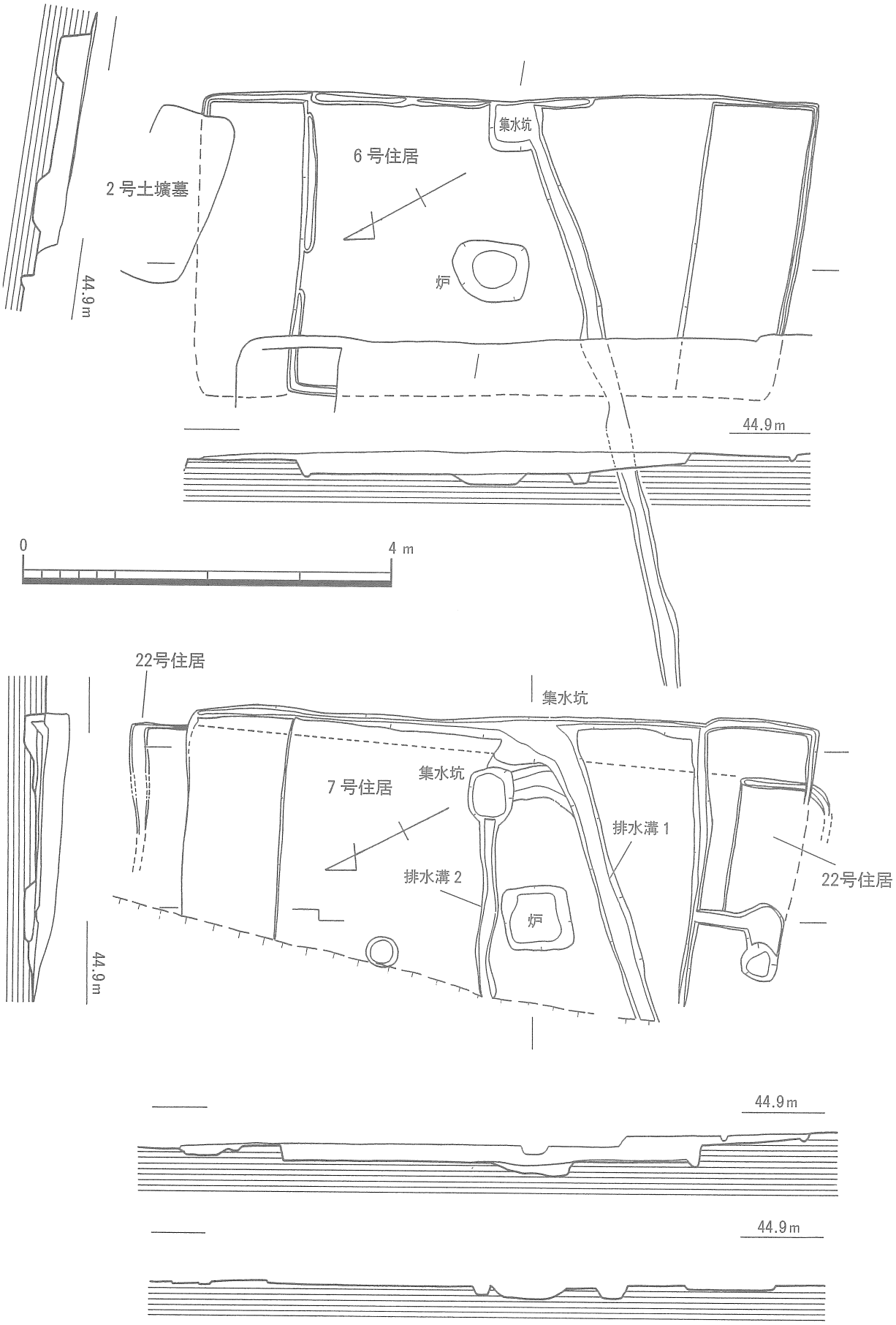
6号住居（図版29、30、第31図）

5号、7号住居に切られる長方形プランの住居で、B群に属する。遺構検出当初7号住居との切り合い関係が不明瞭であったので同時に下げ始め、6号住居のベッド状遺構を確認した段階で7号住居が6号住居を切ることを確認することとなった。南北長6.69m、幅は3.34mを測る。南北両壁沿いにベッド状遺構を削りだしている。床面中央に83×65cmの不正長方形の炉が掘り込まれている。また、南東壁中央下に集水坑があり、それより西に向かって排水溝が伸びている。この排水溝は21号住居の周溝に接続されていることから、21号住居は6号住居と同時期に共存していたことがわかる。住居の廃棄後に多量の土器が投棄されており、埋土から多くの土器片が出土したが、小片が多く、実測できたものは15点である。いずれも弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器である。

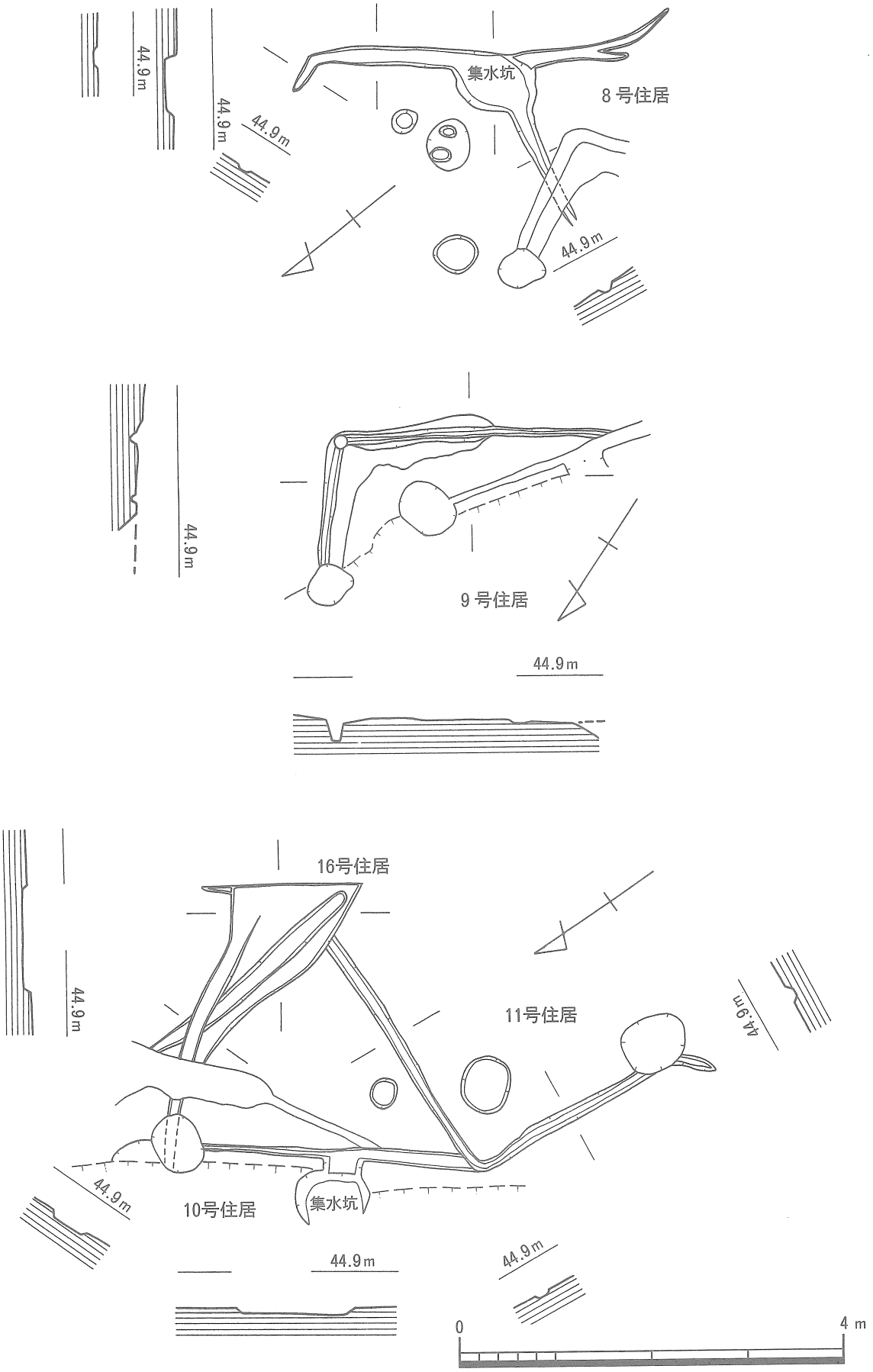
出土土器（図版46、第36図7～9、第37図10～17，19～23、第39図39）　7～10は甕である。いずれも長胴で底部の残るもののうち、8は平底を残すが、9は尖底ぎみの丸底である。胴外面はいずれもした半部はケズリを行なった後、板ナデ、内面はハケ、あるいはナデで仕上げている。11～



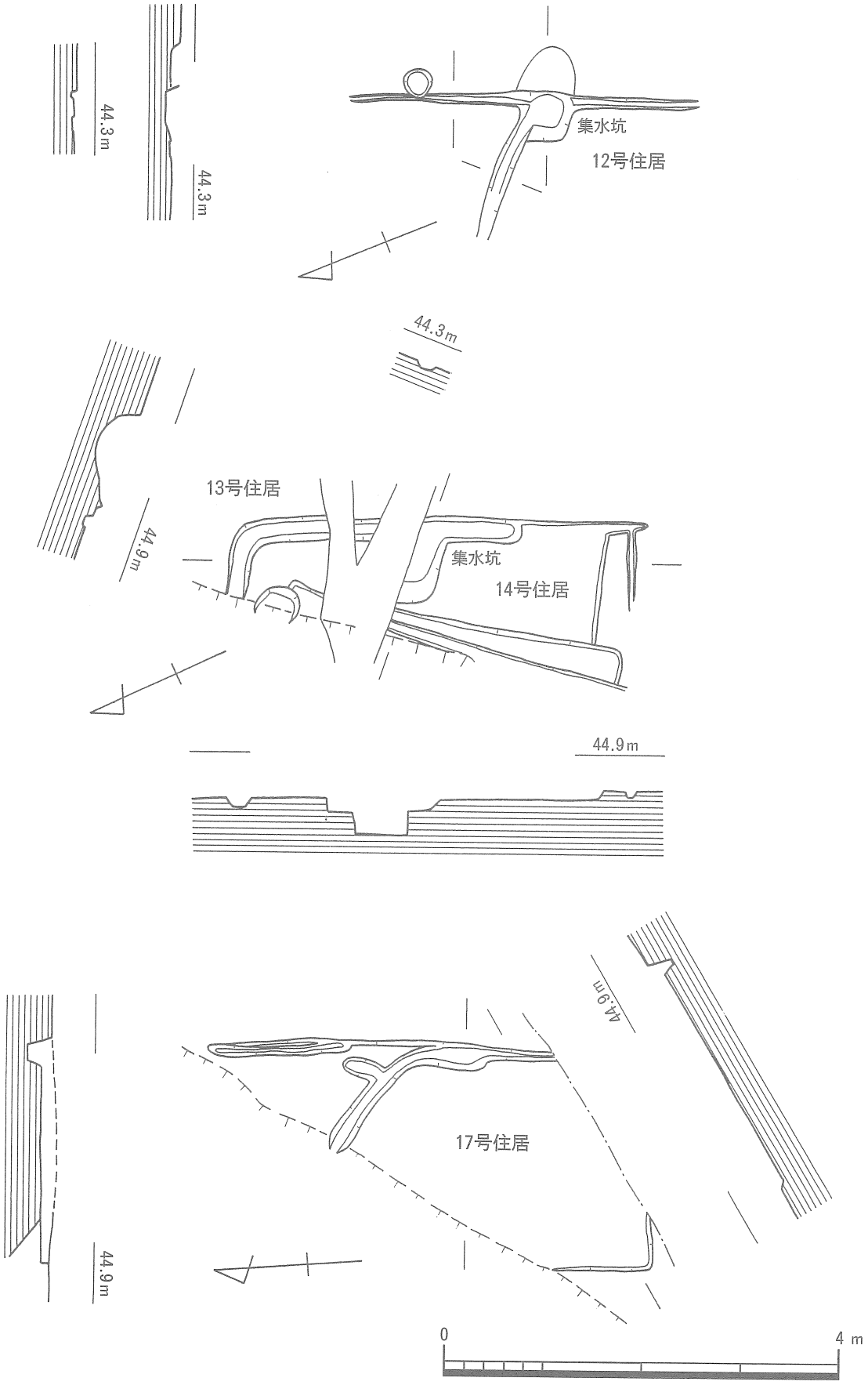
第30図　1、2、3、4、5号住居実測図（1／60）



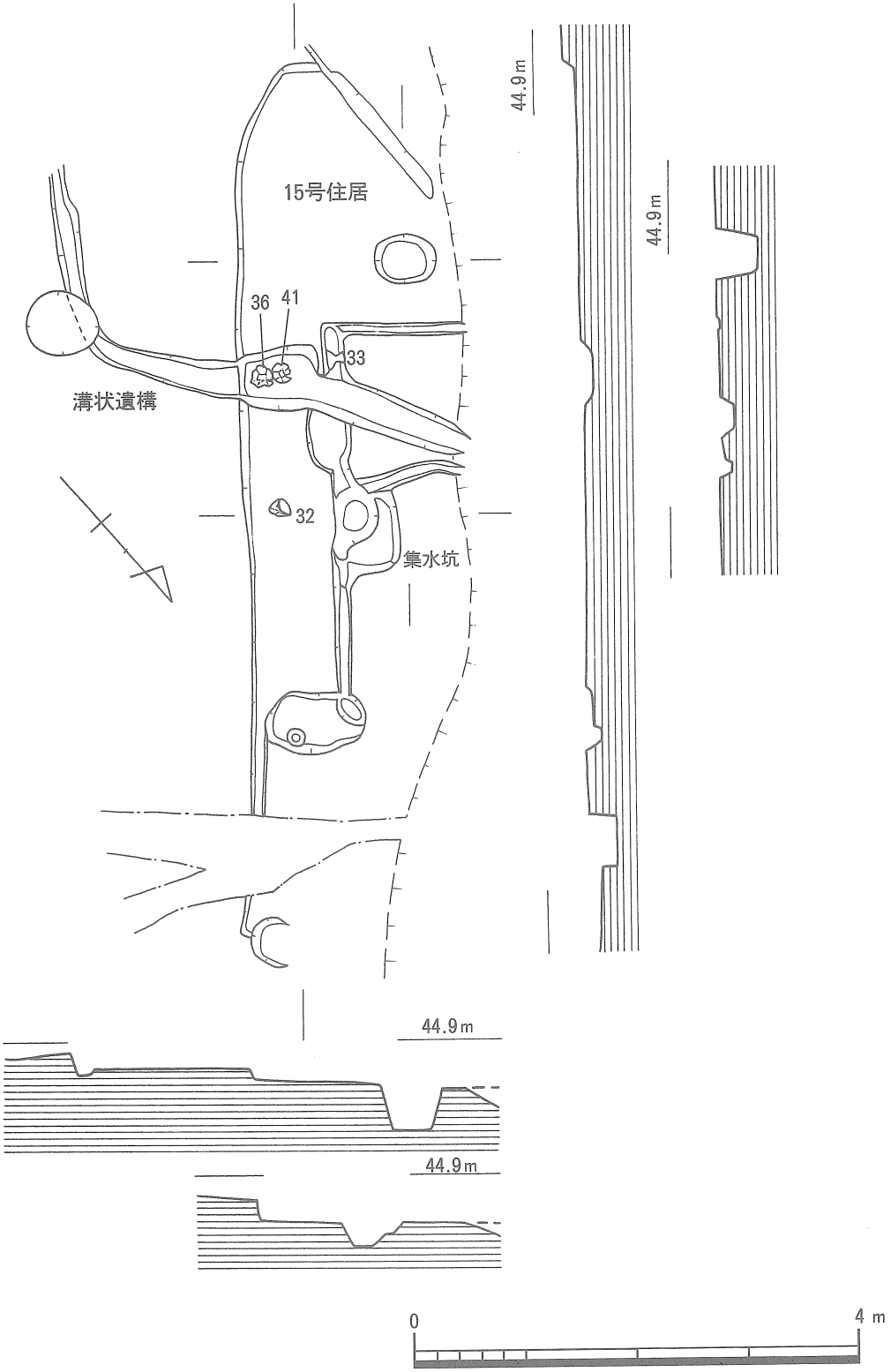
第31図　6、7、22号住居実測図（1／60）



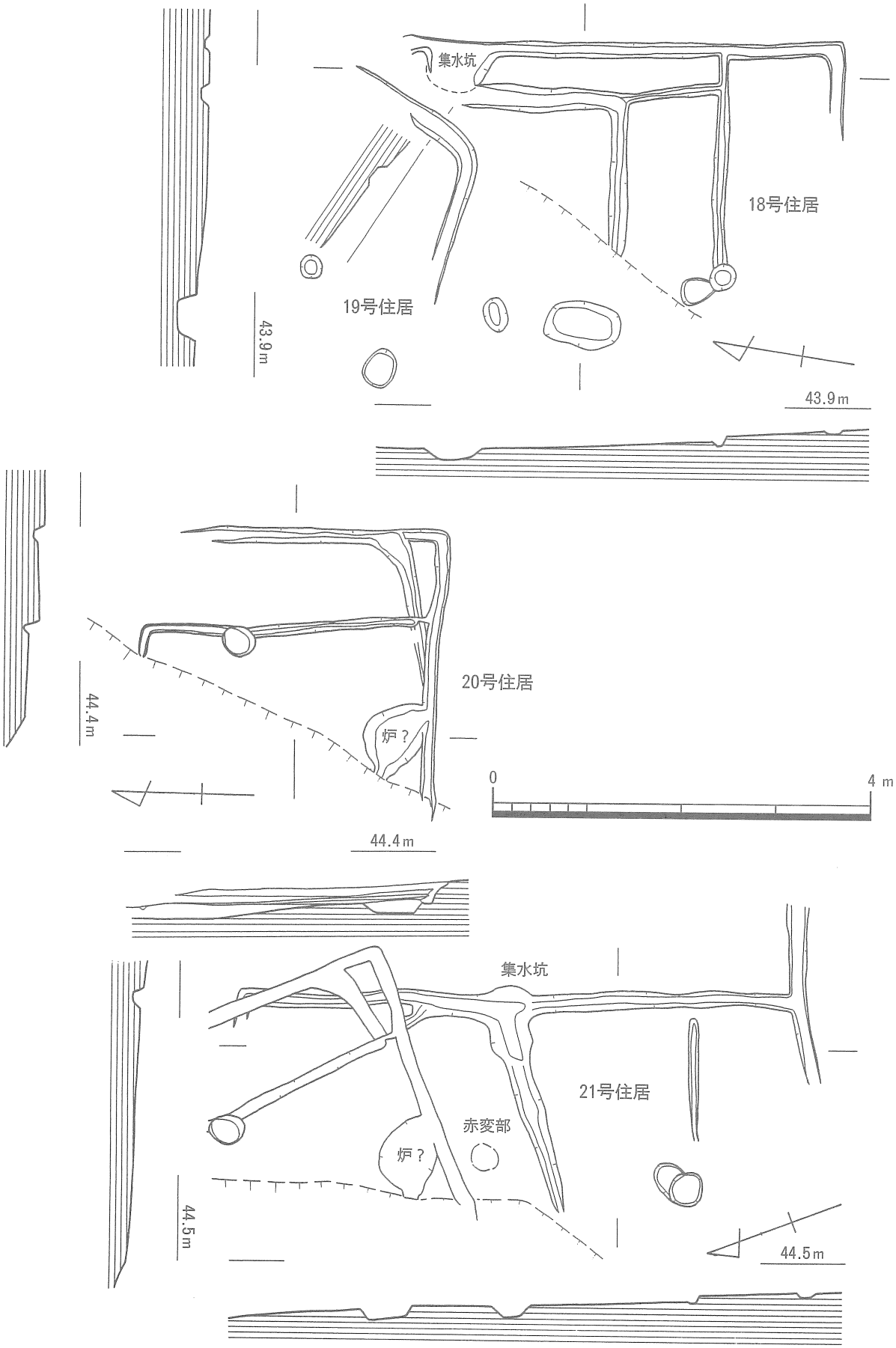
第32図　8、9、10、11、16号住居実測図（1／60）



第33図　12、13、14、17号住居実測図（1／60）



第34図　15号住居実測図（1／60）



第35図　18、19、20、21号住居実測図（1／60）

12は複合口縁壺である。11は口縁部が内傾するが、12では外反する。13は壺胴部である。底部は平底を残すが角は丸みをもつ。外面下半部は板ナデにより仕上げ、上半部はハケで仕上げている。14～17、20は鉢である。14は口縁が直立するが、15、16は口縁が外反する。16は外面を縦ハケ、内面を板ナデにより仕上げる。17は底部が丸底で、口縁部が内湾したままで収束する。21、22は椀である。23は上半部が剥離欠失しているが、小型丸底壺の胴部であろうか。39は脚付長頸壷である。壺胴部は扁平で短い脚柱部から直線的に開き裾にいたる。脚柱部下端に小円の透かし孔がある。胴部内面下半部は丁寧にハケで仕上げられている。

7号住居（図版30、第31図）

6号住居の西で、同住居の西壁を切って掘り込まれた住居である。B群に属する。西壁付近は削平により消失している。南北両壁沿いにベッド状遺構を切り出す。北ベッド状遺構周囲では周溝は掘られていない。南北長6.85m、東西幅は3.25m以上を測る。西壁中央やや南よりから排水溝1が西に向かって伸びているが、集水坑は南壁から55cmほど中央寄りに一辺50cmほどの方形土坑が掘られ、底から直接西の排水溝2に繋がるとともに、南に向けて長さ50cmの小溝を掘って排水溝1にも接続している。この2溝に新旧関係があるのか明らかではない。70×70cmの方形炉、排水構1、2間に掘られていた。埋土から弥生時代終末～古墳時代前期土器片が出土した。

出土土器（図版46、第38図24～31、第39図42） 24は大型の甕の胴上半部である。内外面ともハケで仕上げている。25、42は畿内系甕である。口縁部は大きく開き、口唇部は内向きに肥厚する。内面にヘラケズリが行なわれる。26～30は在地系の長胴甕である。胴部外面を縦ハケで仕上げるものと粗いタタキで仕上げたままのものがある。28では底部がレンズ状にふくらみを有すものの平底の名残りを残す。31は直口壺である。内外面とも縦ハケで仕上げている。

8号住居（図版32、第32図）

B群住居群から南西6mに位置する住居でC群の北端に位置する。9号住居に切られる。削平により東壁下の周溝の一部および集水坑が確認できたにとどまる。集水坑から東南東にむかって排水溝が伸びている。また、周溝南東部には南高所から小溝が接続しており、排水溝を共有する住居が南東部に存在したことをうかがわせる。集水坑は東壁の中ほどにあり、東に延長する排水溝をもつ。

埋土中から粘板岩製の砥石が2個出土した。

出土石器（図版46、第39図43，44） 43、44はともに粘板岩製の砥石である。43は3面、44は4面を使用している。

9号住居（図版32、第32図）

8号、16号住居を切り、10号住居に切られる住居でC群の中央に位置する。東隅角の周溝のみが遺存していた。実測可能な遺物はなかった。

10号住居（図版32、第32図）

9号住居を切って掘り込まれた住居で、削平により東南壁面下の周溝と、径80cm×70cmほどの楕円形集水坑のみが遺存する。C群に属する。実測可能な遺物はない。

11号住居（図版32、第32図）

C群中の南端に位置する住居で北、西周溝が遺存する。10号住居を切るが、16号住居に切られる。実測可能な遺物はなかった。

12号住居（図版32、第33図）

Ｃ群の西端に位置する住居で、東壁下の周溝と集水坑、排水溝が遺存する。集水坑は東周溝の中ほどにあり、排水溝は集水坑から若干西側に弧を描きながら北西に伸びる。実測可能な遺物はない。

13号住居（図版29、第33図）

Ｄ群に属し、14号住居を切るが15号住居に切られる住居で、東周壁のみが残る。南北長は4.2ｍ以上を測る。実測可能な遺物はない。

14号住居（図版32、第33図）

13号住居に切られる住居でＤ群の北端に位置する。北東隅角が確認できるにとどまるため、プランなど詳細は不明。南壁側にベッド状遺構を持つが、南壁が削平されていて、詳細は不明である。ベッド状遺構にも周溝が掘られている。実測可能な遺物はない。

15号住居（図版32、第34図）

13号住居を切り17号住居に切られる住居で、Ｄ群に属する。内区の周溝の周囲に周溝と並行して斜面をカットして整形されたテラス状平坦面があるが、住居床面にとりこまれるのか住居外の整地面であるのか不明である。周溝はテラスのカット面と並行して掘られており、南隅角から北東に2.3ｍ南東に10.8ｍであった。東周溝の中央部に集水坑が掘られ、そこから東に排水溝がのびる。

出土土器（図版46、第39図32）　32は壺の胴下半部である。底部は平底で、胴部は丸みを持たず直立ぎみに立ち上がり肩部はやや張り気味である。器面調整は内外面とも粗いハケで仕上げている。33は高杯の脚上部から杯部にかけてである。杯部は椀状を呈し。脚部は単脚で、上部から裾に向けて、なだらかに広がる。

16号住居（図版32、第32図）

Ｄ群において、11号住居を切り９号住居に切られる。確認できたのは東壁の一部と排水溝とみられ、住居壁は確認できなかった。排水溝は３条確認され、互いに切り合いを有す。

17号住居（図版32、第33図）

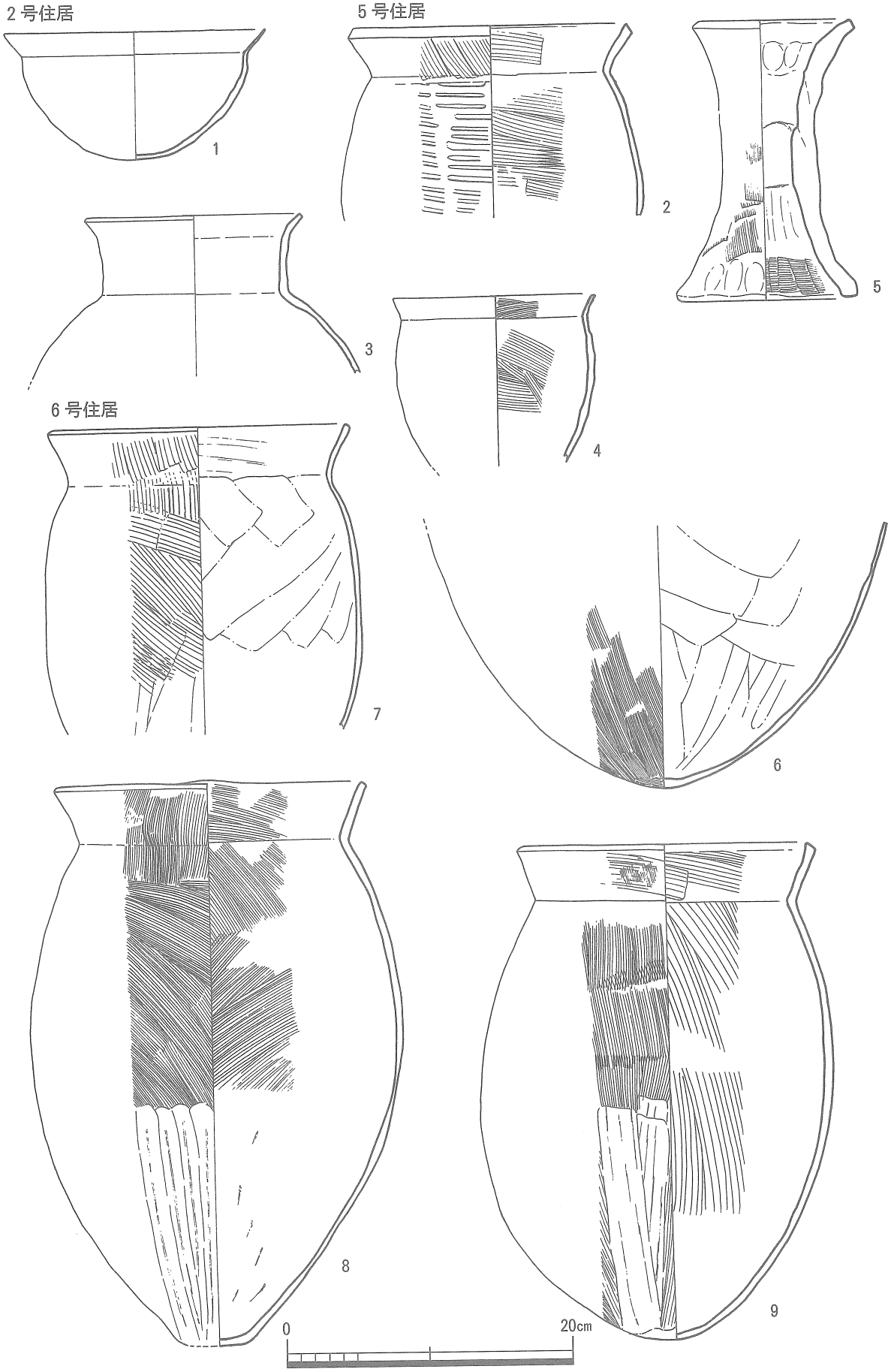
調査区の南端にかかる住居で、Ｅ群に属する。東壁とそれから伸びる排水溝、および、南西隅角付近に削りだされたベッド状遺構の一部を確認した。排水溝は住居床面を北西方向に斜めに横断してる。

当住居の東に隣接して「く」の字に屈曲して住居を囲むように配された溝状遺構があるが、17号住居を流水から守るために掘られた排水溝である可能性がある。

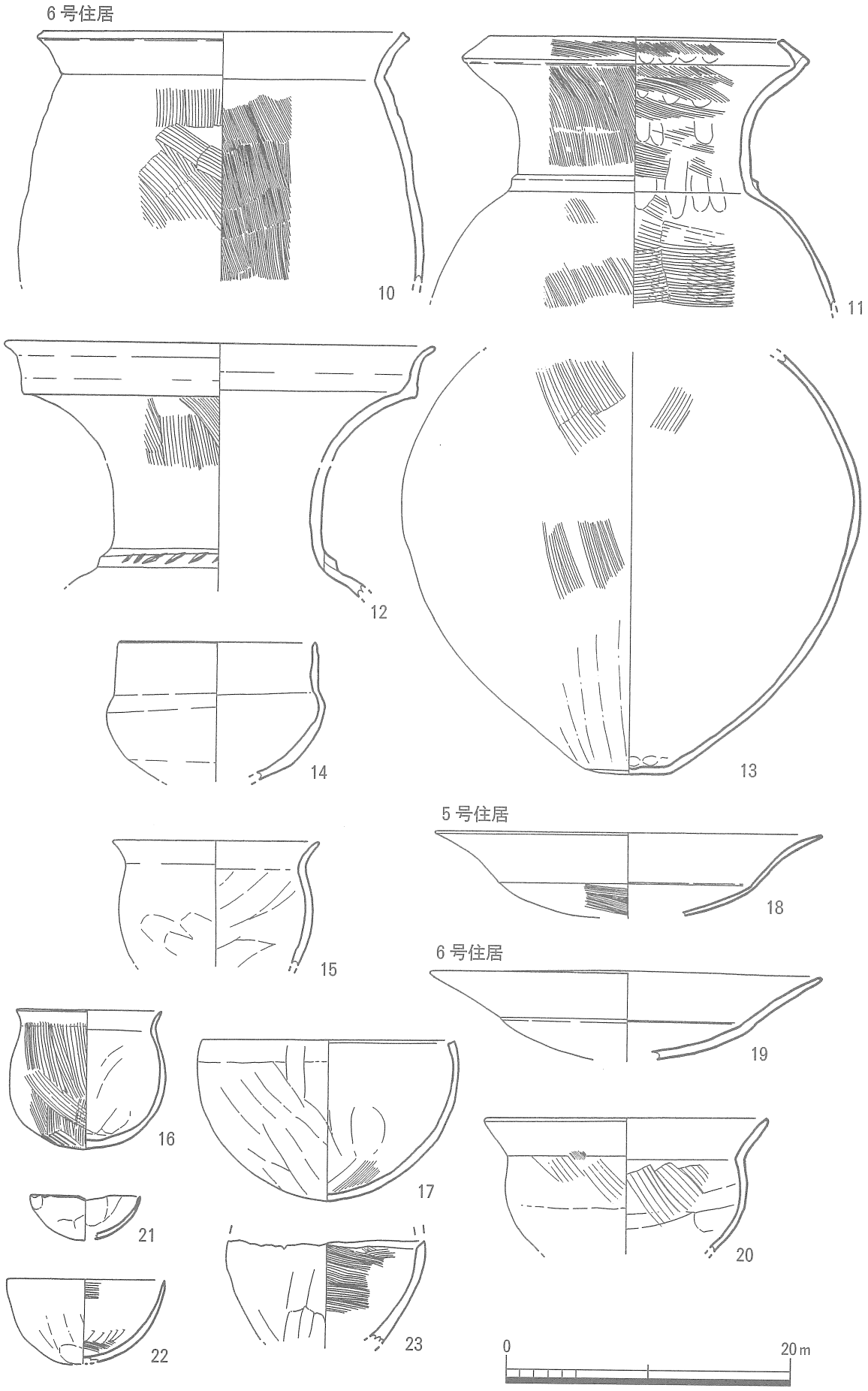
出土土器（図版46、第39図34～38，40～41）34は椀である。口縁部は若干外方に開く。35は住居埋土の出土である。34は有段鉢である。口縁部は若干器壁が厚めである。35は直口壺である。胴部は内外面とも細かいハケで丁寧に仕上げている。器壁が薄い。36～39は排水溝からの出土である。36は小型甕の胴下半部である。低部には僅かに平底を残し、内外面ともハケで仕上げているが、外面の底部付近のみヘラケズリが行なわれている。37は甑である。やや膨らみ加減の平底の底部中央に径1.1㎝の焼成前穿孔が開けられている。

18号住居（図版29、第35図）

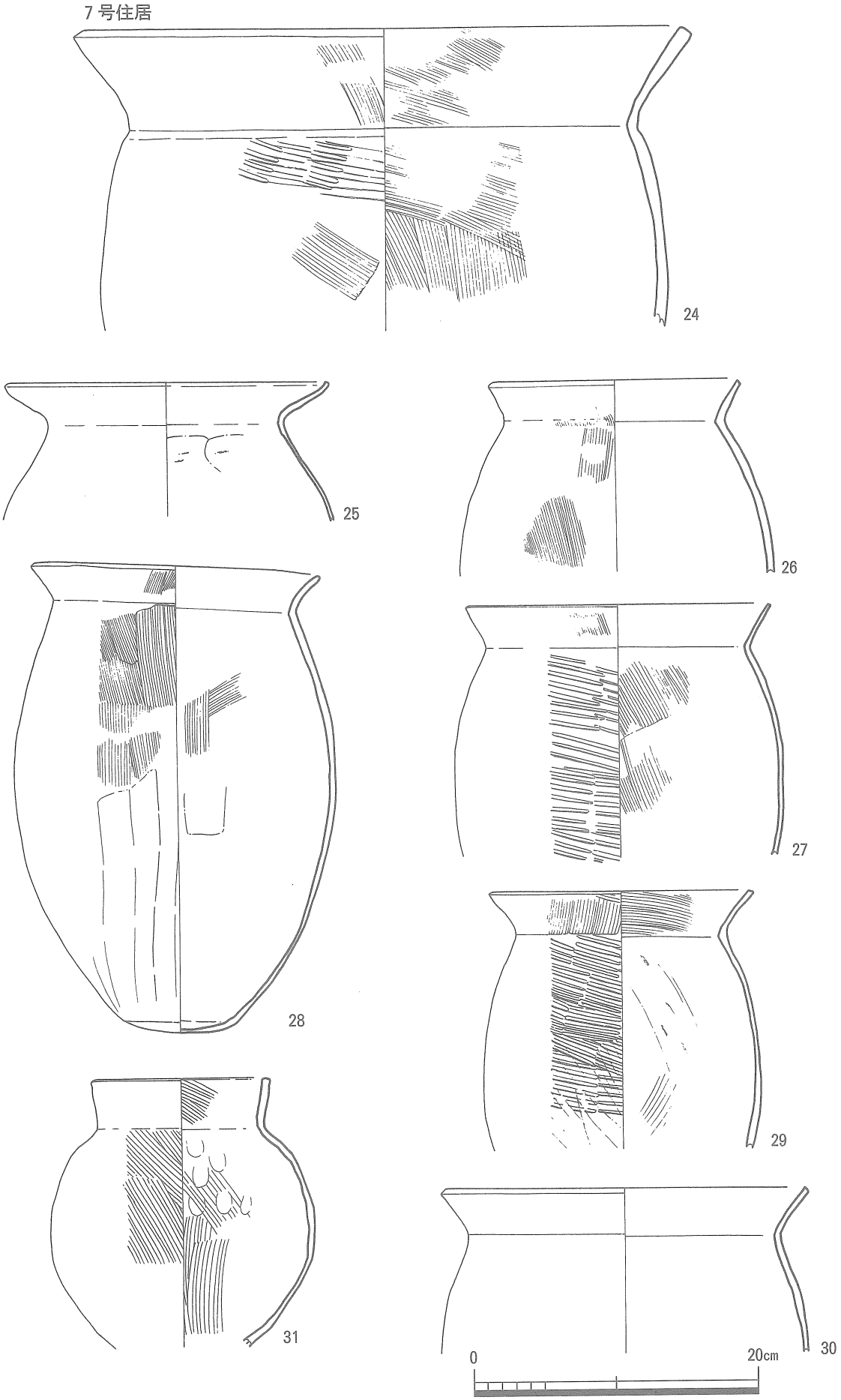
調査地点の北西端で確認した住居である。Ｅ群に属する。周溝および東壁中ほどの集水坑のみが確認された。周溝は二重にめぐっており、外溝は南でベッド状遺構を囲むとともにベッド裾にもめぐる。実測可能な遺物はなかった。



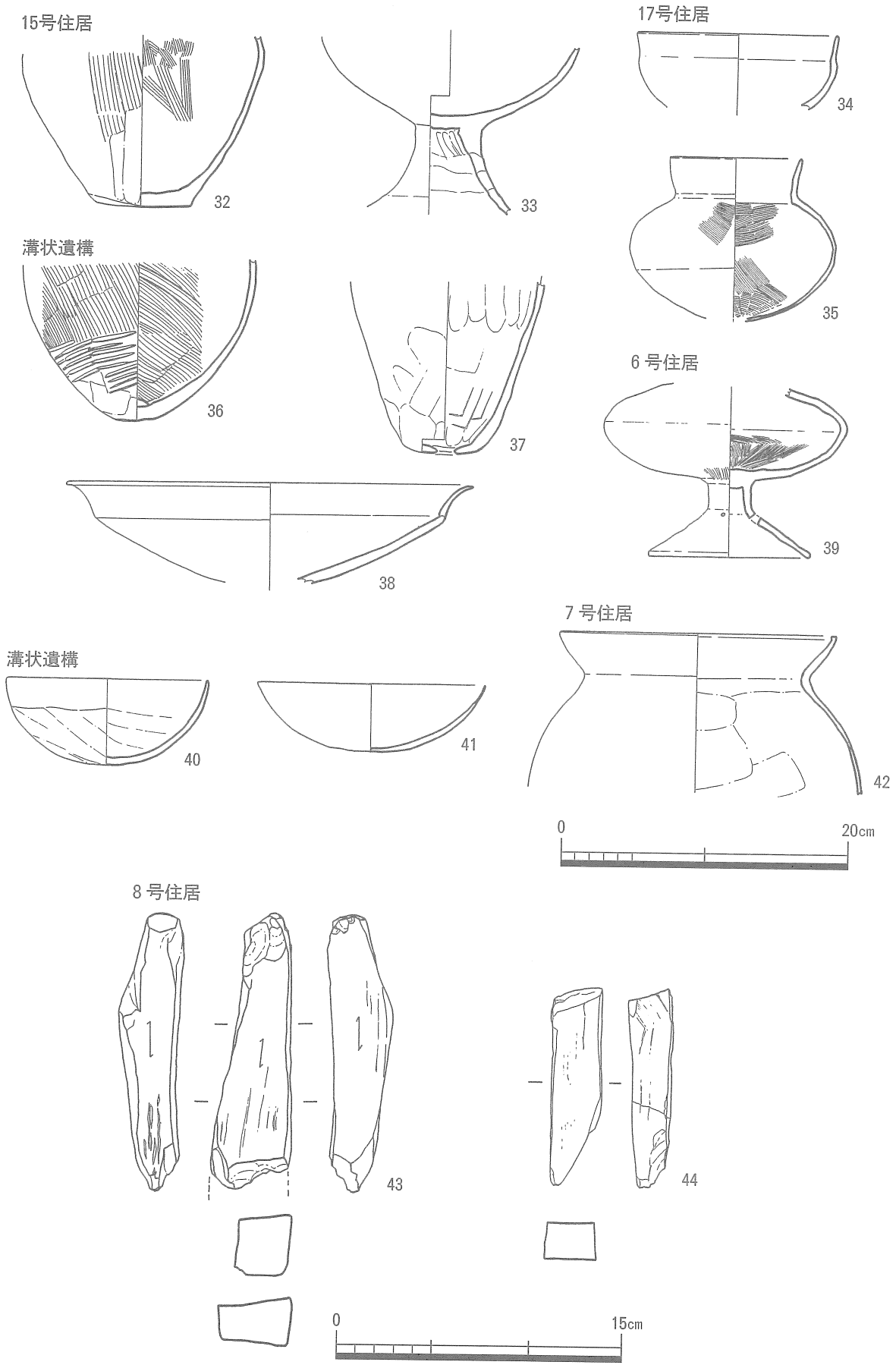
第36図　第5地点出土遺物実測図①（1／4）



第37図　第５地点出土遺物実測図②（1／4）



第38図　第5地点出土遺物実測図③（1／4）



第39図　第５地点出土遺物実測図④（1／4、1／3）

19号住居（図版29、第35図）

18号住居の西で周溝の南東隅角のみを確認した。E群に属する。遺構の残りは悪く詳細は不明である。実測可能な遺物はなかった。

20号住居（図版31、第35図）

21号住居を切る住居でB群に属する。東壁を中心とした周溝が遺存する。東壁に沿って幅2.95㎝、奥行き86㎝のベッド状遺構が削りだされている。南北幅は3.18mであった。隅角では周溝の掘り返しが認められた。南壁寄りに灰と焼土が含まれる不整土坑があった。炉の可能性がある。周溝から土師器小型丸底壷、高杯、須恵器片が出土したが小片で、実測できなかった。古墳時代の住居である。

21号住居（図版31、第35図）

20号住居に切られる南北方向に主軸を向けた住居である。周溝は6号住居から伸びる排水溝に接続し、さらに下方に伸びている。南壁沿いにベッド状遺構を有するとともに東壁中ほどには集水坑が掘られ、排水溝は西にむかって伸びる。床面の中央部に径30㎝ほどの赤変硬化した箇所があった。埋土から土師器椀が出土しており古墳時代前期と推定される。B群に属する。

出土土器（第39図）41は土師器椀である。器壁が薄い。

22号住居（図版30、第31図）7号住居とほぼ主軸方位を等しくするとともに遺構の大半を切られた住居で、わずかに7号住居の両ベッド状遺構上で周溝の痕跡をとどめるのみである。南東隅角ではベッド状遺構の痕跡と思われる段がつく。南北長7.63mを測る。B群に属する。

溝

1号溝（第29図）

調査区の北端で検出した幅40㎝、深さ30㎝、断面U字形を呈する小溝である。時期は明らかではないが、埋土が灰褐色砂質土であったことから中世以降の遺構と推定される。

(6) 第6地点

遺跡の西端近く、標高43m前後に位置する。調査区の東端では高さ2mほどの切通しとなり、遺構は西から北西にかけての斜面下位地区に集中していた。弥生時代前期末の墳墓群、竪穴住居2棟、溝2条、落とし穴1基などでが検出された。

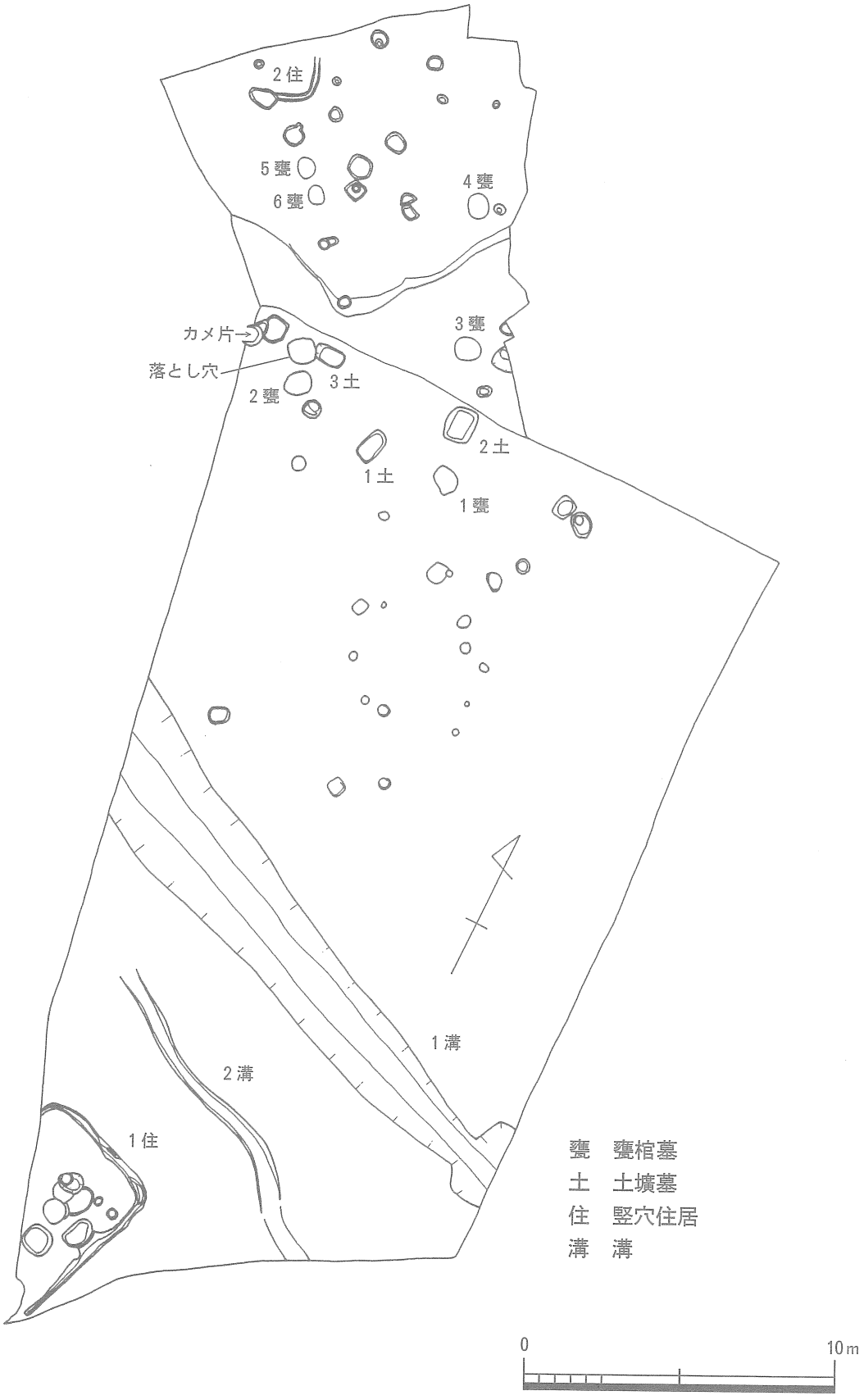
甕棺墓

弥生時代前期の墓地群は調査地点の北西端で確認したため、調査区をさらに北西に拡張して棺の確認調査を行ない、甕棺墓6基、土壙墓3基を確認した。甕棺墓はいずれも削平、撹乱を受け遺存状態は悪い。

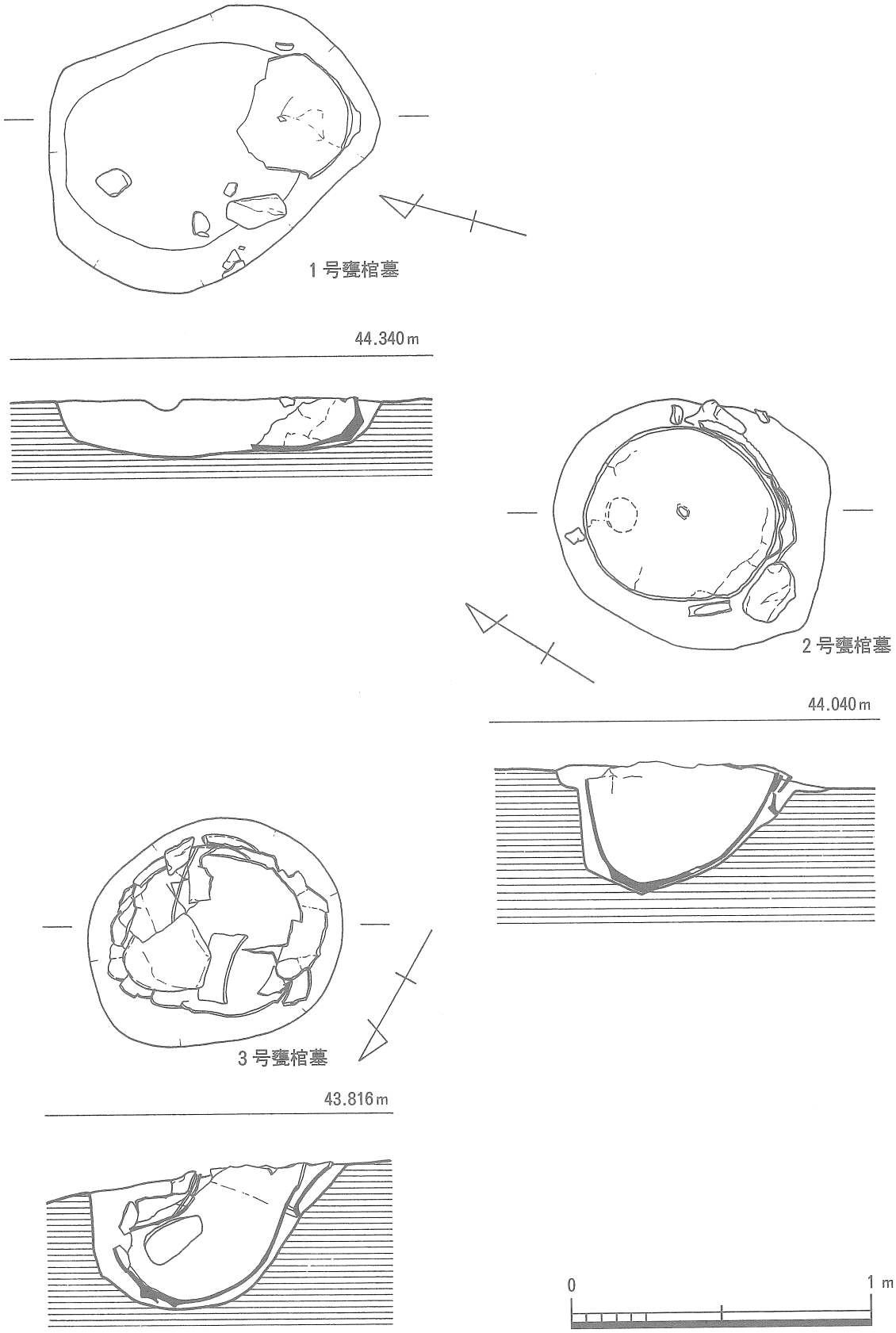
また、調査区の西端にあたる水田造成の切通しで、埋土内に甕棺片が散乱した円形土壙を確認しているが、これは、撹乱を受けた甕棺墓と推定され、墓域はさらに西に広がっていた可能性が高い。

1号甕棺墓（図版38、第41図）

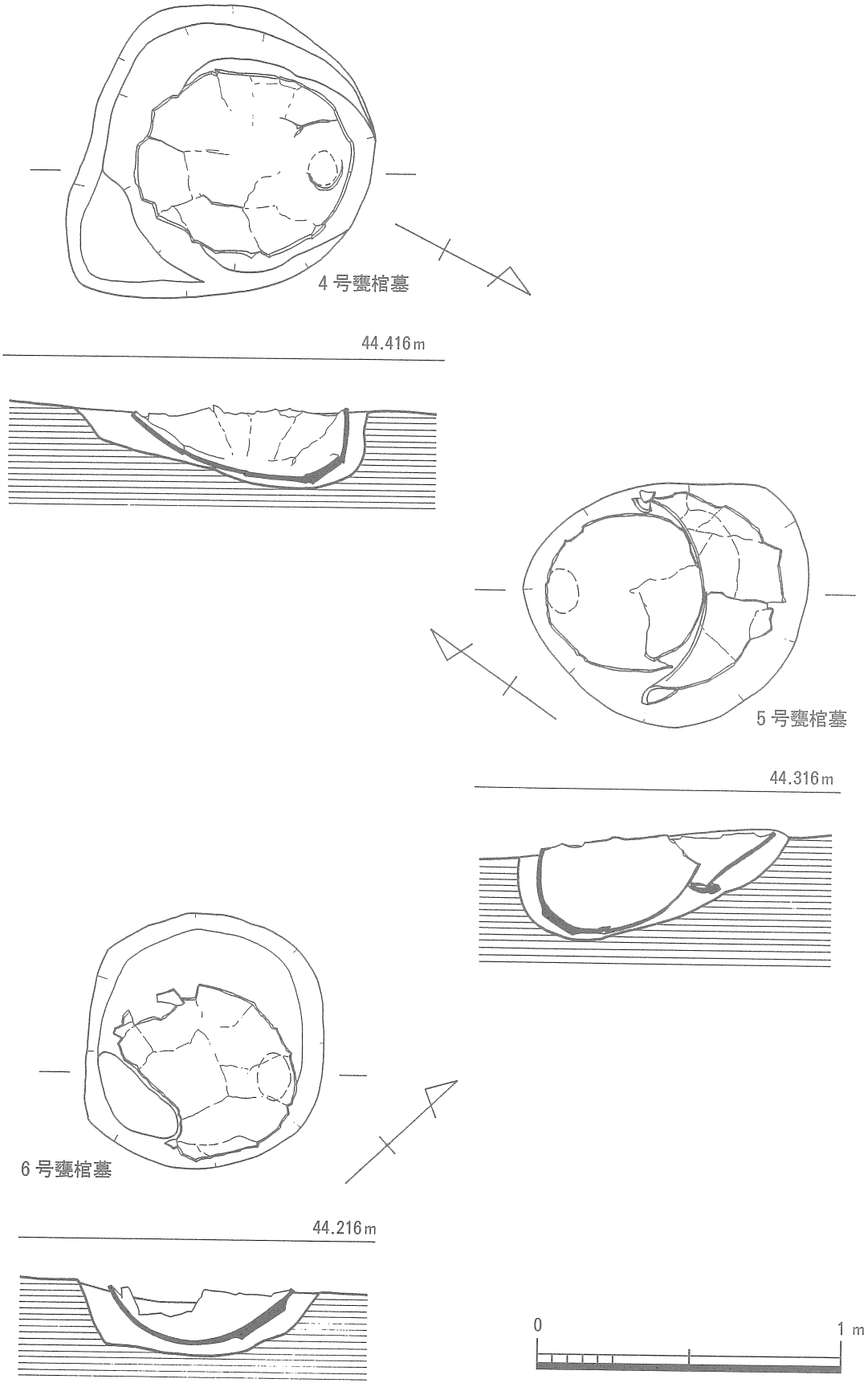
墓壙は大きく撹乱され、下甕の底部付近がわずかに遺存していたにとどまる。見かけの墓壙は不



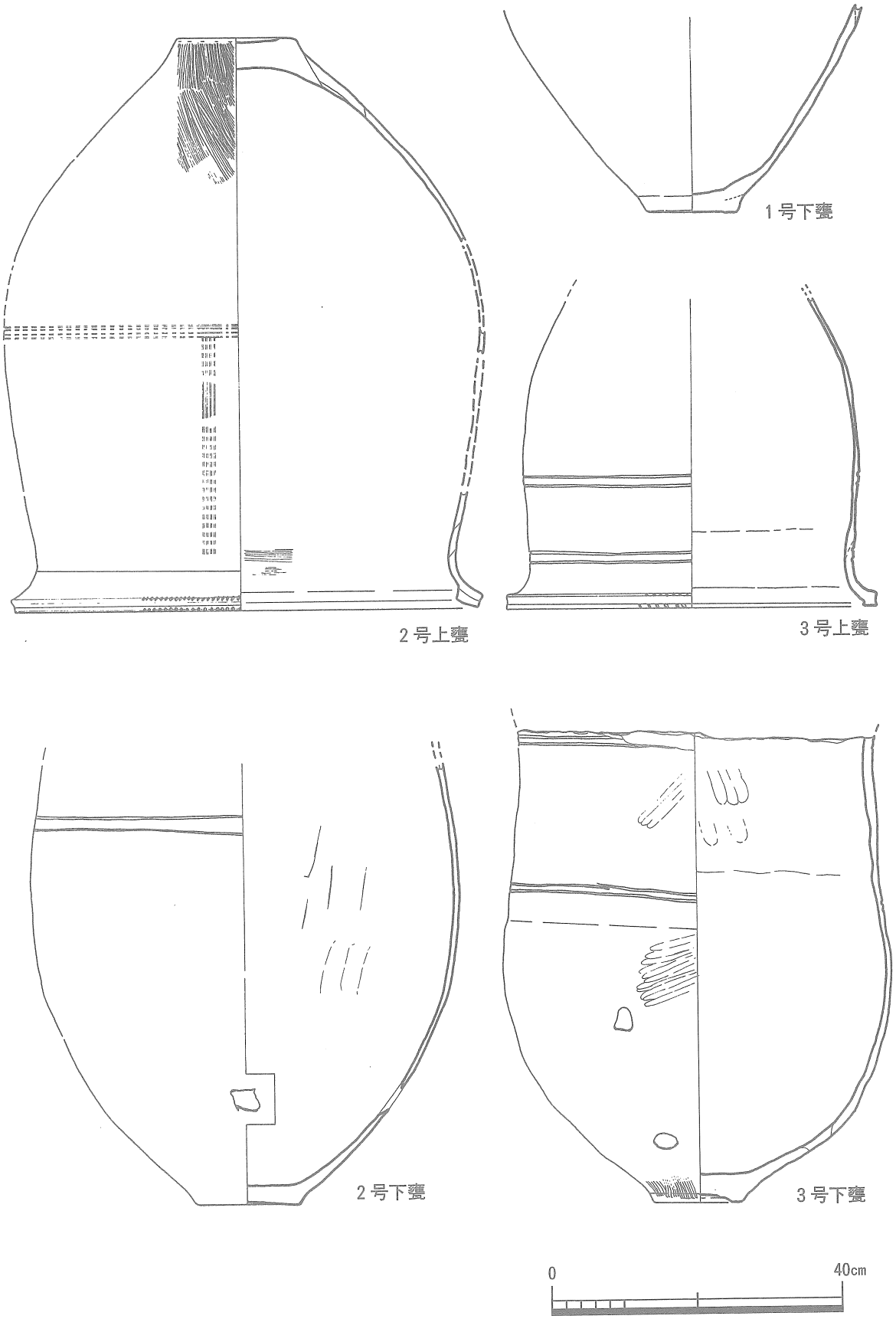
第40図　第６地点遺構配置図（1／200）



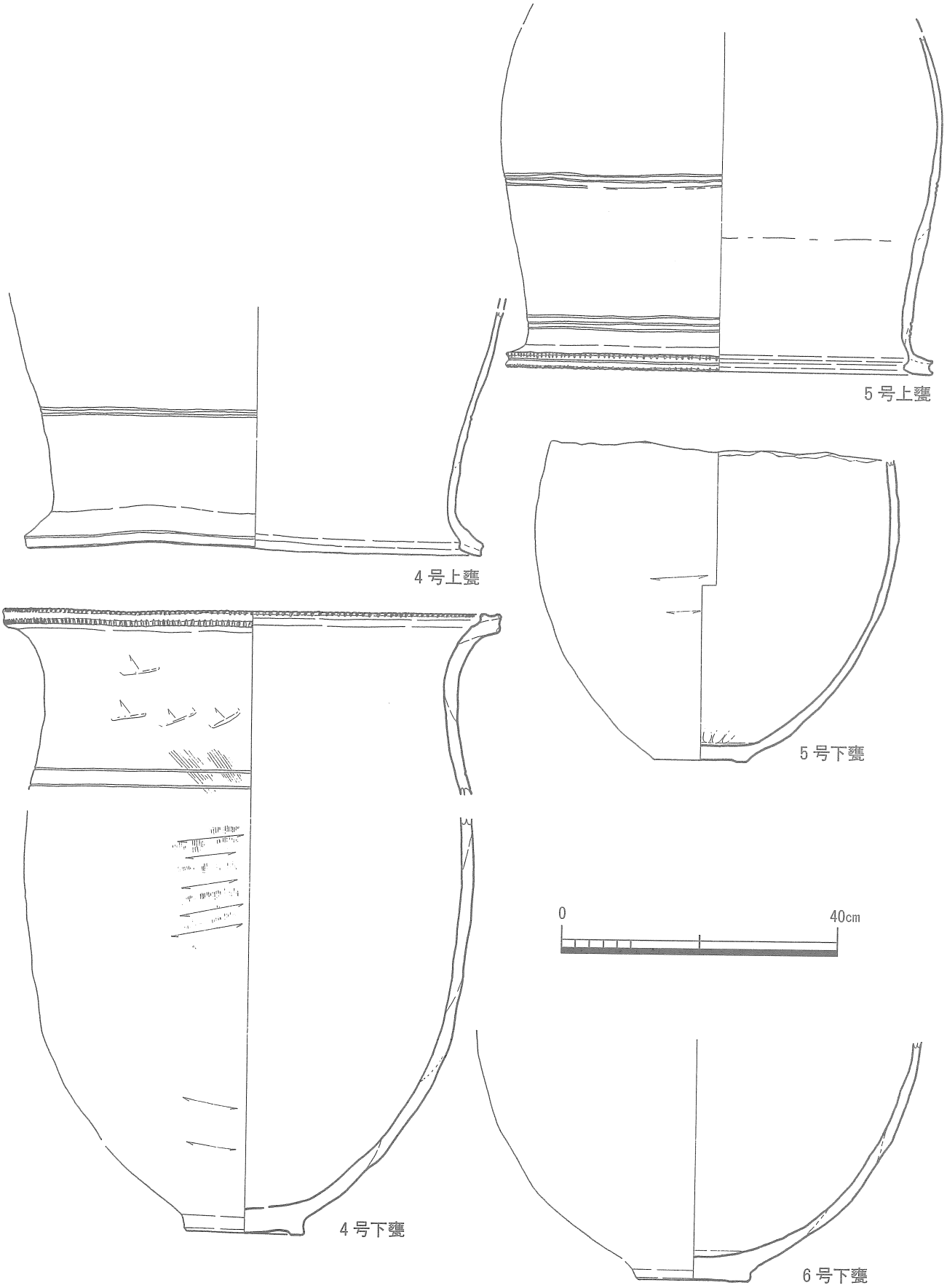
第41図　1、2、3号甕棺墓実測図（1／20）



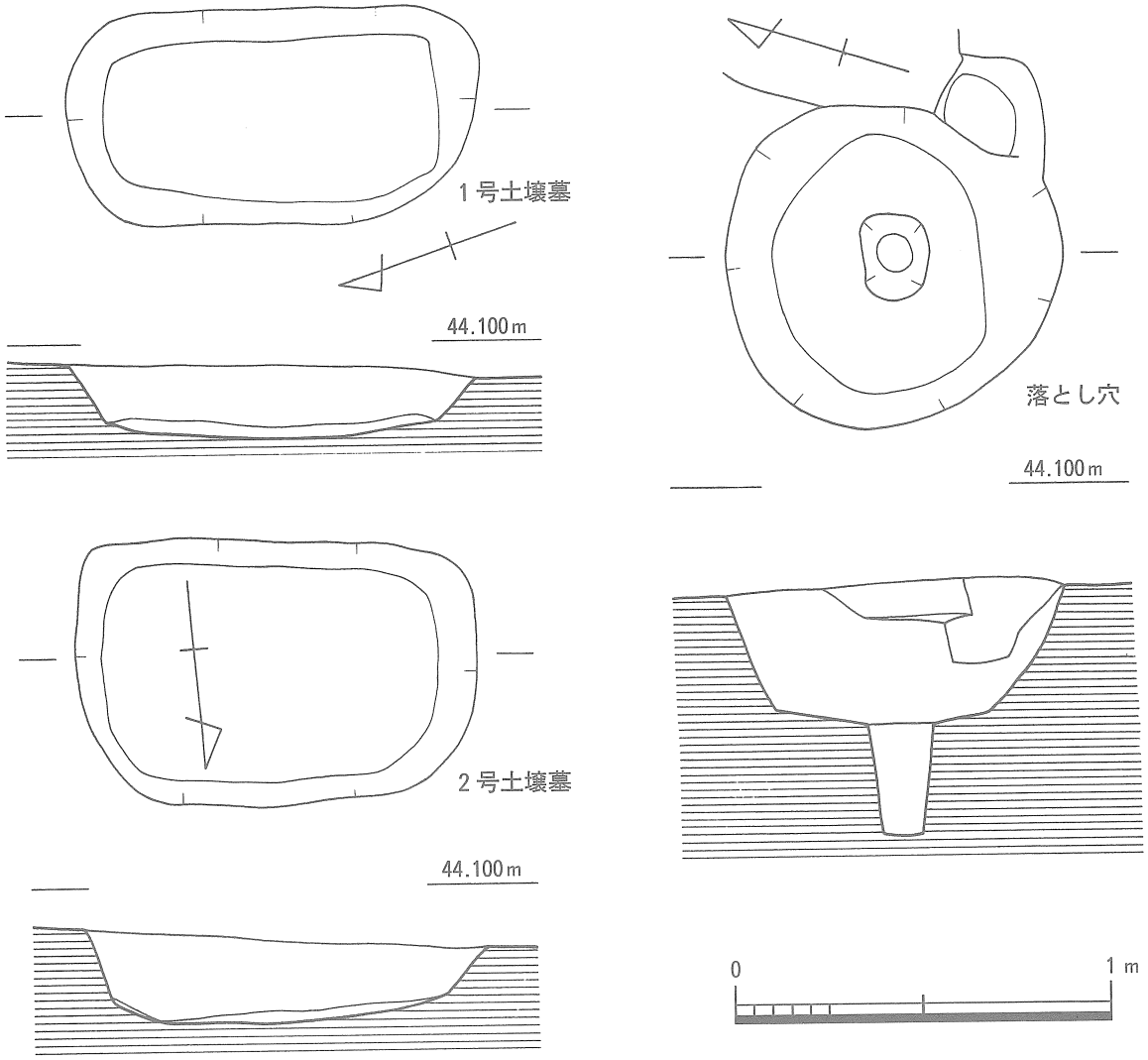
第42図　4、5、6号甕棺実測図（1／20）



第43図　1、2号甕棺実測図（1／8）



第44図　3、4、5、6号甕棺実測図（1／8）



第45図　土壙墓、落とし穴実測図（1／20）

整楕円形で長さ114㎝、幅88㎝を測る。上棺と思われる棺材は確認できず、上下棺の組み合わせ方は確認できなかった。甕棺は主軸をN17°Wに向け、埋葬角度は37°ほどと推定される。

甕棺　底径12.0㎝、残存高28.0㎝。土器の劣化が著しく遺存状態も悪い。ややスマートな底部をもつ。胎土は長石、石英、金雲母を多く含み、やや粗い胎土である。色調は淡黄褐色で焼成は良好。

2号甕棺墓（図版39、第41図）

2段掘りの墓壙に埋納された合口式甕棺墓で、見かけの墓壙は楕円形で長さ91㎝、幅83㎝を測る。上甕が下甕の径を大きく上回り下甕の上半分を覆う。埋葬主軸方位はN33°W、埋葬角度は64°を測る。下棺の周囲に塊石が詰められ、棺の固定を意図したものと考えられる。墓壙は大きく削平を受け、下棺の上位三分の一まで削り取られており、上甕はわずかに口縁部を残すのみで、下甕は胴下半部が遺存する。下甕の底面に穿孔が施されていた。

上甕（図版47、第43図）　復元高で80.0㎝弱、口縁外径64.8㎝、口縁内径58.6㎝、胴部最大径66.0㎝、底径16.0㎝、底部の厚さは3.9㎝と分厚い上げ底である。頸部と胴部の沈線の太さは約1.0㎜弱と細く、沈線の施し方も他の甕棺とは若干様相が異なる。外面調整は底部にハケ目が残るが他は風化しており不明。内面調整は頸部が横方向のハケ目、他はナデ調整が行なわれている。胎土は石英、

長石、金雲母を多く含み、焼成は良好である。

下甕（図版47、第43図）　残存高60.9㎝、胴部最大径59.0㎝、底径14.4㎝、底部の厚みは2.8㎝で上げ底である。胴部下半に外側からの焼成後穿孔があり、肩部には太さ2.0～3.0㎜のヘラ描き沈線が２条施されている。外面調整は風化のため不明であるが、底部の付近に僅かにハケ目調整が残る。内面調整は胴部上半が縦方向の板ナデ、下半部にはタタキの痕跡らしい凹凸が見られる。胎土は石英、長石、黒雲母、赤褐色粒子を多く含む。色調は淡橙褐色で、焼成は良好である。黒斑がある。

３号甕棺墓（図版37、第41図）

合口式の甕棺墓で、上甕が下甕の上部を覆う。埋葬主軸方位はN62°Ｅ、埋葬角度は71°を測る。下甕の口縁は打ち欠きがおこなわれていた。見かけの墓壙は楕円形で長さ84㎝、幅75㎝を測る。削平が著しいが、出土した甕棺墓の中で最も遺存状態は良好であった。下甕の埋土上層から人頭大の板状の花崗岩が出土したが、標石ではなく、棺の裏込め材が陥没と同時に棺内に混入したものと考えられる。

上甕（図版47、第43図）　現存高44.0㎝、口縁外径51.0㎝、口縁内径46.9㎝、胴部最大径46.4㎝で、器壁の厚さは6.0～9.0㎜と薄手である。頸部と肩部には太さ約2.0～3.0㎜のヘラ描き沈線が各２本づつ施されている。外面調整は口縁部と頸部はヨコナデ、頸部以下は風化しており不明。内面調整はナデ。胎土は石英、長石、金雲母を含み、1.0～2.0㎜の砂粒を多く含むやや粗い胎土。色調は外面淡黄褐色、内面淡赤褐色で、焼成は良好。胴部に大きい黒斑が１つある。

下甕（図版47、第43図）　現存高65.1㎝、口縁外径49.3㎝、口縁内径43.4㎝、胴部最大径53.6㎝、底部は径12.2㎝、厚さ3.3㎝の上げ底である。胴部下半に最大径を持ち、壺形土器のなごりがみられる。頸部と肩部には太さ2.0～3.0㎜のヘラ描き沈線が各２本施されている。また、胴部下半には外側からの焼成後穿孔が２ヶ所確認できる。外面調整は底部に一部タテハケ目が残るが、その他の部分は幅約1.0㎝のヘラ状工具によるミガキ風のナデ調整を行なっている。内面の頸部付近は、指押さえ後に板状工具による横方向ナデ調整を行なっている。胎土は石英、長石、金雲母を含み、1.0～2.0㎜の砂粒を多く含むやや粗い胎土である。色調は内外面とも赤褐色で、焼成は良好。黒斑は大き目のものが胴部下半とその対称面の頸部付近に小さ目の黒斑が残る。黒塗りは頸部沈線付近に僅かに観察できる。

４号甕棺墓（図版40、第44図）

墓壙２段掘りであるが一段目は大きく削平されていた。見かけの墓壙は楕円形で長さ96.0㎝、幅95.0㎝を測る。幸い下甕の胴下半部が遺存しており、棺内埋土中から上棺、下棺の口縁部が出土している。上棺の口縁径が下甕の口縁径を大きく上回っていることから３号甕棺墓同様に上甕が下甕を覆うものと推定される。下棺は主軸をN153°Ｅに向け、埋葬角度は54°ほどを測る。

上甕（図版48、第44図）　現存高35.8㎝、口縁外径66.0㎝、口縁内径59.6㎝、器壁の厚さは0.9㎝～1.5㎝の大型甕棺である。頸部下部に２条のヘラ描き沈線を施す。沈線は太さ約2.0～2.5㎜で、沈線間隔が5.0～6.0㎜と狭い。外面調整は口縁部から頸部にかけてはヨコナデ、その他は風化が激しく詳細は不明である。胎土は石英、長石、金雲母が含まれ、砂粒の大きさは1.0～2.0㎜を多く含みやや粗い胎土である。色調は淡赤褐色で、焼成は良好。

下甕（図版48、第44図）　口縁外径72.0㎝、口縁内径66.6㎝、最大胴径64.9㎝、器壁の厚さ0.9㎝～1.5㎝、底部は径16.7㎝の上げ底を呈する大型の甕形土器である。口縁端部外面の刻み目は上段

と下段の間隔が不規則であることから一段ずつ施したものと考えられる。肩部には太さ2.0～2.5㎜のヘラ描き沈線が２条めぐる。最大胴径は肩部まで上り、甕形により近い形態を呈す。胎土は石英、長石、金雲母を含み、1.0～2.0㎜の砂粒が多くやや粗い胎土。色調は淡黄褐色で、焼成は良好。

５号甕棺墓（図版39、第42図）

墓壙の上部は大きく削平されたが、２段掘りの土壙である。見かけの墓壙は楕円形で長さ94㎝、幅81㎝を測る。下甕及び上甕の上部が遺存していた。２、４号棺と同様に上甕が下甕上半部を覆う。下甕は口縁部の打ち欠きが行なわれていた。主軸はＮ145°Ｅ、埋葬角度は53°を測る。

上甕（図版48、第44図）　復元口径61.2㎝で、口縁端部の刻み目は上下同時に施文している。頸部と肩部に各３本の太さ2.0～2.5㎜のヘラ描き沈線を施す。外面調整は口縁部がヨコナデ、他は丁寧なナデ調整を行ない、内面は口縁部がヘラ状工具によるナデツケとヨコハケ目、頸部以下は丁寧なナデ調整を行なう。胎土は石英、長石、金雲母を含み、0.8～1.8㎜砂粒を多く含みやや細かい胎土。色調は淡黄褐色、焼成良好。黒塗り痕一部観察できる。

下甕（図版48、第44図）　胴部上半を打ち欠く。現存高45.5㎝、最大胴径53.5㎝、底部径13.4㎝である。外面調整は一部横方向のミガキ風ナデが残るがほとんど風化している。内面調整は底部に指押さえ痕が残るが他は風化していて不明である。胎土は石英、長石多く含みやや粗い胎土。色調は外面黄白色、内面淡黄褐色で、焼成は良好。胴部に黒斑が一ヶ所残る。

６号甕棺墓（図版38、第42図）

削平、撹乱により著しく破壊された甕棺墓で、下甕の底面付近がわずかに残るのみであった。見かけの墓壙は楕円形で長さ62.4㎝、幅67.2㎝を測る。上甕片は確認されていない。下甕は墓壙の東寄りに置かれ、主軸方位はＮ134°Ｗ。埋葬角度は53°を測る。

下甕（図版48、第44図）　大半が欠損している。底部径15.7㎝、底部の厚さは3.2㎝と分厚い。器面調整は内外とも風化が激しく不明だが、外面に一部ナデの痕跡が残る。胎土は石英、長石、金雲母、角閃石を含み、2.0～3.0㎜の大粒砂粒を含む粗い胎土。色調淡黄褐色、焼成良好。胴部に大きめの黒斑が残る。

土壙墓

甕棺墓群に混じって幅広の長方形土壙を３基確認した。甕棺墓群内では墓以外に他の時代の顕著な遺構は確認されていないことから、甕棺墓群と同時期の土壙墓と思われる。

１号土壙墓（第45図）

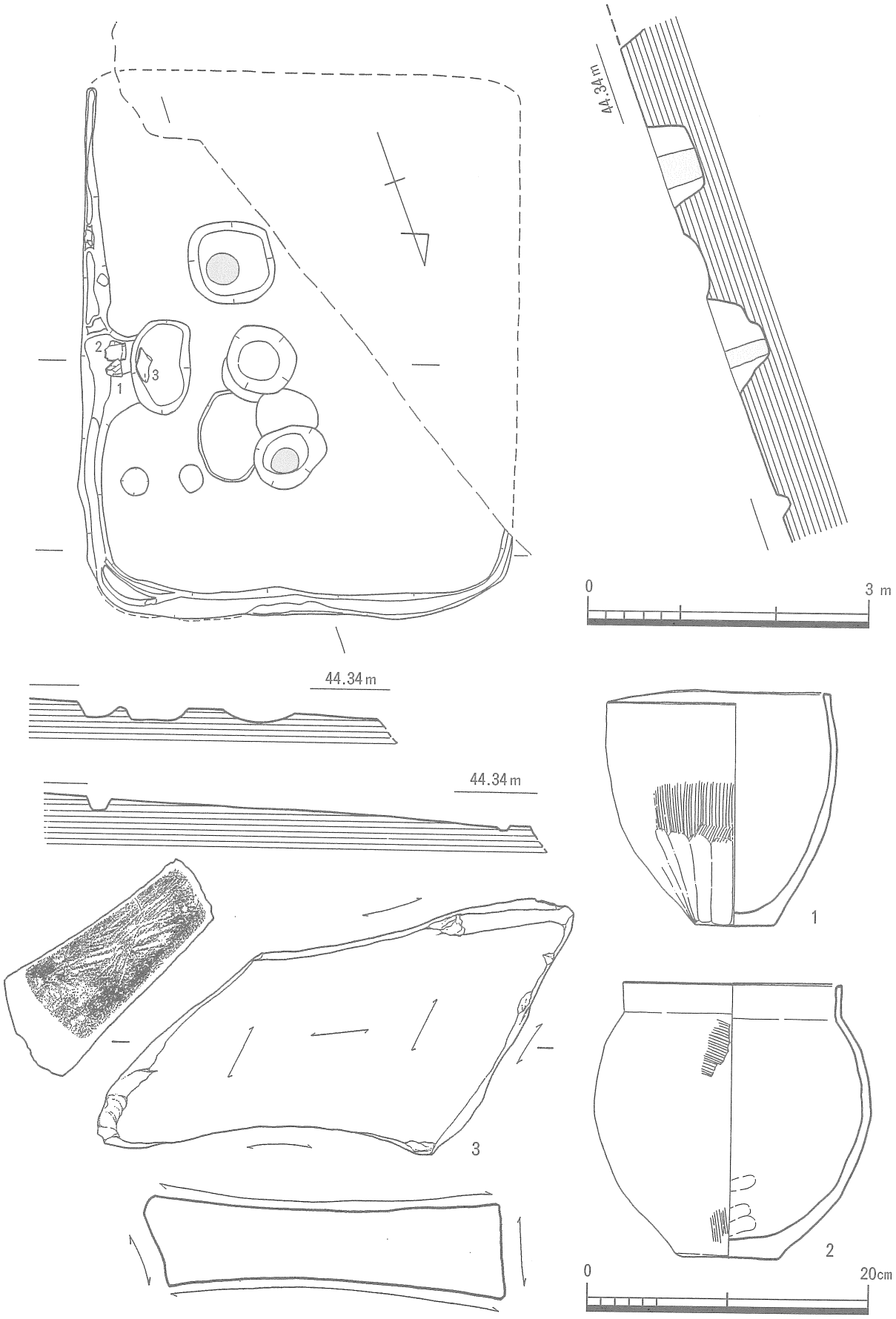
１号甕棺墓の西に隣接して築かれた土壙墓である。主軸方位はＮ20°Ｅに向き、主軸長107㎝、幅57㎝、深さ18㎝を測る。

２号土壙墓（第45図）

１号甕棺墓の北で検出した土壙墓で、主軸方位はＮ84°Ｅに向き、主軸長106ｍ、幅71ｍ、深さ24㎝を測る。１号に比べてやや幅広である。

３号土壙墓

２号甕棺墓の北で検出した土壙墓で、主軸方位はＮ°89°Ｗに向き、主軸長104ｍ、幅61ｍ、深さ19㎝を測る。



第46図　1号住居（1／60）と住居出土遺物実測図（1／4）

竪穴住居

1号住居（図版35、第46図）

調査区の南端長方形プランの竪穴住居を1基確認した。遺構の西半分は水田開削により消失し、周壁も削平され、わずかに周溝によってその存在を確認することができた。周溝は北側二隅がかろうじて残っており、南東では周溝の途切れた箇所が住居の南東コーナーと推定された。規模は南北長5.7m、東西幅4.55mほどである。

床面のコーナーはやや丸みを有しており、住居の中央からやや東寄りに炉が掘り込まれている。床面に2個の主柱穴とみられる柱穴を検出したが、主軸から大きく外れる。炉はこの2柱穴の間に掘られていた。炉および周溝の北東コーナーには掘り直されていた。東周溝の中央に集水坑があり、底面から短頸壷と鉢が出土し、また、その西隣の楕円形土坑内からは砥石が出土した。弥生後期前半の住居である。

出土遺物（図版48、第46図）　1は鉢である。底部は平底で、胴部は直線的に立ち上がり口縁近くで若干内傾する。口唇部は断面「コ」の字形に仕上げる。外面上半部は縦ハケ、下半部は板ナデで仕上げる。2は短頸壺である。平底の底部から丸みのある胴部を経て広口の口縁部は直立する。3は砂岩製の粗砥石である。六面を使用しているが、二側面には幅が狭く深い研ぎ出し痕が残る。

2号住居（図版36、第40図）

調査区の北端でL時に屈曲する小溝を確認した。第5地点から続く竪穴住居の周溝の一部と推定されたが、遺存状態が悪く詳細は不明である。時期を推定できうる遺物もなかった。

落とし穴（図版40、第45図）

調査区の北西端近くで検出した。平面プランは円形で、径は上場で92×89㎝、下場で69×60㎝、深さ38㎝を測る。底面の中央には24×18㎝、深さ40㎝の小穴がある。

埋土に土器を全く含まれず、土が淡茶褐色化し、弥生時代以前の遺構である可能性が高く、また中央に残るピットなどから、いわゆる落とし穴と推定した。時期は縄文時代であろう。

溝

1号溝（図版36）

調査区の中央やや南寄りで、東から西に流下する溝である。丘陵の尾根筋からやや南に下ったところで尾根筋に並行していた。削平により溝幅は狭くなっているが、断面逆台形で、切り通し部では幅1.92m、深さ43㎝を測る。埋土は粗砂だけで、短期間に埋没したものと推定される。埋土中から弥生土器、須恵器などが出土した。時期の特定はできなかった。

2号溝

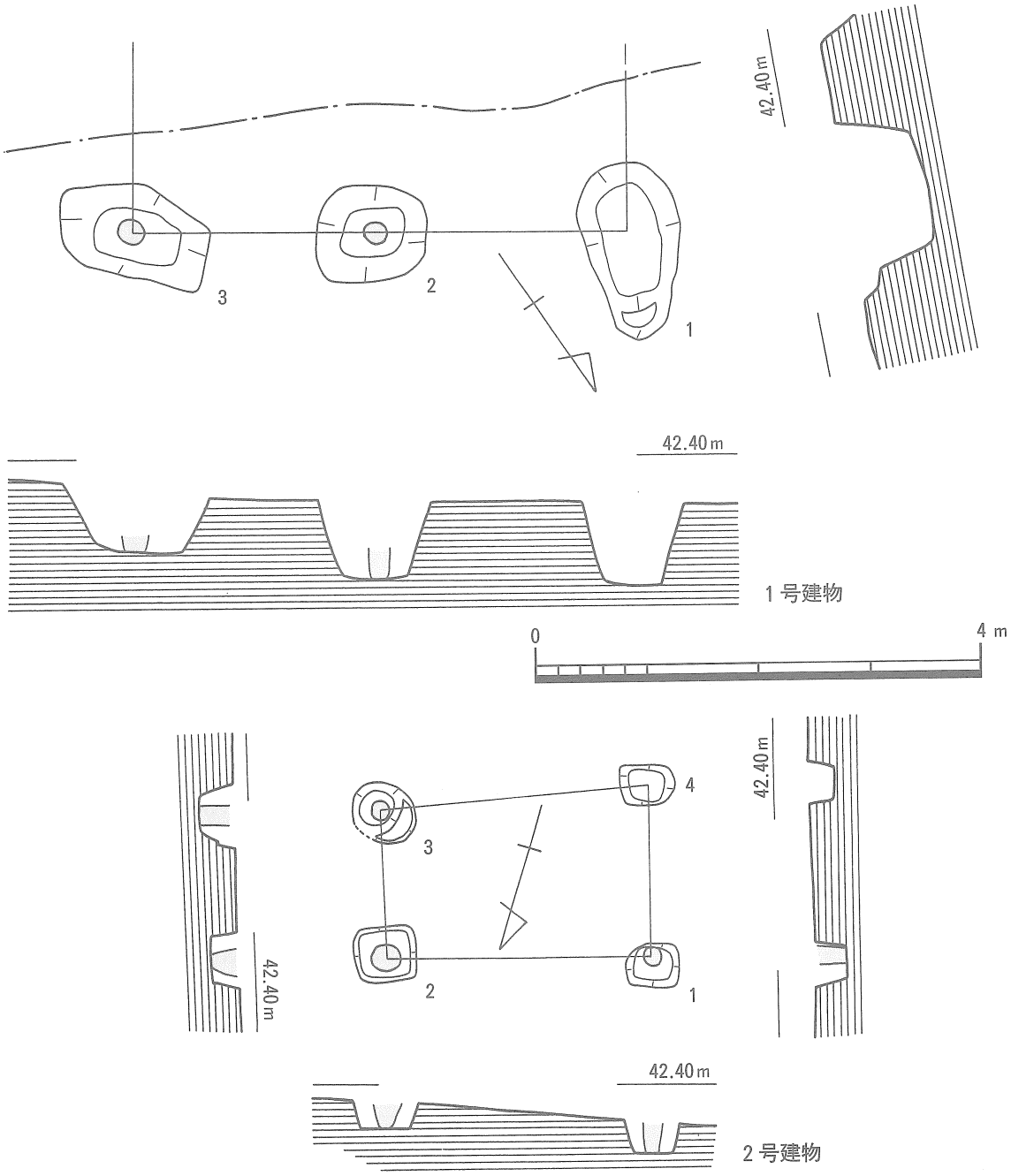
1号溝の南で、やや蛇行しながらも1号溝に並行して流下する小溝を検出した。東西両端は削平のため消失している。埋土は粗砂、礫で遺物の出土はなかった。時期等は不明である。

第47図　第７地点遺構配置図（1／150）

(7) 第７地点

門口丘陵の先端、標高41～43ｍにあたり、周辺水田との比高差は４ｍほどである。下面水田では顕著な遺構・遺物は確認できず、飯原門口遺跡の西端部と考えられる。

遺構は北東部では削平のため確認できず、西南斜面を中心に調査した。遺構柱穴、土壙などを検出したが、その分布度は希薄だった。調査区の南端で掘立柱建物の一部と推定される不整（長）方形の大型柱穴３基と小型の掘立柱建物１棟を検出した。



第48図　第７地点掘立柱建物実測図（1／60）

掘立柱建物

1号建物（図41版、第48図）

調査区の南端で、三個の不整長方形、楕円形プランの大きな柱穴を検出した。掘り方プランは1が86×160㎝、2が97×87㎝、3が139×86㎝で、深さは同じく73㎝、70㎝、56㎝であった。柱穴2、3では底面近くで柱痕跡を検出したため掘立柱建物の柱穴と確認された。建物はさらに南に延びるものと推定されるが、斜面の土採りによってその大半が失われてしまったのであろう。柱穴1、3間の柱間は概ね4.4ｍほどである。埋土からは弥生土器の小片が多く出土したが、遺構の時期を特定することはできなかった。

2号建物（第48図）

調査区西中央部で検出した1間×1間の掘立柱建物である。桁行2.38ｍ、梁行1.35ｍを測り、小型である。柱の掘り方は長方形プランで一辺40～55㎝ほど。柱穴1、2、3では柱痕跡が確認された。

(8)　第8地点

昭和62年に遺跡の発見の契機となった地点である。門口丘陵の北裾にあたり第5地点住居遺構群との比高差は8ｍほど。表土下の灰黒色粘土層から弥生時代後期の土器を中心とする弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が多数出土していた。出土地点は地下水位の高い湿地帯であったので遺物の中には木質遺物もあったが、夏場の炎天下であったため遺物は乾燥収縮していた。

採取した土器片はパン箱にして20箱に及ぶ。土器は弥生時代後期後半～終末の資料の割合が高く、古式土師器の割合は低い。台地上の竪穴住居等における遺構の検出割合では後者が高いが、器壁の薄く脆い古式土師器が採集時に採集からもれた可能性もあり、単純に傾向として捉えることは躊躇される。器種構成としては甕の割合が高いことが特徴である。

1～4は甕である。内外面とも粗い縦ハケで仕上げるが、4では内面にケズリが行なわれている。3、9は口唇部に刻みが施され、9は二重口縁となる。5は脚付甕（鉢）である。

6～8、10は壺である。底部はレンズ状に膨らみ、6では丸底化している。10は複合口縁壺の口縁片で、外面にヘラ描きの連続波状文が施されている。

11、12は鉢である。11では口縁が内傾し、12では上外方に開く。外面下半部はケズリにより仕上げられる。

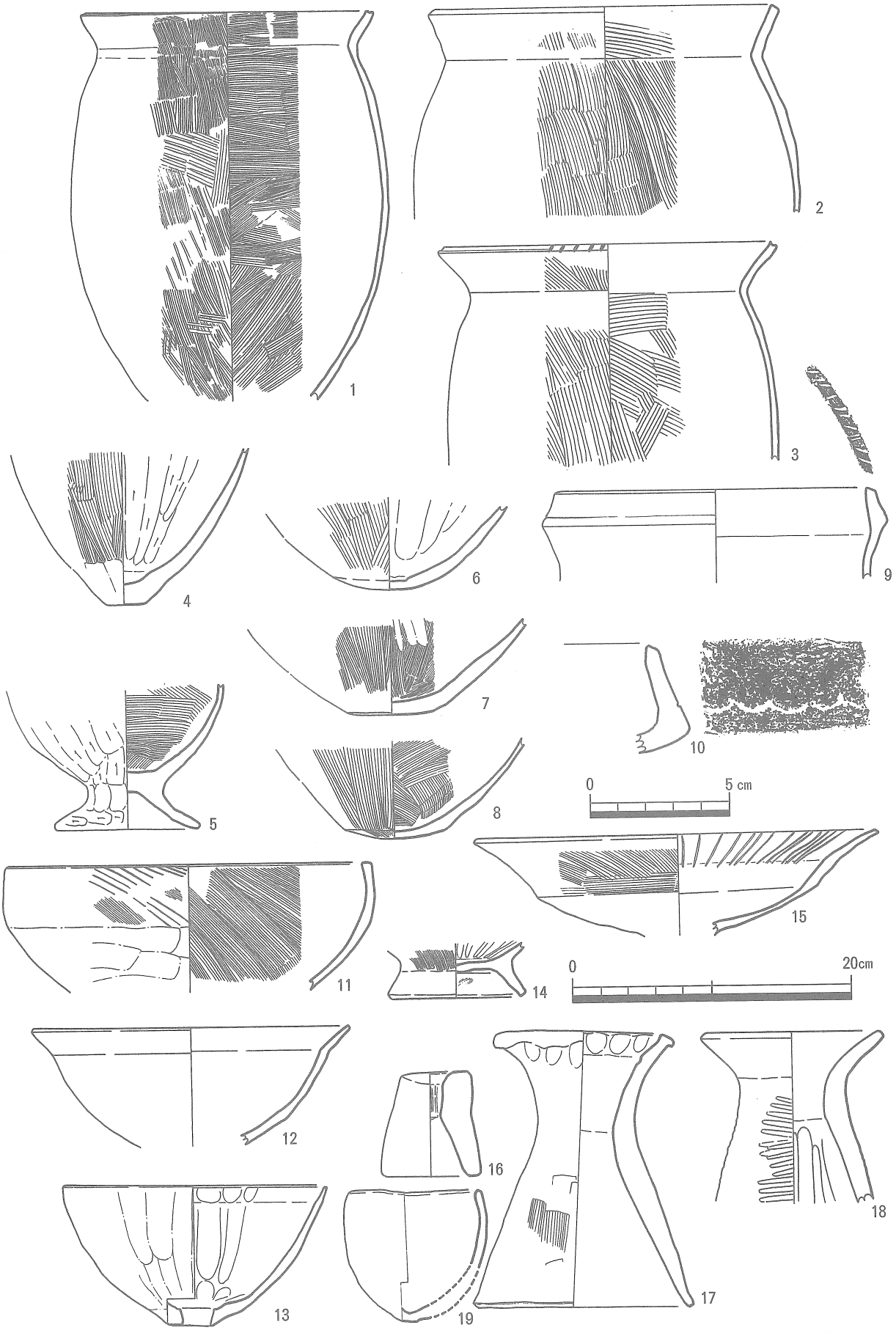
13は甑である。ほぼ完形で、平底気味の底部中央に径2㎝ほどの焼成前穿孔が施される。

15は高杯である。口縁部は外側に大きく開き、外面はハケ、内面はナデの後、縦方向の暗文状のヘラ研磨が行なわれる。

16は支脚で、明瞭な受け部を造り出さない。17、18は器台で受け部を造り出している。受け部は大きく上外方に反転している。外面を17ではハケ、18ではタタキにより仕上げている。

14は土師器椀の脚台部であろう。杯部外面は縦ハケ、内面はナデの後縦方向のヘラ研磨が認められる。

19はココヤシ状の杯である。低部はわずかに平底を残す。



第49図　第８地点出土土器実測図（10は１／２、他は１／４）

第１表　飯原門口遺跡出土土器観察表①

挿図番号	遺物番号	図版番号	器種	調査地点	遺構名	残存高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	備考
11	1	44	二重口縁壺	1	1号土器棺墓	30.9	20.9	—	角閃石・石英・長石・雲母	淡黄褐色	良好	
11	2	44	椀	1	2号土壙墓	6.6	7.4	—	長石・石英・角閃石	赤褐色	良好	
11	3	44	鉢	1	1号建物	7.6	8.9	4.3	石英・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	4		土師器小皿	1	1号土坑	1.3	8.0	6.8	長石・石英・雲母・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	5		土師器小皿	1	1号土坑	1.3	8.4	7.4	雲母・石英・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	6		土師器小皿	1	1号土坑	1.3	8.5	6.2	雲母・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	7		土師器皿	1	1号土坑	2.4	11.4	7.9	石英・長石・雲母	赤褐色	良好	
11	8		土師器小皿	1	2号土坑	1.2	8.8	7.0	金雲母・長石・石英・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	9		土師器皿	1	3号土坑	1.1	8.3	6.2	金雲母・長石・石英・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	10		土師器杯	1	3号土坑	2.2	10.9	8.0	金雲母・長石・石英・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	11		杯	1	3号土坑	3.7	13.0	8.5	赤褐色粒子・石英・長石	赤褐色	良好	
11	12	44	青磁椀	1	10号土坑	5.5	16.6	—		淡青灰色	良好	龍泉窯系
11	13		土師器小皿	1	10号土坑	0.9	9.1	7.8	金雲母・長石・赤褐色粒子	黄褐色	良好	
11	14		土師器小皿	1	10号土坑	1.1	8.4	7.1	金雲母・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	15		土師器小皿	1	10号土坑	1.1	9.2	7.6	金雲母・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	16		青白磁皿	1	10号土坑	2.2	10.6	7.0		淡青灰色	良好	
11	17		土師器杯	1	10号土坑	3.2	12.8	8.4	石英・長石・金雲母	肌色	良好	
11	18		土師器杯	1	10号土坑	2.9	12.4	8.8	金雲母・長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	19		土師器杯	1	10号土坑	3.0	12.4	8.8	長石・石英・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
11	20		土師器杯	1	10号土坑	3.1	12.4	8.6	石英・長石	暗褐色	良好	
11	21		土師器杯	1	10号土坑	3.1	13.7	10.3	金雲母・長石・石英	暗褐色	良好	
11	22		土師器杯	2	Pit 112	2.6	11.2	8.5	金雲母・長石・石英	暗褐色	良好	
17	1	44	甕	2	1号住居	17.5	20.7	—	花崗岩粒	暗褐色	良好	
17	2	—	甕	2	1号住居	13.2	25.3	—	長石・石英	橙褐色	良好	
17	3	—	甕	2	1号住居	10.6	20.6	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
17	4	—	甕	2	1号住居	9.2	18.1	—	長石・石英	淡茶褐色	良好	
17	5	—	甕	2	1号住居	6.2	20.2	—	長石・石英	淡茶褐色	良好	
17	6	44	広口壺	2	1号住居	13.5	13.7	—	花崗岩粒	淡黄褐色	良好	
17	7	—	甕	2	1号住居	16.1	—	6.7	長石・石英	黄白色	良好	
17	8	—	甕	2	2号住居	8.3	22.0	—	長石・石英	淡黄褐色	良好	
17	9	—	直口壺	2	2号住居	13.5	—	—	長石・石英・角閃石	淡黄白色	良好	
17	10	—	ミニチュア鉢	2	2号住居	5.6	10.8	4.8	角閃石・長石	淡黄白色	良好	
17	11	—	二重口縁壺	2	3号住居	10.2	17.0	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
17	12	—	甕？	2	3号住居	4.9	—	—	長石・石英	黒褐色	良好	
17	13	—	ミニチュア鉢	2	3号住居	4.4	10.2	2.0	角閃石・花崗岩粒	黄白色	良好	
18	14	45	壺	2	3号周溝状遺構	27.7	—	7.0	長石・石英	赤褐色	良好	
18	15	—	甕	2	3号周溝状遺構	6.5	22.2	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
18	16	—	甕	2	3号周溝状遺構	7.1	21.2	—	長石・石英粒	淡黄褐色	良好	
18	17	—	甕	2	3号周溝状遺構	31.6	—	—	長石・石英粒	紫褐色	良好	
18	18	—	高杯？	2	3号周溝状遺構	6.9	20.2	—	花崗岩粒	淡赤褐色	良好	
18	19	—	高杯	2	3号周溝状遺構	11.0	—	—	長石・石英	赤褐色	良好	
18	20	—	高杯	2	3号周溝状遺構	10.6	—	—	長石・石英	淡赤褐色	良好	
18	21		甕	2	3号周溝状遺構	9.4	—	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	

第２表　飯原門口遺跡出土土器観察表②

挿図番号	遺物番号	図版番号	器種	調査地点	遺構名	残存高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	備考
18	22		鉢	2	3号周溝状遺構	10.6	16.1	4.0	花崗岩粒	赤褐色	良好	
18	23	－	器台	2	3号周溝状遺構	10.6	14.8	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
18	24		椀	2	3号周溝状遺構	4.5	13.8	—	花崗岩粒	灰黒色	良好	
18	25	－	甕	2	Pit 30	8.0	19.8	—	長石・石英	淡茶褐色	良好	
18	26		器台	2	Pit 30	9.4	8.7	9.4	長石・石英	淡茶褐色	良好	
19	27	－	広口壺	2	2号溝	6.6	19.5	—	長石・石英	淡赤褐色	良好	
19	28	－	甕	2	3層	7.9	18.8	—	長石・石英	淡赤褐色	良好	
19	29	－	器台	2	3層	11.0	10.3	—	花崗岩粒	淡黄灰色	良好	
19	30		ミニチュア鉢	2	3層	4.9	7.1	2.5	花崗岩粒	黄白色	良好	
19	31	－	二重口縁壺	2	門口古墳	19.0	30.8	—	長石・石英	明橙褐色	良好	
26	1	－	甕	4	6号土坑	11.8	22.0	—	長石・石英	淡灰褐色	良好	
26	2	－	甕	4	6号土坑	8.7	18.5	—	石英・長石・金雲母	暗黄褐色	良好	
26	3	－	甕	4	6号土坑	3.7	—	7.0	石英・長石・金雲母・角閃石	暗灰色	良好	表面ススキ付着
26	4	－	甕	4	6号土坑	6.4	—	6.2	長石・石英・赤褐色粒子	黄白色	良好	
26	5	－	甕	4	6号土坑	－	—	—	石英・長石・赤褐色粒子	暗茶褐色	良好	
26	6	－	甕	4	6号土坑	－	—	—	石英・長石・黒褐色粒子	暗茶褐色	良好	
26	7	－	甕	4	6号土坑	－	27.6	－	石英・長石・金雲母	淡黄褐色	良好	
26	8	－	甕	4	6号土坑	－	24.5	－	長石・石英・角閃石	黄白色	良好	
26	9	－	甕	4	6号土坑	－	28.6	－	長石・石英・金雲母	暗褐色	良好	
26	10	－	甕	4	6号土坑	－	30.0	－	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
26	11	－	甕	4	4層	3.5	23.0	—	金雲母・長石・石英	淡黄褐色	良好	
26	12	－	甕	4	4層	－	21.8	—	石英・長石・金雲母	赤褐色	良好	
26	13	－	甕	4	1号土坑	3.1	23.6	—	長石・石英	淡赤褐色	良好	
26	14	－	ミニチュア鉢	4	3層	6.9	9.8	3.6	石英・長石	黄白色	良好	
26	15	45	高杯	4	1号溝	13.6	19.9	12.0	長石・石英	赤褐色	良好	
26	16	－	有段鉢	4	1号溝	5.9	16.3	—	長石・石英	赤褐色	良好	
26	17	－	器台	4	1号土坑	6.2	8.4	—	長石・石英	淡黄褐色	良好	
26	18	－	鉢	4	3層？	7.1	21.7	—	石英・長石・金雲母	淡黄褐色	良好	
26	19	－	高杯	4	3層	12.1	31.2	—	長石・石英・角閃石	赤褐色	良好	
36	1	46	鉢	5	2号住居	9.1	18.4	3.6	石英・長石	淡赤褐色	良好	
36	2	－	甕	5	5号住居	13.5	20.0	—	花崗岩粒	淡赤褐色	良好	
36	3	－	壺	5	5号住居	11.2	15.1	—	長石・石英・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
36	4	－	甕	5	5号住居	11.8	13.0	—	長石・金雲母・角閃石・石英	灰白色	良好	
36	5	46	器台	5	5号住居	19.6	—	12.8	石英・長石	淡黄褐色	良好	
36	6	46	甕	5	5号住居	18.3	—	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
36	7		甕	5	6号住居	21.4	21.3	—	花崗岩粒・雲母・角閃石	明赤褐色	良好	
36	8	46	甕	5	6号住居	40.0	20.1	5.1	花崗岩粒	茶褐色	良好	
36	9	－	甕	5	6号住居	35.2	19.6	—	花崗岩粒	黄白色	良好	
37	10	－	甕	5	6号住居	17.6	25.3	—	長石・石英・金雲母・黒色粒子	暗茶褐色	良好	
37	11	46	二重口縁壺	5	6号住居	19.0	20.8	—	花崗岩粒	淡黄褐色	良好	
37	12	－	二重口縁壺	5	6号住居	－	30.4	—	長石・石英	淡黄褐色	良好	
37	13	46	壺	5	6号住居	29.5	－	6.0	花崗岩粒	淡黄褐色	良好	
37	14	－	鉢	5	6号住居	9.8	13.8	—	長石・赤褐色粒子	淡赤褐色	良好	

第3表　飯原門口遺跡出土土器観察表③

挿図番号	遺物番号	図版番号	器種	調査地点	遺構名	残存高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	備考
37	15		甕	5	6号住居	8.7	14.6	—	花崗岩粒	灰白色	良好	
37	16		鉢	5	6号住居	9.8	10.3	—	長石・石英	茶褐色	良好	
37	17		鉢	5	6号住居	11.2	17.8	—	花崗岩粒	赤褐色	良好	
37	18		高杯	5	5号住居	5.8	27.3	—	花崗岩粒	明赤褐色	良好	
37	19		高杯	5	6号住居	6.2	27.1	—	石英・長石	明赤褐色	良好	
37	20		有段鉢	5	6号住居	11.2	20.1	—	石英・長石	灰黄色	良好	
37	21		椀	5	6号住居	3.2	7.7	—	花崗岩粒	薄黒褐色	良好	
37	22		椀	5	6号住居	6.0	11.2	—	石英・長石	黄白色	良好	
37	23		鉢	5	6号住居	7.2	—	—	長石・石英	黒褐色	良好	
38	24		甕	5	7号住居	43.6	43.6	—	長石・石英	黄褐色	良好	
38	25		甕	5	7号住居	5.6	23.6	—	長石・石英・角閃石	黄白色	良好	
38	26		甕	5	7号住居	11.1	—	2.2	花崗岩・角閃石	淡茶褐色	良好	
38	27	—	甕	5	7号住居	17.7	21.6	—	花崗岩粒	淡灰褐色	良好	
38	28	46	甕	5	7号住居	33.0	19.9	7.6	花崗岩粒	黄白色	良好	
38	29	—	甕	5	7号住居	18.2	18.8	—	長石・石英	淡黄褐色	良好	
38	30	—	甕	5	7号住居	18.9	11.8	—	長石・石英・角閃石	黄白色	良好	
38	31	—	直口壺	5	7号住居	11.6	26.0	—	長石・石英・角閃石	淡黄褐色	良好	
39	32	46	壺	5	15号住居	12.0	—	6.4	長石・石英・赤褐色粒子・角閃石	黄褐色	良好	
39	33	46	高杯	5	15号住居	11.7	—	—	石英・長石・角閃石	淡灰褐色	良好	
39	34	—	鉢	5	17号住居	13.8	14.2	—	花崗岩小粒	淡茶褐色	良好	
39	35	46	広口壺	5	17号住居	14.4	9.2	—	石英・長石・金雲母・角閃	明赤褐色	良好	
39	36	—	甕	5	溝状遺構	11.0	—	2.2	花崗岩・角閃石	茶褐色	良好	
39	37	—	甑	5	溝状遺構	12.7	—	5.2	石英・長石粒	赤褐色	良好	
39	38	—	高杯	5	溝状遺構	7.6	28.5	—	花崗岩粒	黄褐色	良好	
39	39	46	脚付壺	5	6号住居	12.0	20.1	—	長石・赤褐色粒子	赤褐色	良好	
39	40	—	椀	5	溝状遺構	6.0	13.8	—	石英・長石	淡黄白色	良好	
39	41	—	椀	5	21号住居	4.7	16.0	—	石英・長石	灰黄色	良好	
39	42	—	甕	5	7号住居	11.0	19.4	—	赤褐色粒子	赤褐色	良好	
43	1下	47	甕棺	6	1号甕棺墓	28.0	—	11.8	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
43	2上	47	甕棺	6	2号甕棺墓	80.0	64.8	16.0	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
43	2下	47	甕棺	6	2号甕棺墓	60.9	—	14.4	石英・長石・黒雲母・赤褐色粒子	淡橙褐色	良好	穿孔
43	3上	47	甕棺	6	3号甕棺墓	44.0	51.0	—	長石・石英・金雲母	黄褐色	良好	
43	3下	47	甕棺	6	3号甕棺墓	65.1	49.3	12.2	長石・石英・金雲母	赤褐色	良好	黒塗り、穿孔
44	4上	47	甕棺	6	4号甕棺墓	35.8	66.0	—	長石・石英・金雲母	赤褐色	良好	
44	4下	47	甕棺	6	4号甕棺墓	—	72.0	16.7	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
44	5上	48	甕棺	6	5号甕棺墓	61.2	—	—	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	黒塗り
44	5下	48	甕棺	6	5号甕運墓	45.5	—	13.4	長石・石英	淡黄褐色	良好	
44	6下	48	甕棺	6	6号甕棺墓	35.4	—	15.7	長石・石英	淡黄褐色	良好	
46	1	48	甕	6	1号住居	15.8	16.1	5.7	長石・石英	淡赤褐色	良好	
46	2	48	甕	6	1号住居	19.5	15.8	6.8	長石・石英・金雲母	淡赤褐色	良好	
49	1		甕	8	土器溜り	27.1	20.4	—	長石・角閃石・金雲母	淡茶褐色	良好	
49	2		甕	8	土器溜り	15.0	24.0	—	長石・石英・金雲母	淡茶褐色	良好	
49	3		甕	8	土器溜り	15.8	23.3	—	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	口唇部に刻み目

第4表　飯原門口遺跡出土土器観察表④

挿図番号	遺物番号	図版番号	器種	調査地点	遺構名	残存高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	備考
49	4		甕	8	土器溜り	11.1	11.0	3.6	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
49	5	46	脚付鉢	8	土器溜り	10.0	10.2	10.5	長石・石英・金雲母	灰褐色	良好	
49	6		甕	8	土器溜り	6.7	−	6.8	長石・石英・金雲母	淡灰褐色	良好	
49	7		甕	8	土器溜り	6.8	−	5.9	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
49	8		甕	8	土器溜り	7.1	−	7.2	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
49	9		二重口縁甕	8	土器溜り	7.7	21.6	−	長石・石英・金雲母	暗黄褐色	良好	口唇部に刻み目
49	10		二重口縁壺	8	土器溜り	−	−	−	長石・石英・金雲母	暗褐色	良好	口縁に波状文
49	11		鉢	8	土器溜り	9.1	25	−	長石・石英・金雲母	黄褐色	良好	
49	12	46	鉢	8	土器溜り	8.6	22.4	−	長石・石英・金雲母	淡黒褐色	良好	
49	13	46	甑	8	土器溜り	10.2	17.8	3.1	長石・石英・金雲母	灰褐色	良好	
49	14		椀	8	土器溜り	3.9	−	8.2	長石・石英・金雲母	淡赤褐色	良好	
49	15	46	高杯	8	土器溜り	7.4	29.2	−	長石・石英・金雲母	淡明褐色	良好	
49	16		支脚	8	土器溜り	7.6	4.8	7.2	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
49	17	46	器台	8	土器溜り	11.0	11.0	16.0	長石・石英・金雲母	淡褐色	良好	
49	18		器台	8	土器溜り	12.4	12.5	18.0	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	
49	19	46	鉢	8	土器溜り	9.4	9.1	1.4	長石・石英・金雲母	淡黄褐色	良好	

第5表　飯原門口遺跡出土石器・鉄器観察表

挿図番号	遺物番号	図版番号	器種	調査地点	遺構名	残存高(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	材質	備考
19	23	44	打製石鏃	1	Pit 28	2.4	1.9	0.4	1.1	サヌカイト	
19	32	45	扁平片刃石斧	2	Pit 31	10.1	4	0.8	67	硬質シルト岩	
19	33	〃	石庖丁	〃	3層	5.6	2.9	0.4	12	硬質砂岩	表面風化
19	34	〃	鉄製穂摘み具	〃	6号住居	2	4.2	0.8	7.4	鉄	
19	35	〃	紡錘車	〃	3号住居	4.4	−	0.7	24	結晶片岩	孔径4.8mm
19	36	〃	投弾	〃	4層	5.2	2.9	2.7	33	土製	
27	1	〃	紡錘車	3	4層	4.4	−	0.5	21	結晶片岩	孔径4.5mm
27	2	〃	石庖丁	〃	3層	7.3	3.5	0.6	22	硬質砂岩	
27	3	〃	磨製石斧	〃	3層	10.1	8.4	2.7	277	頁岩	
27	4	〃	〃	〃	1層～2層	11.2	4.2	4.3	504	玄武岩	
27	5	〃	〃	〃	3層	10.3	7.2	4.4	69	硬質細砂岩	表面風化
27	6	〃	〃	〃	3層	5.3	6.5	3.6	247	玄武岩	
27	7		〃	〃	4層	12.2	7.3	4.1	503	〃	
27	8	〃	磨製石斧	〃	3層	5.1	4.7	2.7	72	〃	
27	9	〃	〃	〃	3層	8.5	4.9	2.5	142	結晶片岩	
27	10	〃	〃	〃	3層	14.1	5.3	3.7	421	硬質細砂岩	敲打痕残る、側面研磨
27	11		打製土掘具	〃	4層	14.5	6.7	3.2	303	安山岩質石材	先端部摩滅
27	12		柱状片刃石斧	〃	3層	10	3.2	3.3	162	硅質シルト岩	
39	43	46	砥石	5	8号住居	14.2	4	3.1	195	粘板岩	
39	44	〃	〃	〃	8号住居	10.2	2.6	2.4	95	〃	
46	3	48	砥石	6	竪穴住居	36.9	16.2	7.8	4340	砂岩	

(9) 飯原門口遺跡出土ガラス玉の材質調査

福岡市埋蔵文化財センター
比佐陽一郎　　片多雅樹

前原市飯原門口遺跡からは、弥生時代後期～古墳時代前期に属するガラス玉１点が出土した。

ガラスは古代メソポタミアで生まれ世界各地に広がったとされ、日本では弥生時代前期から装身具を中心に用いられるようになる。これらガラス製品は、先学の研究により、その系譜や流通、技術発展の過程などが解明されつつあるが、これらは考古学的な調査は勿論のこと、近年の自然科学的な手法による研究成果が大きく反映されている。福岡市埋蔵文化財センターでは、平成11年度に分析装置が導入されたのを期に、奈良文化財研究所で長年ガラス資料の調査に携わってこられた肥塚隆保氏指導の元、ガラス資料の調査を進めている。以下、今回実施した蛍光Ｘ線分析法を中心とした調査の結果について報告する。

資料は鮮やかな淡青色を呈する小玉である。径は最大で4.90㎜、高さ（厚さ）3.00㎜、孔径1.41㎜を測る。重さは電子天秤による計測で0.09ｇである。これに水中での重量を測定し算出したところ、見かけの比重は2.39であった。この数値からは、このガラスが鉛を含まないアルカリ珪酸塩系であることが予測された。

実体顕微鏡による観察では気泡が数多く見られるが、独立した気泡の他に引き延ばされた形状を呈するものがあり、引き延ばされた管ガラスを折って再加熱し、小玉に成形したものと考えられる。小瀬康行氏の研究によれば、管状に成形された段階で引き延ばされていた気泡が、再加熱の過程で徐々に独立していくことが確認されている（小瀬1987）。

続いて蛍光Ｘ線分析装置による材質調査を行なった。この方法は試料にＸ線を照射し、試料に含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線）を検出器でとらえ、Ｘ線エネルギー分布と強度をピークとして表するものである。ガラスの場合、局部的に強いＸ線を照射するとその部分が変色を来す現象が起きるため、Ｘ線強度が小さくても検出感度の優れたエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法が有効である。この方法により、試料を破損することなく非破壊でデータをえることができる。

出土ガラスは見た目に変化がないようでも、長年土中に埋没している間に風化が進んでいる場合が多く、本来、詳細な調査を行うには、風化部分を物理的に取り除き、更に標準資料を用いた校正から成分の定数値を求める必要がある。しかし今回は遺物を損傷させずに実施したため、定性分析のみに止め、得られた蛍光Ｘ線の特徴と相対強度から判定することとした。判定には肥塚氏による分析結果と分類を参考としている。日本の弥生時代のガラスには、氏のこれまでの調査で、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛ガラスであることが知られている。このうち、アルカリ珪酸塩ガラスは、融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（K_2O-SiO_2系）と酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（$Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$系）と低いもの（$Na_2O-CaO-SiO_2$系）に区別される（肥塚1996、1998）。

なお分析条件は次の通り。

分析装置：エネルギー分散型微小領蛍光Ｘ線分析装置（エダックス社製／Eagle μ plobe）
対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流20kV・460 μ A／

測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜ ／測定時間300秒

分析の結果、マグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）の他、チタン（Ti）、鉄（Fe）、銅（Cu）、鉛（Pb）が検出された（第50図）。この中でも特にケイ素、カリウムのピークが強く出ており、２成分系のガラスであるカリガラスの特徴をよく示している。鉛も含まれているが、鉛珪酸塩ガラスに比べてそのピークは低く、着色に青銅が用いられたことによる混入の可能性も指摘されている（肥塚1996）が、詳細は不明である。

カリガラスは中国やインド、東南アジアで流通し、ヨーロッパ等西方には見られない組成のガラスであることから「アジアのガラス」とも言われている。日本では弥生時代に盛行し、中期後半から後期には、東海以西に広く分布が見られる。その多くは青色系統の小玉である。その後古墳時代に入る頃から次第に減少、古墳時代間後期には途絶える。これまで少ないながらも筆者らが調査してきた北部九州地域の資料の中で銅着色の淡青色は、福岡市南八幡遺跡（小林2000）や長崎県大島村長畑馬場遺跡（本田2000）において本資料と同時期のものが確認されている。前者では小玉94点のうち69点、後者では60点中19点が淡青色のカリガラスであった。

今回は非破壊による定性分析であったが、精密な組成の定量値を求めることは無理でも、これまでに行なわれてきた調査成果との比較により、ガラスの種類を知るという目的は十分に果たすことができた。弥生時代の先進地であった北部九州では、このガラス資料が数多く出土しており、今回の調査成果が今後の研究の一助になれば幸いである。

最後になりましたが、調査の機会を与えていただいた前原市教育委員会岡部裕俊氏、並びに日頃ガラス資料の調査についてご指導いただいている奈良文化財研究所の肥塚隆保氏に感謝申し上げます。

参考文献

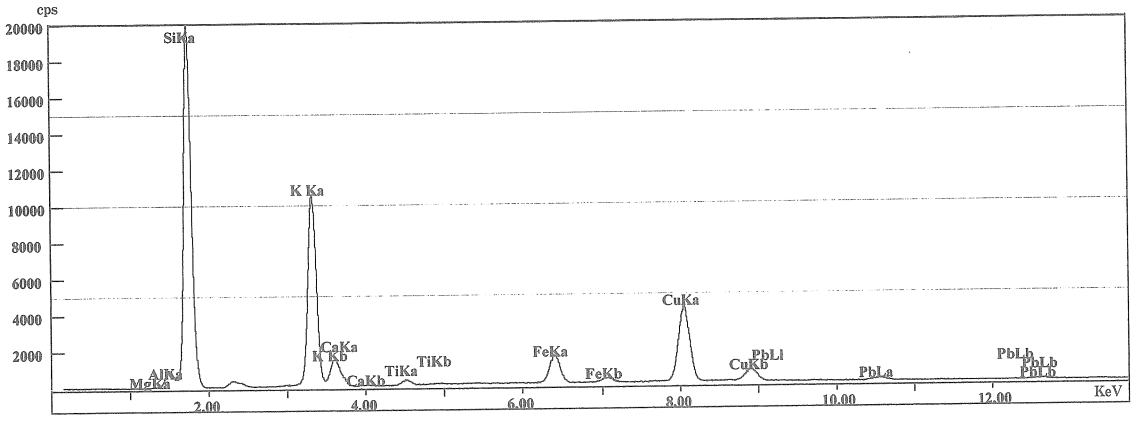
肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻８号　財団法人古代學協会

肥塚隆保1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史的変遷」『保存科学研究集会1998』奈良国立文化財研究所

小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第２号　日本考古學會

小林義彦編2000『南八幡遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集　福岡市教育委員会

本田秀樹編2000『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第13集　長崎県大島村教育委員会



第50図　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析結果

Ⅲ．おわりに

今回の成果について集落の変遷を中心にその大要を簡単にまとめておく（第50図）。

縄文時代の集落

調査では第６地点で落とし穴１基を確認したのみで住居遺構等は確認できなかった。遺物としては第１地点、第３地点で石鏃、磨製石斧、掻器などが出土したが、北西150ｍには縄文時代前期～後期の長野宮ノ前遺跡が位置しており、現状では集落の外縁部にあたると推定される。

弥生時代前期後半～中期前半の集落

弥生時代では第６地点で甕棺墓を含む弥生前期末～中期初頭の墳墓群が、第３地点において弥生時代前期後半～中期初頭にかけての土器、石器がまとまって出土した。竪穴住居などは確認していないが、第３地点の東部緩斜面に遺物が集中して出土していることから、第２地点～第３地点間の未調査区に同時期の住居遺構が遺存する可能性は高い。飯原門口遺跡の北西150ｍには弥生時代早期～前期の墳墓群である長野宮ノ前遺跡が立地しており、この墓地群を形成した集落の動向も注意される。

第６地点で調査した甕棺墓群は墓壙の切り合い等は確認できなかったものの、形態的特徴から前期末～中期初頭の範疇で捉えられる。３号下甕については肩部にわずかにくびれを持ち胴下半が下膨れの形態を示すなど、壺形土器に近い古い様相を示しており、２号甕棺については、胴部下半がスマートになり最大径も胴部上半になるなど甕形土器により近い新しい様相がみられる。また、同時期の甕棺墓群は長野川流域周辺では、西3.5㎞に石崎大坪遺跡、東５㎞に位置する三雲・井原遺跡（石橋地区、仲田地区、柿木地区）、川原川流域の高祖榎町遺跡に見られるのみであるが、これらの周辺の甕棺と比較すると底部が大きく、やや作りが悪い。

甕棺墓群内には土壙墓が点在しているが、遺存状態が悪く調査範囲の制限もあり、甕棺墓と土壙墓との関係など課題が残されている。また、上記周辺遺跡でも墳墓群の全貌が把握されたものがなく、いましばらく資料の増加を待って検討したい。

弥生時代中期後半～古墳時代前半期の集落

中期前半から中葉にかけて一時集落の情報は途絶えるが、後半以降、古墳時代前期まで継続して営まれる。遺構、遺物は第１地点から第７地点まで分布し、集落規規模は東西200ｍほどである。台地の南半部では顕著な遺構の分布がみられなかったことから、南北は概ね50ｍ幅で東西に長く分布していることになる。

確認した竪穴住居は27棟、掘立柱建物は４棟で、竪穴住居は第２、第５地点に集中する傾向が高いが、これとは反対に住居遺構を全く検出できなかった地区もあり、集落が一定の距離間隔を置いて営まれた複数の小集団よって構成されていたことをうかがわせる。しかしながら、未調査地区、既に削平された遺構の存在を考慮してもさほど大規模な集落であったとは考えられない。

竪穴住居は全て丘陵北西ないしは西斜面で検出し、後世の開墾等によって遺構の多くは大きく削平を受けていた。住居の構造で目を引いたのは、屋内の集水坑と屋外排水溝である。第２、５地点の竪穴住居住居の多くは上記施設を設けており、弥生終末期以降ではその普及率が極めて高く、第５地点の６号、21号住居では屋外排水溝の共用も認められる。

排水施設発達の直接の背景には当該地が透水性に乏しい赤色ローム土を基盤層としているという

地質的特性が起因していることは明らかであるが、施設そのものは糸島地方での検出例は珍しく、類似遺構が飯氏遺跡群で検出された程度である。外来の技術を受容したことによるのか否か、周辺地域資料との比較検討作業が必要である。

第１地点、第７地点で各１棟検出した弥生時代の大型掘立柱建物は柱間が短く柱径が太いこと、柱穴が深いことなどから高床式建物と推定される。建物の性格については今後の課題としたい。

住居群の変遷について、第２、第５地点とも竪穴住居が各群単位で繰り返し建て替えられた状況が顕著であるが、第５地点Ｂ住居群のように一定範囲内で８度の建て替えが行われた住居群もあれば、同Ｄ、Ｅ群のように１～２度の建て替え程度にとどまるものもあり、住居数は古墳時代前期後半に最大となることから、弥生後期末～古墳時代前期にかけて飯原門口集落では安定した集落経営が行なわれ、とりわけ古墳時代前期後半に集落の規模が最大級となったものと推定される。

古墳時代の大型掘立柱建物

第３、４地点では大型掘立柱建物が検出された。集落域の中心部に位置し、桁行をほぼ南北方向に向けた大小２棟の掘立柱建物で、１号建物は南北に独立棟持柱を配し、南北桁行８間（9.88ｍ）、東西梁行５間（6.72ｍ）を測り、床面積は66.4㎡ほどになる。隣接する１号溝出土土器から古墳時代前期後半（布留式新段階）と推定した。

周辺調査地を含めた一帯の遺構分布をみると、第２、第５地点では掘立柱建物群と同時期の竪穴住居が確認されているが、掘立柱建物と第２地点竪穴住居群とは50ｍ、第５地点とは25ｍほど離れており、掘立柱建物周辺では竪穴住居が検出されなかった。南に土地区画のためとみられる杭列、地山整形が認められることと合わせて考えれば、掘立柱建物の周囲に一定の空間が確保されていたものと推定される。集落内において特別な役割を担っていた可能性が高い。

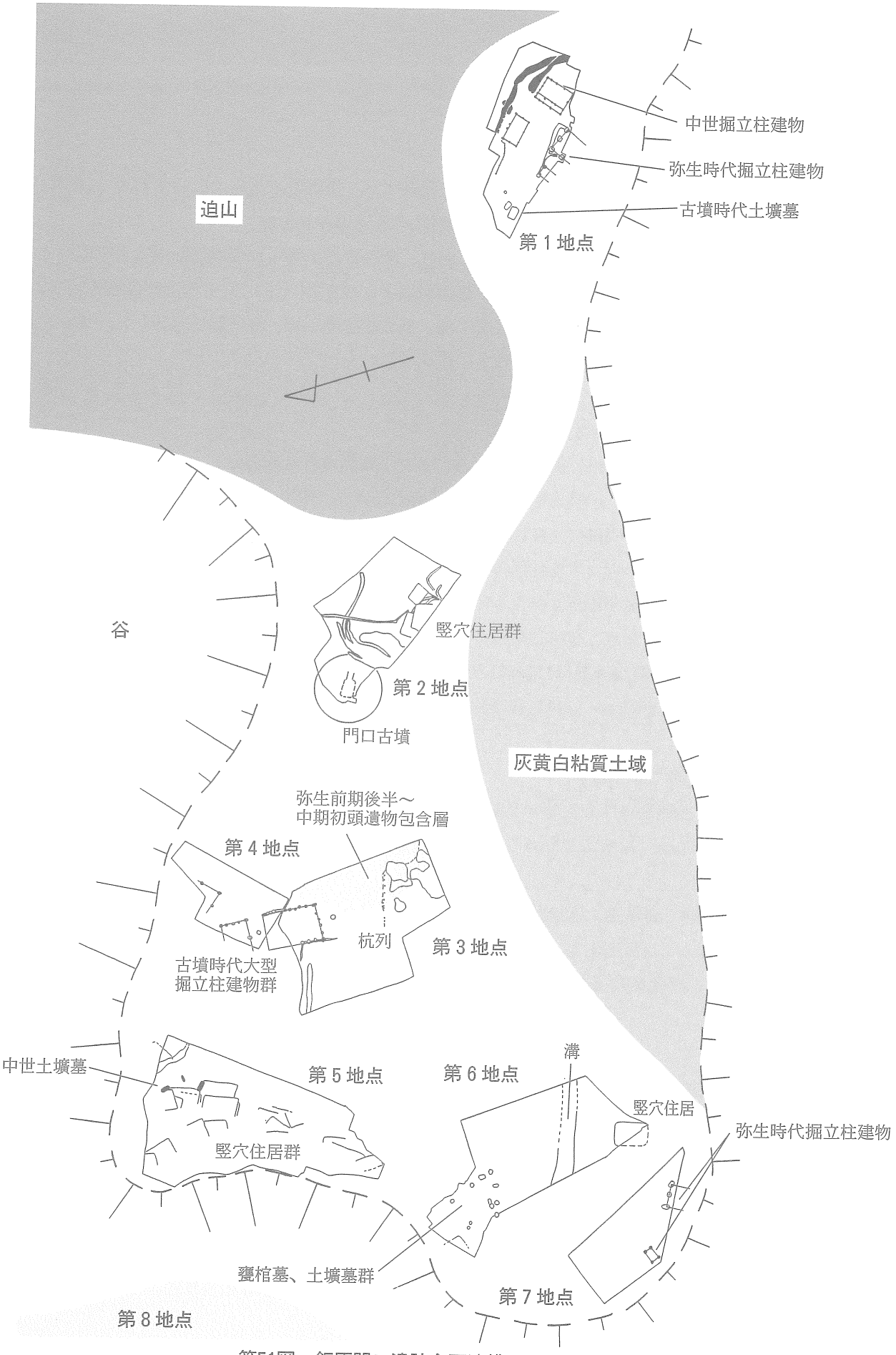
調査成果のなかでは、この大型建物の性格についてこれ以上検討を進めていく資料には乏しいが、遺跡周辺の山上を見渡すと日明、長尾山、長嶽山、迫山古墳等、長野川上流域の歴代首長墳と目される古墳群が立地していることを留意しておきたい。

近年、糸島南部を二丈町深江から前原市三坂、末永、日向峠を経由して早良平野、福岡平野、筑紫平野にいたる陸路が存在した可能性が指摘された。具体的な道路遺構等は未確認であるが、古墳時代の主要遺跡、怡土城、雷山神籠石、怡土城、神功皇后伝承遺称地の分布等により、古墳時代から歴史時代にかけてこのルートが存在した可能性が高いとした（瓜生秀文　1998）。飯原門口遺跡の北西にある川付地区は上記ルート上にあり、ここから長野川を渡り末永まで約７㎞ほどは人里から離れた山裾丘陵地帯が続くため、川付地区は交通の要衝であったと推定される。遺跡は川付地区に隣接し、また、ここから長野川水系の平野を北に一望できる絶好のビューポイントでもある。この地の首長居館としては申し分ない立地といえる。この大型建物の性格を諮る上での一仮説として提示しておきたい。

平安～鎌倉期の集落

第１地点で、掘立柱建物、溝、土壙等を確認した。遺構、遺物の出土状況から鍛冶関連施設と推定される。当時の集落の中心は明らかでないが、遺構の分布状況から既調査地点周辺である可能性は低い。調査地点の東に現在の飯原集落があり、古代以降当地の中心的集落となった可能性がある。

参考文献　角浩行編『川原川右岸地区遺跡群Ⅱ』前原市文化財調査報告書　第65集　1998年



第51図　飯原門口遺跡主要遺構配置図

付編１．川付宮ノ前遺跡

(1)　はじめに

川付宮ノ前遺跡は大字川付字宮ノ前一帯に所在する。長野川と長嶽山に挟まれた、東西150ｍ南北220ｍの範囲に立地する縄文時代～古墳時代の集落遺跡である。

遺跡は当初予想したよりも広く分布しており、圃場整備工事中に現場巡回中に須恵器などを採集したため、工事の一時中断を指示し、遺構が削平される300㎡について緊急に調査を行った。

調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、柱穴等を確認した。また、耕作土中から須恵器片、土師器、碧玉製管玉１点を採集した。

(2)　竪穴住居（図版42，43、第52図）

調査区の東端で検出した。周壁は失われ、タタキ締められた床面によってプランをかろうじて確認できたにとどまる。不整方形プランで5.34ｍ×5.4ｍ。やや東壁側に向かって幅広となる。床面からは住居に伴う明確な主柱は確認できなかった。

カマド　造り付けのカマドを住居の西壁中央で確認した。既に壁はほとんど失われ、カマド基底部と焚き口、燃焼部が確認されたのみである（図版43、第52図）。焚き口はカマドの主軸から若干左方向に寄っており、焚き口部は径44㎝程度の円形に掘りくぼめられていた。燃焼部は平面系が方形を呈し、幅114㎝奥行114㎝ほど。カマド内から土師器片が出土したが実測できるものはない。出土した須恵器から６世紀後半代の竪穴住居と推定される。

(3)　掘立柱建物（第52図）

東西方向に主軸を向ける２間×２間の建物である。桁行5.64ｍ、梁行4.26ｍを測る。柱穴は円形プランで径30㎝～72㎝ほどであった。竪穴住居に近い時期の建物と推定される。

(4)　採取遺物（図版48、第52図）

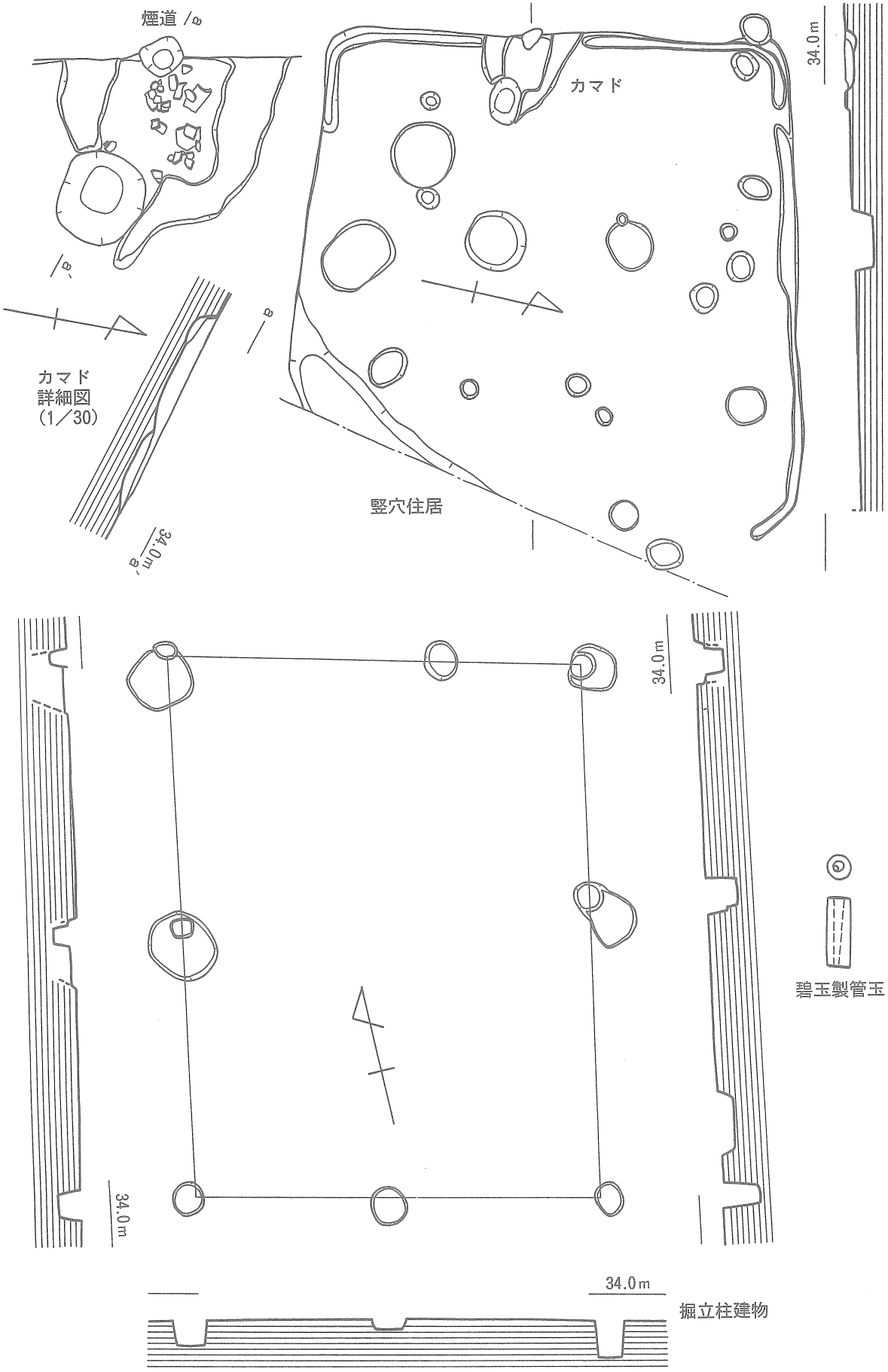
現場表土中から須恵器片などとともに碧玉製管玉が１点出土した。長さ2.59㎝、径8.5㎜、重さ3.3ｇを測る。片側穿孔であることから、古墳時代の遺物であろう。

(5)　まとめ

遺跡の周辺では日明古墳群、長嶽山古墳群、別処古墳群など前期から後期にいたるまで古墳が長期にわたり築造されているが、遺物の散布地として６～７世紀の土器が採取された荒毛遺跡が知られる程度で、これまで当該期の集落、とりわけ５世紀後半以降の集落については資料がなかった。

当遺跡は荒毛遺跡とほぼ同時期の集落と推定され、当該期の集落の存在がはじめて調査によって確認された。古墳墳時代後期以降の当地における集落のあり方、引いては次代律令期の長野（名加乃）郷の所在地等を考える上で基礎的な資料となるものと考えられる。

第52図　川付宮ノ前遺跡遺構配置図（1／100）



第53図　竪穴住居、掘立柱建物（1／60）と出土碧玉製管玉（1／2）実測図

付編２．長嶽山古墳群、長尾山古墳、林崎古墳

(1)　長嶽山古墳群（図版49、第53図）

長嶽山古墳群は前原市大字川付字長嶽山705、783、784、785番地に所在する。長野川中流左岸の標高60ｍほどの独立丘陵の頂上部を中心に、南北320ｍ東西50ｍに分布する古墳群である。

古墳はすべて宇美八幡宮の私有地内にあり、昭和４年に刊行された『糸島郡誌』「長糸村」史蹟名勝の項では11基の古墳が紹介されている。現在、古墳は神社を中心に南側に６基、北側に８基の古墳が遺存しており、総数14基である。さらに、現在の社周辺は大きく地山が削られ、整地されており、本来この付近にも古墳が立地していた可能性がある。

１号墳（奥の院古墳）は784番地に所在する。推定全長35ｍ、後円径26～27ｍ、後円高５ｍ、前方部長10ｍ、幅10ｍ、高さ1.5ｍほどの２段築成の前方後円墳である可能性が高まることとなった。従来は直径20ｍほどの円墳と考えられていたが、円丘の南側に低平で短い張り出し部が確認され、これまで墳裾と考えられていた標高63ｍ前後の傾斜変換線が墳丘２段目のテラスで、古墳はさらに一回り大きくなり、張り出し部が前方部にあたると推定される。後円部墳丘はで１、２段目ともに墳丘斜面に葺石がめぐる。主体部は明らかではないが、後円部墳頂には径８ｍほどの平坦面がある。隣接する２号墳（円墳）は古式横穴式石室が主体部で１、２号墳が裾を接するように位置し、ほぼ同時期に築造されたと推定されることから、１号墳の主体部にも古式横穴式石室が採用されている可能性は高い。５世紀中頃の築造であろうか。

宇美八幡宮縁記には１号墳について「神宮皇后の朝鮮出兵に際し、武内宿禰に仲哀天皇の御棺を香椎から移して陵を築かせた」と記され、仲哀天皇御陵と伝えられている。現在も「奥の院」とよび、古墳裾を注連縄で囲い、氏子によって手厚く保護されている。

２～６号墳は783番地に所在する。

２号墳は径14ｍほどの円墳である。墳裾は１号墳と近接しているが切り合ってはいないことから、双方の古墳には築造時期が近いと推定される。主体部は割石を小口積みした全長1.9ｍ、奥壁、前壁幅1.1ｍの古式横穴式石室が確認された。盗掘壙は、玄室右袖コーナーに開けられ、一枚岩の閉塞石が残る。

３号墳は径８ｍほどの円墳である。墳頂部に大きな盗掘坑がある。

４号墳は３号墳の北に隣接する径6.5ｍの小円墳で墳頂部に大きな盗掘壙がある。

５号墳は参道が墳丘中央を南北に縦断する。径8.5ｍほどの円墳である。

６号墳は径12ｍの円墳で、墳頂部に盗掘壙がある。主体部は横穴式石室と推定される。

７～13号墳は785番地に所在する。

７号墳は本殿北に墳裾の痕跡だけを留める、鐘付堂建設に伴い破壊されたらしい。

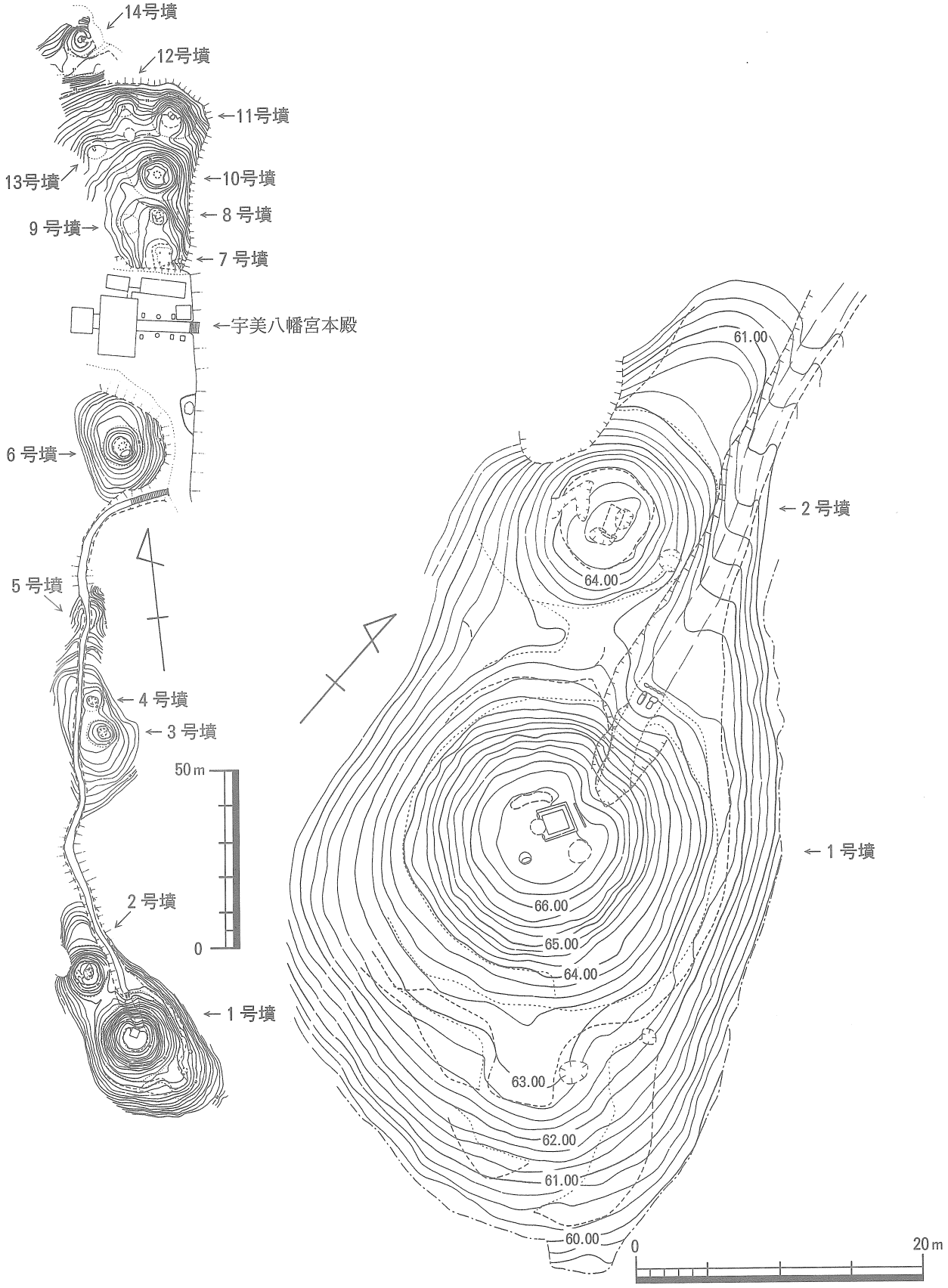
８号墳は径ｍの円墳である。墳頂部に大きな盗掘壙がある。

９号墳は径３ｍほどの低墳丘の小円墳と推定される。主体部は未確認である。

10号墳は径８ｍほどの円墳である。墳頂部に大きな盗掘壙がある。

11号墳は径10ｍほどの円墳である。主体部は横穴式石室で北向きに開口している。玄室の北壁に盗掘壙が開けられている。

12、13号墳は石棺系石室を主体部とする小円墳である。



第54図　長嶽山古墳群（1／1600）と１、２号墳墳丘測量図（1／400）

14号墳は705番地に所在する。丘陵北斜面中腹に築かれた横穴式石室を主体部とする円墳で、径12mほど。南側の周溝は元形をよく残している。玄室天井部から盗掘壙が開けられている。

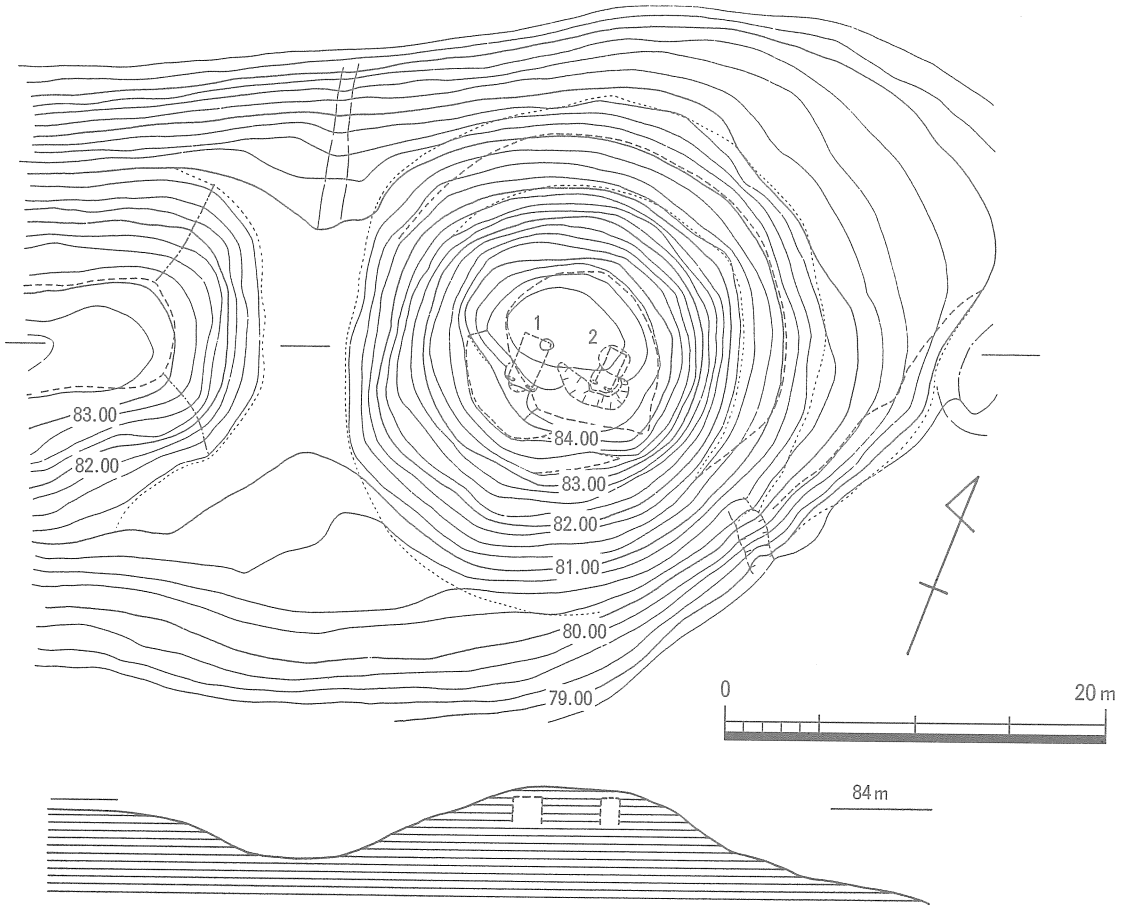
2号墳では埋葬主体に割石を小口積した古式横穴式石室が採用され、5世紀代の築造と推定され、3、4、6、8、9号墳では丘陵頂部に古墳が立地することから2号墳に後続する6世紀代の築造と推定される。また、12、14号墳では巨石を用いた6世紀末～7世紀にかけて築造された後期横穴式石室が採用されていることから、古墳は概ね南から北に順に築造されたと推定される。

(2) 長尾山古墳（旧川付古墳）（図版50、第54図）

長嶽山1号墳から急峻な谷を隔てて南の尾根の先端に立地する円墳である。これまで川付古墳と呼ばれていたが、川付とはこの地一帯の総称で、地区内には、多くの古墳が遺存することから、混乱を避けるため小字名をとって長尾山古墳とする。

古墳は、径27m、高さ5m、の円墳である。墳丘は2段築成で、1段目のテラスは標高81mのコンターラインあたりが想定できる。墳丘は尾根筋を東西13m、南北19m、深さ2mにわたり切土整地し墳丘下半部を整えた後、墳丘上半部を盛土により成形築造したものと推定される。墳丘斜面には葺石がめぐる。

墳頂部には径8mほどの平坦面があり、その南縁に主軸をほぼ南北に向け、並行して築かれた2基の古式横穴式石室が南面して開口している。西のやや大きな石室を1号石室（全長2.54m、奥壁



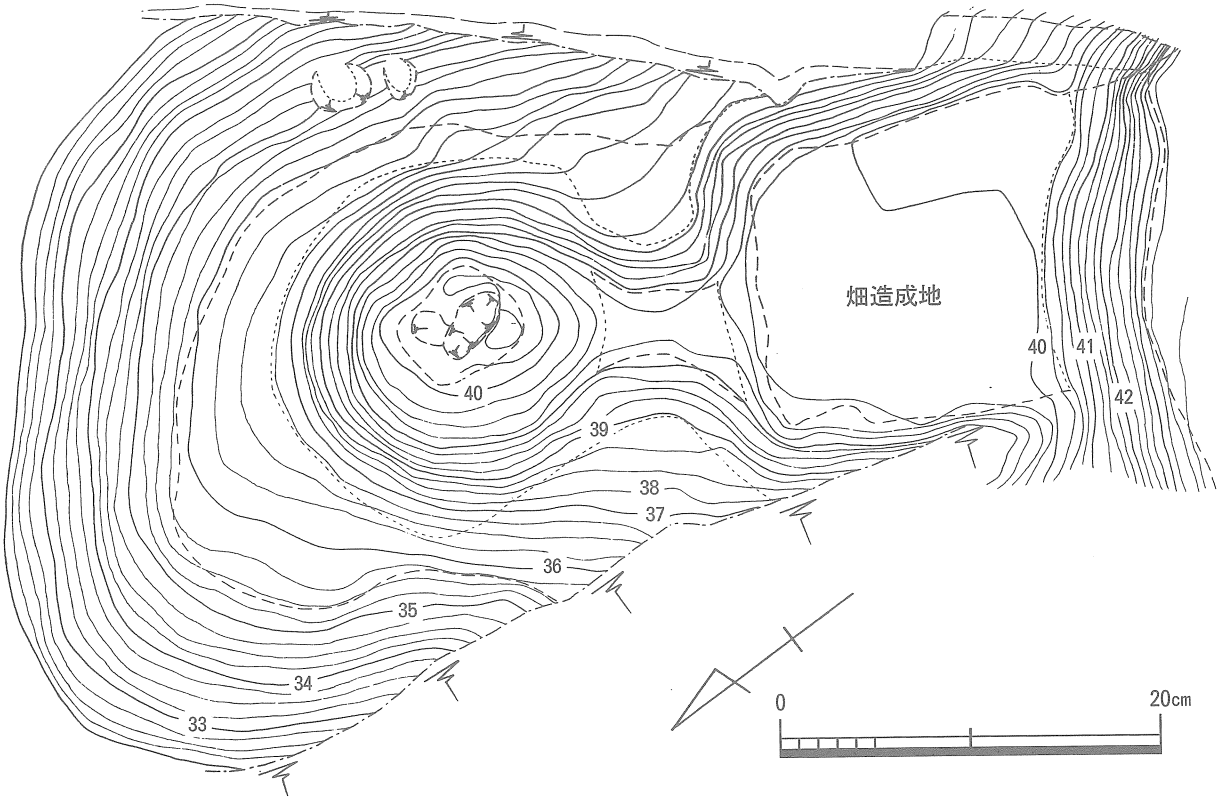
第55図　長尾山古墳墳丘測量図（1／400）

幅1.6m、天井石１枚)、東のやや小型の石室を２号石室（全長2.15m奥壁、幅0.9m以上、天井石２枚）とした。石室内には多量の土砂が流れ込み床面は確認できない。壁面は割石を小口積みし、羨門袖石は左右に平石を立てて仕切るが、１号は両袖、２号は片袖である。石室の構造から５世紀中頃の築造と推定される。

(3)　林崎古墳（第55図）

林崎古墳は前原市大字本字林崎434－１番地に所在する前方後円墳である。長野川を隔てて左岸には流域における拠点集落と推定される本遺跡群が立地する。昭和47年頃、墳丘の北東隣接地の土取りの際に玄武岩板石を組み合わせた箱式石棺墓が出土し、棺内から人骨とともに内行花文鏡片が出土している（前原町文化財調査報告書第35集 1992)。

墳丘は南丘陵地から派生する尾根筋の先端部、標高36～40mの地点に立地する。尾根の先端を地山整形を主体として築造されたものと推定される。現在は前方部先端部が農地造成によって後背地から押し込まれた土砂によって埋没しているため、平面プラン等の詳細はわからないが、後円部は比較的良好に保存されている。後円径は20m、高さは3.75m、クビレ部の幅は12mを測る。全長は30m弱であろう。段築、葺石等は確認できなかった。後円部墳頂部には径４mほどの平坦面があり、大きな盗掘坑が残っている。　古墳の築造時期については付近で出土した土師器から布留式古段階と推定される。



第56図　林崎古墳墳丘測量図（1／400）